
どうしてこうなるんだ！

みずきなな

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

どうしてこうなるんだ！

【Nコード】

N2502P

【作者名】

みずきなな

【あらすじ】

ネットゲーム大好きな男、高坂行幸こうざかみゆきがある事を切っ掛けに女になった！？

MMOでネカマだった『行幸』が天罰だと言われて女になった。『行幸』が元の男に戻るまでの『行幸』と関わりある人物の私生活・ハプニング等を描いた小説です。

パソコンパーツ・MMO・コスプレ・メイド喫茶・アニメ・という要するにアキバ系ネタが結構入っています。しかし作者は広く浅くというレベルの知識ですのでマニア系小説ではありません。軽く気

軽に読んでください。多少はエロ要素あり。※期待するレベルではない！

プロローグ 【どうしてこうなった!?!】 (前書き)

こういうの書いてみたいなーっていうのがあり今回の小説をUPしました。

書きたい事を書いているだけです。深く考えるようなものにするつもりはありません。周辺描写や状況描写、人物描写等はあまり深く書いてません。どちらかというと台本っぽいかもしれません。気軽にお読みください。

※MMO話題・パソコン話題・コスプレ話題・架空アニメ等が出ます。抵抗のある方は読むのを控えてください。

プロローグ 【どうしてこうなった!?!】

おい…

罰ばちがあたるっていうのは有り得る事のか？

人は嘘はついてはいけないのか？

人を騙す事は罪なのか？

人は常にそういう事を考えて生きなければいけないのか？

正直に言うとな俺はまったくそんな事を気にした事はなかった…
そうだよ、昨日まではな…

☆☆☆☆☆☆

師走も迫った12月の某日
その事件は起こったんだ…

くそ…どうしよう、もう家を出なきゃバイトに間に合わねー！

俺は心の中でそう叫びながら慌ただしくアパートのを走り回る。
時計を見るともうアパートを出る時間じゃないか。やばい…急が
なきゃいけないのに…このままじゃバイトの始まる時間に合わ
なくなるぞ…

端から見た奴らは思うだろう。早く行けばいいじゃないかって。

そうだよ、そうなんだよ…それが正解なんだよ…準備をしてアパートを出れば良いだけなんだ。

でもな！行けない理由ってというのがあるんだよ！

取りあえず言いたい 「どうしてこうなった！」

俺に今重大な事件が発生している。何があったんだって？
それはな…

「朝起きたら俺が女になってたんだよ！」

何を冗談を、最初から女なんだろう？呆けてるだけじゃないのか？
って言われそうだが違う！

それじゃ俺が単なる精神異常者みたいじゃないか！

俺は元々男だったんだ！くそ…マジでどうしてこうなった…

俺は今の現実を受け入れられないで頭を悩ませていた。

そしてどうしてこうなってしまったのかの理由を考える。すると
ふと昨日の出来事を思い出した。

ん…ま、まかさ…罰！？なのか？

そうだ…昨日…あのMMOをやった時のあいつの言葉！？

「…罪深き奴め、天からの罰を受けろ！」

え！！？これがその天罰なのか！？…ってというか天罰とかありえるのか！？

☆☆☆☆☆☆

某MMO

俺はPTメンバーとダンジョンから戻ると町へとキャラを移動させる。

今日はメンバー構成も良く、結構経験も稼げて良かった。

俺が倉庫へキャラを移動させた時、運営からの告知が流れた。

【システム放送】今から一時間に限って特別な強化アイテムを販売します。是非この機会にお買い求めください。

強化アイテム？興味はあるけどまたどうせ課金なんだろう。

こういうMMOは基本は無料だが、アイテムを課金にしてお金を儲けている。

だからお金のある奴は高価なアイテムを買いあさって全てにおいて有利に遊んでいる。

俺？俺は時給の少ないバイト生活で金なんてない。余程の事でも無い限りは課金なんてしない。

いくらいいもんでも金が無いから買えねーんだよ！運営の策略なんかに乗るかよ。

俺は心の中でそう叫んだ。

：しかし多少は気になるな：少しだけ見に行くか。

俺は人混みの、じゃねーな：キャラゴミ？いや：なんか違う：まあ他プレイヤーのキャラがいっぱいいるお店にキャラを移動させた。重い：キャラ居すぎだろ：

お店の中はこれでもか！と言わんばかりにキャラで溢れかえっている。俺のパソコンのスペックはそんなに良くない。ここまでいっぱいキャラが居るとパソコンの動作がすぐく重くなりキャラが点灯を始める。

重すぎるし、アイテムだけ確認したらここから移動しよう…俺がお店のNPCをクリックしようとした時に個人チャットが入った。

【個人…フローワード】あ、みゆきじゃん！何やってんだよ

個人チャットを送ってきたのは同じ同盟の馬鹿男のフローワードじゃねーか…

こいつは盗賊なんだが、敏捷と器用さが無いという致命的な欠陥を持つ。

マジでステータスリセットすればいいのと思うが、これが個性なんだと言い切っている。

【個人…MIYUKI】え？私？ちょっとさっきシステム放送があった強化アイテムが気になって見に来たの

言葉使いで解るだろうが、俺は女キャラを使っている。そして女になりすましている。要するにはネカマと言う奴だ。だからフローワードも俺を女だと思い込んでいる。と思う。

【個人…フローワード】お、俺もなんだ！じゃあ一緒に覗いてみるか

【個人…MIYUKI】うん

俺は点滅を繰り返す店のNPCをクリックした。すると買い物メニューが画面に広がる。

どれだ？さっき放送であったやつは…ええと…お？これか？

俺はNEWと書かれたアイテムをクリックした。

ええと…この強化スクロールは武器を含む装備品全ての強化を失敗なしに+10まで強化可能にする。

なんだと！おい！待て！こんなの売っていいのかよ！チート級の課金アイテムじゃねーか！！

ちなみにこのゲームは武器強化や防具強化には強化スクロールを使うのだが、失敗すればアイテムを五割以上の確率でそのアイテムを失う可能性があるという超リスクの高い強化なのだ。

要するに十回連続で成功するなんて神の領域だ。だからチート級なんだ。

『ついに狂ったか運営！』そう思いつつも俺は金額をクリックして見る。

表示されたのは十万PPプレイポイント：千PPがリアルマネーで百円だ。というところの強化アイテムは一つ一万円かよ…

頭・足・手・体・武器・装飾三個全部を強化すると八万円かよ！
おいおい…廃課金者じゃないと無理じゃねーか…

くそ運営がこんなの売るなよな…こんなのを廃人に買われまくって強化されまくったらゲームバランス崩れるじゃねーかよ…

運営つぶれそうなのか？資金ショートか？大丈夫なのかよ…

俺がそんな事を考えているとまたフローワードから再び個人チャが来た。

【個人…フローワード】おい！見たかよ！すげーな！でも一つ一万円な上に販売時間が一時間かよ…くそ…給料まだだしな…

おい…まさかこいつ買うつもりなのか？こいつはそんなに金持ちだったのか？

俺はカチャカチャとキーボードを叩く。

でも高いし…私は無理だから…と入力、エンターっと

【個人…MIYUKI】でも高いし…私は無理だから…

【個人…フロワード】おい…みゆき

ん？何だ？

【個人…MIYUKI】はい？

【個人…フロワード】これ欲しいのか？

欲しいのかって言われたら欲しいだろ？普通はそう思うだろ。

【個人…MIYUKI】それは…ほしいけど…

【個人…フロワード】じゃあ…今度のオフ会に来てくれる？約束してくれるなら俺が買ってやるよ

ぶ…な、何だと…買ってくれるだど！？しかし…オフ会に参加しろと来たか…

…俺はネカマだし…行ったら正体がばれる…とてもじゃないけど行けないぞ…

でもアイテムは欲しい…どうする！どうする俺！ってどっかで聞いたなこの台詞…

【個人…フロワード】無理か？まあ無理は承知んだけどな。お前は一度もオフ会来た事ないからな

ネカマだから行けないって言うんだよ！

【個人…MIYUKI】ごめんね…私は色々忙しくって…

【個人…フロワード】全装備分買ってあげようかと思ったんだけどな…残念だ…

え？今何て？全装備分！？うおおおおおお！全装備って八万円！八万円だぞ！おい！正気かよ！？

待てよ…ここで行くといっておけば…このチート強化アイテムが手に入るんだぞ？

そ、そうだな…別にオフ会に行かなくてもいいじゃないか…断る

理由はなんともなる！よし：

【個人…MIYUKI】い、行こうかな…次のオフ会…
入力してしまったあああ！

【個人…フロワード】お！マジかよ！やった！約束だぞ！じゃあ買
ってやるよ！

こうして俺は強化アイテムを買って貰ってしまった：

【個人…フロワード】俺さ、みゆきに逢えるの楽しみにしてるから
な！

【個人…MIYUKI】あはは…あまり期待しないでね？

【個人…フロワード】OK、OK、よし、じゃあ俺は落ちるから。
また明日な！

【個人…MIYUKI】うん、おやすみなさい

その後だよ…俺がログアウトしようと思ったら：

【個人…】おい、お前

何だ？このなれなれしい個人チャットは？

発信は誰だよ…ええと…あれ？名前が見られないぞ？バグか？
つと…一応返すか

【個人…MIYUKI】はい？どなたでしょうか？

【個人…】お前は本当に女か？

ちょ！何だよ！いきなりそんな事を聞いてくるんだ？と…まあキ
ヤラは女だし。このゲームで俺の事をネカマだって知ってる奴はい
ないはずだ…しかし、まずはこう入れておくか…

【個人…MIYUKI】キャラは女の子ですよ

【個人…】　「違う、お前の本体、ようするにプレイしてるお前だよ」

「やっぱり俺の事か？俺はどうみても男だろ…が、俺はこのゲームでは女で通ってるんだ…よし…」

【個人…MIYUKI】　「え？私は女ですけど？何か？」

【個人…】　「そうか…俺はお前みたいな人を騙す奴が大嫌いなんだよな」

【個人…MIYUKI】　「え？何か言いたいのでしょうか？」

【個人…】　「人を騙して生きてる奴は嫌いって言ってるんだよ」

「人を騙すって！？って…さっきのあれの事か！？でもこいつは現場に居なかっただろ？」

「知ってるはずない…じゃあ俺がネカマって事か？確かに…俺は男だ…だから女のMIYUKIは存在しない…だから騙したと言えば騙した事になる。」

「しかし何なんだこいつは？結局何を言いたいんだ？」

【個人…MIYUKI】　「それで何の用事ですか？私はそういう冗談に付き合っている時間はないんです」

【個人…】　「…わかった、お前は女なんだな？人は騙してないんだな？」

【個人…MIYUKI】　「はい」

「ここは嘘を突き通しておこう…」

【個人…】　「…罪深き奴め、天からの罰を受けろ！」

そう言われた瞬間にリアルの俺の体に電気のようなものが走った！

「いててて！」

何だ！？漏電か！？俺は慌ててパソコンの周囲を見たが漏電した気配もない：

パソコンだって電源が入ったままだ：

くそ：何だったんだよ：俺はパソコンの画面を覗き込んだ。

するとさっき俺に来ていた個人チャットが消えている：

またバグか！？運営しつかりしろよな：デバグくらいちゃんとしねーと人が居なくなるぞ？

再度確認したが、ログにもさっきの怪しい個人チャットのやり取りは残っていないかった。

うーん：結局何だったんだ？まあいいか：もう一時だし：明日も朝からバイトだし、寝るか：

俺はトイレに行ってから布団に入って寝た。

☆☆☆☆

確か昨日はこんな感じだったよな：

寝るまでは男だったんだ：寝る前にトイレに行ったから覚えてたんだ：

で、朝起きてからトイレいったら：無いんだよ！俺の大事な物が！

それでまさかと思って慌てて鏡をみたら：俺は鏡を見て動揺した

んだ：

鏡の中に居たのは身長156センチくらいの黒髪でショートヘアの女の子だったんだ！

肌は色白ですべすべしてて：でもって胸も結構あって：顔だって悪くない：

でもまあ俺の女の子の総合評価としてはすごく良くもなく悪くもなく普通よりはちょっと上かなーってレベルだけだな：って何を自分に評価をつけてんだ：俺は。

そんな事じゃないんだよ！くっそー！マジで何でこうなったんだよ：

天罰とか信じるつもりはないが、取りあえず女になった事は現実だ。

ふと時計を見るともう九時になっている。

もう九時じゃんか！やばいぞ：バイトに間に合わない：

もういい！取りあえずバイトに行く！どうせアパートに居ても何の解決にもならない！

と、俺は後先に事も考えずに取りあえずバイトに向かった。

ブログ 【どうしてこうなった!?!】 (後書き)

いかがでしょうか?メイン小説の合間の息抜きで書いてます。

更新速度は期待しないでください。といいながらこっちの更新が先かもしれないんですけどね…それにしても性転換ものばっかだ。

第一話【俺は行幸だ!】

某街の一角にあるパソコンショップの前

とりあえずはバイトしてるパソコン店の裏口までは来てみたが：
俺は裏口の前で考え込んでいた。

こんな姿で入ったら怪しまれたりするか？まあ普通に考えて怪しむだろうな。俺が女になったなんて誰も知らない訳だし：

やっぱり今日は帰るか？だがしかしだ！店長に高坂の野郎無断欠勤しやがって！と言われたくない！

別に俺は女になった事実を人に隠す必要はないし、こうなったのは俺のせいじゃないんだからな！

：いや、少しだけ俺が悪かったのかもしれないけど：

よ、よし、こんな場所で悩んでも仕方ないな、入るぞ入るぞ！

「あれ？貴方は誰？バイトの面接か何かかな？」

俺が店の裏口から店内に入ろうとした時、聞き覚えのある声が：
ん？この声は？

声のした方向を見るとそこにはこの店で一緒に働いている女、永なが井いすみれ堇すみれがいた。

堇すみれの身長164センチで何時もダボダボのパーカーを着ている。

これはきつとペタンコ、要するには貧乳、ようするに凸がない胸を隠す為だと予想している。

という事でこいつは多分Aカップだ。ごめん、ちがった。絶対にAカップだ。

いつもダサイ赤縁の眼鏡をしていて、茶色に染めた髪を後ろで纏

めている。

見た目がダサいののにこいつが付けている眼鏡がさらにマニアっぽさを引き出している。

色気？色気なんてない、化粧なんかしてた時を見た事もない。

ちなみに勝手な俺の考えだが、こいつは彼氏なんてメンドクサイ！っていう考えで、家ではゲーム（主にMMOは基本）っていう奴だ。おまけだが、こいつは負けず嫌いで俺はあまり好きじゃない。

「堇、俺だよ行幸だよ」

「はあ？何を言ってるの？もしかしてあんたって行幸の知り合いかなんか？」

「俺がその行幸だって言ってるんだよ」

「え？何？貴方って女だね？貴方の言ってる行幸って名前は女っぽいけど男なの、わかってるかな？」

まあこれが普通の反応だよな。しかし俺はお前に本人だと納得させる事の出来る情報を大量に持っている。見てろよ。

「ふふふ…俺が行幸だっていう事をお前に認めさせてやるからな！」

「ちょっと！？何？貴方本当に誰？」

「永井堇二十歳、彼氏いない暦二十年、というかパソコンが彼氏！好きなゲームの系列はMMOとアクションRPGで今やっているゲームは三つある。キャラ作製は男キャラが多く、職業は戦士系が好み。三つやってるゲームの中でデビルスレジェンドというMMOで戦争同盟のガイアパワーに所属。ちなみにキャラレベルは七十二で

最近の悩みは四次職を何にするかだ、そして：」

俺のマシガントークが炸裂する度に堇^{すみれ}の顔色が変わってゆく。

「少し別の方向から堇^{すみれ}の趣味を暴露すると、実は某アニメが大好きで、家には某アニメのポスターが大量に張ってある。今月の二十四日にクリスマス限定のブルーレイBOXが出る予定であり、既に予約済：予約特典の等身大ポスターが楽しみで仕方ない！」

「ま、まって！わかった！もういいから！そんな大きな声で言わないでよー」

堇^{すみれ}は顔を真っ赤にして俺の口を塞ごうとした。がしかし俺はすばやく身をかわした！

「ふん、認めたか？俺が行幸^{みゆき}だと！」

「ちよ、ちよっと取り合えずこっちに来てよ！」

堇^{すみれ}は俺の手を持つと強引に店内に連れ込んだ。

「遅いぞ！堇^{すみれ}！もうすぐ開店時間だぞ！何やってんだ！行幸^{みゆき}の馬鹿もきやしねーし！今日は午前中お前と行幸^{みゆき}しかいないんだぞ」

大きな声でそう言いながら奥から体格の良い男が出て来た。

こいつは雇われ店長の茨木恋次郎^{いばらきれんじろう}だ。

いばらぎではなくいばららしい。そんなのはどうでもいいだろうと突っ込みたい。俺が気になるのは名前だ！何でれんじろうなんだよ！すっげー似合ってるねーし！

店長の年齢は二十六歳で身長は184センチ、体重は九十キロもある。

大学時代はアメフトをやっていたらしい。

ちなみに色黒で角刈りだ。パソコンよりは運動が好きらしい。

何故にこのパソコンショップの店長をしているのかがまったくわからない。

おまけだが、パソコンに対する知識はこの店の従業員では最低レベルだ。

「違うの！店長聞いてよ！この子が俺は行幸みゆきとか言っておかしいんだよ！で、この子に裏口の前で捕まって遅くなったの！私はちゃんとお店のは来てたんだから！」

「言い訳はそれだけか？」

「言い訳じゃないの！本当なんだって！この子がおかしいの！」

堇すみれは懸命に店長に言い訳をするが店長は聞く耳を持ってない。

「おい！俺はおかしくない！俺は行幸みゆきだって言ってるじゃねーかよ！」

「ほら！ほら聞いたでしょ！この子やっぱおかしいの！ねー店長！」

「そんな言い訳はいいから。あと友達かなんだか知らないが、店員以外は裏口から店に入れるな！わかったか？」

堇すみれが言った事はまったく信じて貰えないみたいだな。

こいつがいつも遅刻の時に嘘つくからだ。自業自得だ。

「だって…この子が行幸みゆきから聞いたのか知らないけど、私の事を色々知っててさ…」

店長は堇すみれの話を断ち切るかのように大声を出した。

「そうだ！行幸みゆきだ！あいつ！無断で休みやがって！電話だ！電話！」

そう言うのと店長は携帯電話を取り出して電話をかけた。

というかまだ十時三分だぞ？まだ遅刻かもしれねーってレベルだぞ？なんでもう休みになってんだよ…

「行幸みゆきの野郎、まだ寝てるとかねーよな」

店長はそう言って携帯を耳に当てると、すぐに俺のポケットの中の携帯が鳴り響いた。

その瞬間にまさかという表情で店長と堇すみれが俺の方を見た。

俺は平然とその携帯をポケットから取り出すと電話に出てこう言
ってやった。

「はい、高坂ですが？」

店長は無言のまま電話を切った。

「あれ？切れたぞ？おかしいな…店長からだっただけけど何の用事だ？」

俺はわざと大きな声で言ってやった。

堇すみれがまじまじと俺の顔を見る。そして全身をべたべたと触りだし

た。

「おい！何すんだよ！気持ち悪いな！」

俺がそう言う^{すみれ}と堇は俺から数歩離れた。

「嘘…マ、マジで行幸^{みゆき}なの？ど、どう見ても女じゃん…」

横にいる店長は俺は信じないぞという表情で俺に向かって言った。

「き、君は…行幸^{みゆき}の友達かな？」

「違う、俺が行幸^{みゆき}だ」

「えっと…どこでその携帯を拾ったのかな？」

「だから俺が行幸^{みゆき}だ！この携帯は俺のだ」

「本人は何処にいるのかな？」

「俺が行幸^{みゆき}だって言ってるだろ！」

店長は俺の目の前で固まった。

「し、しかし…君は女の子…だよな？」

「ああ！俺は今女だが、しかし俺が行幸^{みゆき}だ！」

店長は頭を抱えて店の奥へと歩いて行った。

「おい！何処いくんだよ！俺が行幸みゆきだって言ってるのに信じないのかよ！おい！」

「ねえ…本当に行幸みゆき？なの？」

横すみれから堇すみれが俺に話しかけて来た。

「そうだよ！最初っからそうだって言ってるじゃないか」

「正直さ、まだ信じれないんだけど…もしそうだとするとさ、どうして女になったの？もしかして性転換手術したの？」

「あほか！一日で性転換手術が出来るかよ！」

「じゃあ、元々女だったとか？」

「馬鹿か？俺が女だったとかありえるはずねーだろうが！」

「じゃあ何でよ！」

堇すみれとそんなやりとりをしていると何時の間にか店長が戻って来ていた。

「君、ちょっと質問いいかな？」

「俺？」

「ああ、そうだ」

「いいけど？何だ？」

「じゃあちよつと質問をするから…」

俺は店長の用意した高坂行幸みゆきに関する質問にすべて即答で答えた。
ついでに俺の知っている店長の秘密まで暴露してやった。
すると店長はついに俺を行幸みゆきだと認めた。

「おい…行幸みゆき、どうしてそうなったんだ…」

店長が青ざめた顔で俺に向かってそう言う。

何でって…昨日のあの出来事を話せばいいのか？話しても信じて貰えるのか？

正直あれは誰にでも信じれるような事じゃない…

でもなあ…言わないと他に原因がある訳じゃないしな…

俺は昨日の事を店長と堇すみれに話した。

☆★☆☆☆☆

「マジ？そんな事あるの？じゃあ何？女になったのって天罰って事？」

「そういう事になるのか？わかんねーよ、俺にも」

「私は行幸みゆきがネカマやってた事は知ってたし、正直きもい奴だと思

ってたけど、でもまさかそれを利用して人を騙しちゃうなんてね」

「騙してない！まだ騙してない！」

「でも、その時点では男だった訳だしさ？まさか女装してオフ会に行く気だったの？」

「女装！？そんな事出来るか！もし女装したとしてオフ会に行ったらどうなると思う？変な奴だと思われて誰も相手をしてくれなくなるだろうが！？」

「じゃあ行く気無かったって事でしょ？じゃあ結局は嘘つきじゃん」

「う…」

確かに…俺は何も言い返せなかった。

「ちょっとお前ら、もうその話はいい。えっと取り合えずはお前をみゆき行幸だと信じるとしてだ、で？このお店でお前は働きたいのか？」

何て質問をしてくるんだ…俺がここに来てる理由が解ってないな…

「おい、店長」

「何だ？」

「俺はここをクビになったら路頭を迷う事になるんだ！」

「ふむ…で？」

「働きたいから今日も出勤して来てるんだろ？」

「なるほどな…そんなになってまで働きたいとか、すごいな？俺ならショックで立ち直れないぞ？」

「俺だってショックなんだよ！まるで俺が何も感じてないみたいに言うな！」

「まあまあ…しかしだ…その格好はちよつとな…」

そうか、俺の今の格好は男の時の服だ…上も下も全てがぶかぶかだな。

「ん？この格好か？仕方ねーだろ…男物しかないんだからな」

店長は少し考えると言った。

「よし、俺がなんとかするか…」

何とかするって…何するんだ？まあそれはいいとして…

「店長」

「何だ？」

「もう十一時四十分だぞ？開店しなくていいのか？」

「うお！しまった！^{すみれ}葎！店をあけろ！」

「え！？あ、はい」

まったく：まあ取り合えずは俺だと信じて貰えたからいいのか！？
こうして女としての第一日がスタートしたのだ。

第一話【俺は行幸だ!】（後書き）

後書き人物紹介!?

高坂行幸【こうさかみゆき】

年齢二十四歳

髪の色 黒

身長173センチ（男） 156センチ（女）

体重 65キロ（男） 50キロ（女）

一応大学を出たがネットゲームに没頭しすぎて就職戦線から脱落した。

大学時代から働いていたパソコンショップにそのまま居座る。

ある日某MMOをプレイ中に謎の人物から「∴罪深き奴め、天からの罰を受けろ!」と言われて女になってしまった。

元々ポジティブな性格で考えるよりは行動するタイプなのもあり、そのうちどうにかなると現在は女として生きている。

第二話【俺に変な格好させんじゃねー】

店長がボケてたせいでオープン予定の十一時をかなり過ぎてしまった。

取り合えず俺も手伝ってお店のオープン準備をする。

「店長！昨日入荷したこのマザボは何処に置けばいいんだ？」

「ん？それは特価品コーナーだな、POPを後で作っておくから取り合えず積んでおいてくれ」

「特価品コーナーか、わかった」

俺はダンボールに入ったマザボに防犯タグを付けて店の入口付近の特価品コーナーに山積みにした。

「店長！防犯タグがもう少ないぞ！」

「わかった！発注しておく」

俺にとってのいつもの会話が店内に響く。

「ちわーヤマソ運輸ですー」

いつも配送してくれるヤマソ運輸のお兄ちゃんが店内に荷物を持って入って来た。

俺が店内を見渡すと輩すみれも店長もいねー…仕方ない、俺が受け取っておくか…

「はい、いつもご苦勞様です」

俺はそう言っていていつも配送してくれるお兄ちゃんの前に出た。

「あれ？新しく入った方ですか？」

「え？」

「え、あ、すみません、一度お会いしてますっけ？僕は初めてお会いしたと思ったのでつい」

そっかそっか！俺は今女だからこのお兄ちゃんは俺を新しく入った従業員だと思ってるんだな？

「いやいや、別に構わないですよ。つとここに印鑑でいいのかな？」

「あ、はい、ここをお願いします」

俺は自分の印鑑をぽんと押した。

「どうもありがとうございます！あれ？高坂さん？ここにもう一人高坂さんって人がいませんでしたっけ？」

受領印で押した俺の印影を見て運送屋のお兄ちゃんが言った。

「ああ、俺が前からここに…ごもごも！」

俺が前からここにいる高坂本人だと運送屋のお兄ちゃんに教えようとしたら、突然現れた店長に手で口を封じられた。

「ヤマソさん、はいはい何時もご苦労様です。この子は今日入ったんですよ。これから宜しく願いしますね！」

「あ、そうですか。わかりました！宜しく願いしますー！それじやまた」

運送屋のお兄ちゃんは駆け足で店を出て行った。

そして店長はやっと俺の口から手を離れた。

「おい！何すんだよ！いきなり口塞ぎやがって！」

「おい！行幸みゆき！お前は余計な事を話すな！」

「何でだよ！俺は高坂行幸みゆきなんだ！何で俺の事を話したらダメなんだよ！」

「馬鹿か？この世の中の何処にお前が行幸みゆきで本当は男だったけど女になっちゃった、とか信じる奴がいるんだ？俺と堇すみれだって今だに半信半疑なんだぞ？」

「なんだ！？店長と堇すみれは俺が行幸みゆきだって信じてくれてるんじゃないのかよ！」

「信じてる！しかしな？信じてる中にも本当かな？っていう考えもある。仕方ないだろ？だいたい俺は男が女になったなんて漫画かアニメがエロゲーでくらいでしか見たことない」

「げ…そんな顔して漫画読んでアニメ見てエロゲーしてんのかよ…気持ちわる！」

店長の顔が見る見る赤くなってゆく。

「煩い！俺にどんな趣味があるうが俺の自由だろうが！」

中々自分の事を話してくれなかった店長がここまで簡単に自分の事を暴露するとは：

しかしまあ：このお店の店長をやっている理由が多少はわかった：そうか！だから店長はエロゲーの仕入れがうまいんだな：こいつ：そっち系のマニア！？

まあいいや：別にどうでもいいか。

「はいはい、自由ね、自由ですよ、そんなにムキになるなよ。俺より大人なんだろう？」

店長の眉間がひくひくと動いている。

「行幸^{みゆき}：お前は…」

「ちょっと！店長^{みゆき}！行幸^{みゆき}！二人とも何してんのよー陳列手伝ってよー」

堇^{すみれ}が店の奥からグラボが入った箱を持って出て来た。

「おい堇^{すみれ}！店長の秘密がわかったぞ！店長は実はエロゲーがだい：ごもごも！」

俺は再び店長に口を塞がれた！

「もう：いいいよな？行幸^{みゆき}君…」

そう言って俺を見る店長の顔がむちゃくちゃ怖いぞ…やべ…言い過ぎたか…

流石にマジで喧嘩したら俺は殺される可能性がある…しかし苦しい！押さえる力が強すぎる！こいつ力加減を知らないのかよ！く…仕方ない…

「もご！もほむほ！…むほほ」

俺は小さく何度も頷きながら一応謝った。
けど何を言ってるのかわかんねーなこれは。

「え？店長の秘密がどうしたって？」

商品を陳列している輩すみれが今頃になって反応している。
こいつは自分の興味のない話題だといつも反応が遅い…

「何でもない。早く陳列を終わらせるぞ。行幸みゆきも手伝え」

店長は落ち着きを取り戻した声でそう言った。
取り合えず俺は大きく頷いた。するとやっと店長は手を離してくれた。

「はあはあ…店長…力強すぎだ…俺は今女なんだぞ…手加減くらいしてくれ…」

店長は蔑あざむんだ目で俺を見ている。

「お前が悪いんだろ？もう馬鹿な事はするなよ？あとお前が女になった秘密は絶対に他人にばらすなよ？わかったな」

「う…わ…わかったよ…」

その後、俺は黙って開店準備を手伝った。

☆☆☆☆☆☆

開店準備が完了した。

店長は俺に店の奥にある事務所に待機しているように言うとお店から出て行った。

という事は店には^{すみれ}堇が一人にいるという事か…
まあ平日の朝なんて客は来ない。ましてや火曜日なんて新商品の発売もないので余計に来ない。

一人で大丈夫だろ…

二十分くらい事務所に籠っているとやっと店長が戻ってきた。

戻って来た店長の手には怪しげな紙袋が…

おい…なんだ？その手にもった紙袋は…そしてその妙に嬉しそうな表情は…

すっげー怪しい…まさか俺に何か変な事をさせるつもりじゃねーのか？

もしや…秋葉原はメイド喫茶も多いし…まさかメイドの格好をさせるとか？無いよな…

しかし…もしかするともしかするぞ…

「待たせたな？お前が着れそうな服を借りて来たぞ」

「店長」

「何だ？」

「まさかその紙袋の中身はメイド服とかじゃねーよな…」

俺のその一言で店長が固まった。

そして何故わかった！？と言わんがばかりの表情で俺を見ている。
どうやらまさかの的中だったらしい…

「おい…的中かよ？しかし…なんで俺がメイド服なんか着ないとい
けないんだ？」

「う…それは…」

「別に普通の服でいいんじゃないのか？」

「いやこれには…」

「それも店長の趣味なのか？」

「いや…」

まったく…何を考えるんだか…俺は確かに女にはなったが男とし
てのプライドを捨てた記憶はない！

そんなメイド服なんか着れるはずないだろうが！

俺がそう心で思っていると店長は無言で袋から俺が予測したとお
りのメイド服を取り出した。

そして俺の目の前のテーブルに置く。

「何だよ？目の前に出したってこんなもん俺は着ないぞ？だいたい俺が女になった初日からメイド服を着せようとか普通は考えないだろ？もっと^{いたわ}労って心配してくれんじゃないのか？」

「お前は今日の朝言ったよな？女になってもここで働きたいって？」

「ああ、言った…」

「だから俺は店長としてお前の仕事を考えたんだ。今日はこれがお前の制服だ。お前がこれを着て店頭でキャンペーンをする。もしも俺の提案を拒むのであれば…今日のバイト代は払わない」

「え!?!」

な、何だこいつ！開き直りやがった…俺がメイド服を着て店頭でキャンペーンって何だよ…

それに今日のバイト代を払わないだど!?!くそ…これって脅しじやねーかよ…

しかし…俺は雇われバイトだ…権限は店長の方が上…

「どする？^{みゆき}行幸君」

苦汁の選択だ…くそ…バイト代…バイト代がないと生活が…

俺の頭の中での優先順位…バイト代＞プライド…

何だかちよつと悲しくなったぞ…

「わ、わかった…やるよ…やればいいんだろ…」

俺が力の抜けた声でそう言うのと店長はすごい笑顔になった。
おいおい：何をそんなに喜んでるんだよ：俺は悲しいんだぞ：

☆☆☆☆☆☆

俺は屈辱のメイド服姿をついに店長の前に晒した。

「おお！思った以上に似合ってるぞ！よかったな行幸^{みゆき}」

「おい、そんな事を言われても俺は全然嬉しくないぞ：逆に最悪だよこんな格好させられて：」

ボタン！事務所の入口が開く音が聞こえた。

「うわあ！何よその格好！なんで行幸^{みゆき}がメイドの格好してんの！」

たまたま事務所に入って来た堇^{すみれ}は俺を見るや否や驚きの表情で言った。

うわ！見られたくない奴に見られた！っていうかどうせ見られるのか：

「お、堇^{すみれ}か。どうだ？行幸^{みゆき}のメイド姿は？思った以上に似合うだろう？」

「そうね、ちょっと顔を赤らめて恥らっている演出なんていかにもって感じね：悔しいけど可愛いわ：」

「おい待て！俺は恥かしくって仕方ないから顔が赤くなってんだよ！演出じゃねー！」

くそ…恥かしい…なんで俺がこんな目に合うんだよ…

「そうね店長、あと一つだけ気になるポイントがあるわ」

「ん？それは何だ？」

「よし、待っててね…」

そう言うとき、^{すみれ}堇は更衣室に入って行った。

そして一分もしないうちにピンクのポシェットを持って出て来た。

「おい、何だよそれは」

「これ？これはお化粧道具」

「ちょっと待てよ、お前は化粧しねーだろ？なんでそんな物を持ってるんだよ」

「何それ？私が化粧しないってどういう事？必要のない場面ではしないだけよ！私だって女なんだから化粧する時だってあるわよ！」

^{すみれ}堇はかなり不満そうな表情でそう言った。

「俺はお前が化粧した姿みてねーからそう言ったただけだろうが！化粧するなら見せてみろよ！」

「何よ！わかったわよ！今日は無理だけど今度見せてあげるわよ！」

俺と堇^{すみれ}が言い合いをしていると店長が割って入った。

「おいおい、喧嘩するんじゃない。で？堇^{すみれ}は行幸^{みゆき}に化粧をする気なのか？」

堇^{すみれ}はニヤリと不気味な笑みを浮かべると「そうよ」と言っ
て俺を見た。

「待て！なんで俺が化粧をされないといけないんだよ！」

「何でって？スッピンでもかわいいけどさ、化粧すればもっと良くなると思うからじゃないの」

「いや、別にこのままでいい！俺は女じゃねーんだよ！」

「女だろ？」

「女でしょ？」

こいつらハモリやがった…くそ…

「行幸^{みゆき}にはうちの店のマスコットガールになって貰うんだから、可愛くなつたほうが良いにきまつてるだろ？行幸^{みゆき}化粧をしろ！命令だ！
じゃないとバイト代出さないぞ！」

きたこれまた脅迫だよ！今日二度目の！

しかし店長ってこんなに強引だっけ…なんか何時もの店長とは違う…

それに何なんだマスコットガールって！いつそうなったんだよ！
くそ…バイト代の方が大事すぎて文句が言えない俺が情けない…

「はいはいはい…お化粧しようねー行幸ちゃん、そこに座ってー」

俺が仕方なく椅子に座ると堇は楽しそうに化粧道具をテーブルに広げた。

「お前ら覚えておけよ…」

で、結局俺は化粧をされる事になった…

しかし…心の中でだけだと言っておこう…

俺はこの店の専属マスコットガールなんかじゃねー！

第二話【俺に変な格好させんじゃねー】（後書き）

後書き人物紹介！？

茨木恋次郎【いばらきれんじろう】

年齢二十六歳

髪の色 黒 髪型 角刈り 肌色 褐色

身長184センチ 体重 90キロ

趣味 公表中 サーフィン・アメフト・マラソン

趣味 未公開 漫画・アニメ・エロゲー（マニア）・メイド喫茶通い

表はさわやかな好青年っぽいが、裏では結構マニアな趣味を持つ男。

みゆき行幸の働くパソコンショップの店長で、店長をしている理由はメイド喫茶に近い・漫画喫茶に近い・アニメが買える・エロゲーを安く買える等があるらしい（推測）

本気で怒ると手のつけようがないほどの馬鹿力を出す。

冷静な時と興奮している時のギャップが激しい。どうも女になったみゆき行幸を自分のおもちゃにしたい（彼女にしたい訳ではない）と思っているのか色々ちょっかいを出す。

第三話【俺は今日からみゆき?】（前書き）

なんとか四日連続ですが…そろそろ『ぷれしす』の筆記を再開します。

第三話【俺は今日からみゆき?】

俺は事務所の中で堇^{すみれ}に化粧をされている。

店長は腕を組んでニヤニヤしながら俺の様子を見ている。

「おい店長、何ニヤニヤしながら見てんだよ。レジに誰も居ないんじゃないのか? いいのかよ、こんな所にいて」

「大丈夫だ、お客はいない。チャイムが鳴ったら店に出るから俺の事は心配するな」

「別に店長の心配なんかしてねー! 店の心配をしてるんだよ!」

俺がそう言って店長の顔を見上げると堇^{すみれ}に強引に顔の位置を戻された。

「行幸^{みゆき}ちよつと! 動かないでよ!」

「何だよ! 俺は別に化粧がほしい訳じゃないんだよ! 強引にもどすんじゃないねー!」

「何よ! その言い方! 折角親切でやってあげてるのに!」

絶対に違うな、親切なんかじゃねーな! 化粧をしている時の堇^{すみれ}の顔は妙に楽しそうだったぞ。

ただ単に楽しんでるだけだろ。

「おいおい行幸^{みゆき}、文句言わずにちゃんとやってもらえよ。これも仕事の一環なんだぞ? バイト代が欲しくないのか?」

またきたこれ三度目の脅迫だよ！こいつそのうち訴えてやろうか！
それになんでこんな事が仕事なんだよ。

「どうなんだ？バイト代が欲しいんだろ？」

そう言われると文句がいえねーじゃねーかよ…

「く…くそ…わかったよ」

「わかったんだな？よし、それでいい」

こいつ俺が女になったからって遊んでるだろ！すっげームカつく！

「そうだ！行幸^{みゆき}、ちょっとここで取り決めをしておこう」

「ん？取り決め？」

「ちょっと店長！いい加減話かけるの止めてもらえない？お化粧が出来ないじゃないのよ！」

「すまんすまん、でもこれは重要な話だし、先に話しておいた方がいいかと思ってな」

「何だよその重要な話って。重要と言いつつもまた変な事でも考えてるんじゃないだろうな？」

俺はそう言って店長を睨んだ。

「おいおいそんなに睨むなよ。別に変な事を考えてる訳じゃないし

変な事をさせようとも思っていない」

「へえ…俺のこの格好を見て何故そう言える？今の現時点で十分変な事をされていると思うのだが？違うのか？」

「まあそれは仕事の一環だ」

「仕事？パソコンショップの店員が何でメイド服を着て化粧されなきゃいけないーんだよ！」

「まああまり気にするな。そういう事じゃなく、これから先の行幸^{みゆき}の扱いについてだ」

「普通は気にするだろ！それに何だ？扱いって俺は物じゃねーぞ！」

「ねえ行幸^{みゆき}。あんたって馬鹿？あんたが女になったから今後どういう風に扱うかって事でしょ？わかんないの？」

堇^{すみれ}は呆れたという感じの表情でそう言った。

「ば、馬鹿…馬鹿って言う奴が馬鹿なんだ！」

「煩い！何をくだらない事をムキになってんのよ。小学生じゃあるまいし！あんたは少し黙っててよ！」

「ぐ…う…くだらない…小学生…」

くそ…負けた…堇^{すみれ}に言い負けた…

「で？店長、どういう風に扱う気なの？」

「えっと：男である高坂行幸こうさかみゆきは現在存在していない。今存在しているのは女になってしまった行幸みゆきだ。そして男から女になったんですなんて普通の人間は信じる訳もない。それどころか下手に信じられたらマスコミに取り上げられ、人体実験サンプルとして捕獲され、そして解剖される：」

「ちょ、ちょっと待て！解剖だと！？それは嫌だ！」

「まあ解剖されるのは冗談だ」

「何だ、冗談かよ：」

「馬鹿ね、普通に聞いてて冗談だってわかるでしょ？」

「煩い！いちいち突っ込むな！」

「何よ！やる気！？」

「こら！喧嘩するな！真面目に聞け！」

店長は俺達二人に向かって怒鳴った。

「う：」

「：ごめんなさい」

「いちいち喧嘩するな！重要なんだから聞け。えっと：何処まで話したっけな？ああ、そうだ、それで：女になったお前はこれから先は高坂行幸のいとこの高坂みゆきになれ。同姓同名だがまあ大丈夫だろう。名前に漢字を使わなければ十分に女の名前だと思えるし、

行幸^{みゆき}だって名前を呼ばれても違和感ないだろ？そして今日から男の行幸^{みゆき}の代わりに働き出した。男の行幸^{みゆき}は私用で田舎に帰った。これでいきたい。あ、年齢も誕生日もそのままでもいいぞ？別にすごいと思われるだけだろう」

店長はどうだ！と言う表情で俺たちを見ている。

「いいんじゃない別にそれで。私はそれでいいと思うよ」

「行幸^{みゆき}はどうなんだ？」

うーん…そうだな…確かに男の俺は存在してない。
俺は別に元男だった行幸^{みゆき}だと皆に言ってもいいのだが…
どうやらあまりばらさない方が得策らしいな…

「わかった。俺もそれでいい」

「よし！じゃあお前は今日の今から高坂みゆきだ。俺はみゆきちや
んと呼ぶからな」

「え？何それきもい！ちゃんとかつけるのか？冗談はやめろよ」

「おい、バイト初日から呼び捨てっておかしいだろ？我慢しろ。あ
と口調もなんとか直せ！一応は女なんだぞ？」

「え？マジで？それは無理だ！ちゃん付けは我慢しても口調を直せ
とか無理」

「ねえ、やってみるだけやってみなさいよ？あんたネットゲーでは
ネカマやってんでしょ？女の話方とか知ってるんじゃないの？正直

今の口調はその容姿とのギャップが凄まじいからさ」

「確かに俺はネカマをやってるが、チャットで入力するのと実際に話すのじゃまったく違うんだよ！店長も堇すみれも俺が女言葉つかったらきもち悪いって思わないのか？」

「今のお前なら違和感はない」

「店長と同じ意見」

即答かよ！

「くそ…で、でも！こういう口調の女だっている…」

「似合ってない」

「店長と同じ意見」

まだ全部言っていない…

くそーこうなったら…女口調がどれほど似合わないか思い知らせてやる。

「えっと…私がこういう話方をするのって似合っていないよね？」

「すごく似合ってた」

「店長と同じ意見」

うわあああああああ！逆効果！

「諦めろ…今のお前はメイドの格好をした可愛い女の子なんだ」

「うん、その通り」

駄目だ…これ以上何を言っても無駄だ…

ここは仕方ない、やり過ぎそう…

「わかったよ…努力してみる…」

「がんばれ」

店長と堇^{すみれ}がハモってそう言った。

なんでこういう時にお前らは意見が一致するんだよ…

いつもはそれほど仲良くない癖しやがって！

「という事だからな。この事は三人の秘密だ。わかったな？」

「はいはい、私はわかったわ」

「わかった…」

その時、ピンポンとお店のチャイムが鳴った。

「あ、店長、お客さんかな？誰か来たみたいよ」

「お？この時間だし、お客さんか？」

そう言うと店長は防犯モニターを確認した。

「お客さんだな…じゃあ俺はお店に戻るから、堇^{すみれ}は化粧を宜しくな」

そう言ってお店へと戻って行った。

☆☆☆☆☆☆

もう十分も経ったぞ？そろそろおわんねーのかな…
俺がそう思っていると堇すみれの手が止まった。

「よし完成！」

すみれの聲が事務所内に響いた。

やっと終わったか…しかし何でそんなに嬉しそうなんだよ。
俺に化粧をするのがそんなに楽しかったのか？

しかし、こんな格好をさせられて、おまけに化粧までされて…
見た目こそ女だが、中身は男なんだよ！本当に情けなくて涙が出
そうだ…

しかしバイト代を貰う為だ。ここは我慢だ…

「終わったのか？じゃあ俺は店に行くからな」

俺がさっさと椅子から立ち上がると堇すみれが引き止めた。

「あー待ってよ！鏡でちゃんと確認してよ！」

「何で俺が自分の化粧済みメイド姿を確認しないといけないんだ？
別に見たくねーよ！」

「えー？何で？こんなに可愛く仕上がったのにさ？何？女になった自分が嫌いな訳？嫌な訳？それに何よその口調！さっき直すっていったじゃないの？」

「当たり前だろ！俺は男だ！なんで女の自分を好きならなきゃいけないーんだよ！それに口調は直す努力はするって言ったがすぐに直すなんて一言も言ってねー！」

「何それ？いいわよ！別にみゆきが自分の事をどう思ってたって、口調を直さなかったって私には関係ないわ！でもね！折角私がお化粧してあげたんだから見るだけ見なさいよ！」

そう言う^{すみれ}と堇はむっとした表情のまま手鏡を俺の前に差し出した。

俺の目の前に差し出された手鏡に俺の姿が映っている：

だ、誰だよこいつ：俺は思わず手鏡を覗き込んだ。

朝に鏡で確認した女の時の顔とはまったく別人がそこにはいる。

「お、おい！堇^{すみれ}！何だこれ？どうなってるんだ！？」

俺が鏡を見て驚いていると堇^{すみれ}はニヤリと笑みを浮かべた。

「化粧っていうのは化けるって事なのよ？みゆきはすっぴんでも良い感じだったし、マジで化けると思ったのよね！」

しかし：怖いな：マジで朝の俺とは別人だ。化粧ひとつでこんなに可愛くなるとは：

こんな子だったら俺はマジ付き合ってもいいな：マジで可愛いな、

すっげー可愛い…

って何を俺は自分と付き合ってもいいとか可愛いとか馬鹿な事を言ってるんだ！

「どうしたの？顔が赤いけど？」

「な、何でもない！」

やべ…自分を見て何で顔を赤くしてんだよ俺は…

「しかし…何処かで見たことあるのよね…その容姿…」

「ん？何？俺の事か？」

「あ、うん…気のせいかなあ」

「気のせいだろ？俺は今日女になったんだぞ？」

「そうよね？よし！店長が待ってるからお店に出よっか！」

「おい^{すみれ}、俺はマジでこの格好で出ないとダメなのかな？」

「当たり前でしょ？その格好で店頭でキャンペーンしないと今日のバイト代が出ないんじゃないの？」

「そうだったな…まあいいや！深く考えるのはやめとくわ！」

「そうそう！あまり考えない方がいいよ」

俺は堇^{すみれ}と一緒に事務所を後にしてお店へ向かった。

しかし…やっぱり何かがおかしいだろ？
そう思わないか？

第三話【俺は今日からみゆき?】（後書き）

後書きミニ情報?（今回は人物紹介ではない）

ストリートには書いていませんが高坂行幸^{こうさかみゆき}の住んでいるのは墨田区両国で働いているのは秋葉原です。そして自転車通勤で雨の日は電車です。ちなみに住まいは1Kのアパートで首都高の下で日当たりは最悪の部屋らしいです。

どうでもいい情報でした。

第四話【俺がパソコンショップでメイドデビュー!?!】

お店に入るとレジの方向から店長とお客さんの話声が聞こえる。

俺は倉庫からお店に出る扉を出た所で再度自分の格好を確認した。

どこからどう見ても正真正銘のメイド姿だな…

本当にこんな姿を人前に晒さないといけないのか？

さっきは割りきってやればいいやと軽く考えていたが、今になってだんだんと恥ずかしさが心の底から湧き出てきたぞ。

「どうしたのよ？そんな所で立ち止まっちゃってさ？もしかして今更恥ずかしくて人前に出たくなくなったとかないよね？」

すみれ
堇は俺の心を見透かしたかの様にそう言った。

「おい堇、すみれそう言うがな、もしお前が男になってしまつて、いきなり王子様かなにかの格好をさせられて人前に出されても恥ずかしいとは思わないのか？」

「え？私？私は全然平気よ？」

すみれ
堇は考える様子も無く即答した。

「返事はや！おい、マジでか？マジでお前は平気なのか!？」

「平気よ？っていうかさ、今からメイドの姿になれって言われても全然平気だし。何でそんな事聞くのよ？」

「何でって…普通はそんなの嫌だ！っていう奴の方が多いだろ？」

「ふーん…そうかな？」

しまった、こいつ普通じゃないんだ…

こいつに聞いただけ無駄だった…

「私ってコスプレも大好きだし！男性姿のコスプレだってやった事あるしさ！あれよね、コスプレって恥ずかしいっていうのも少しはあるけど、でも注目の的になると主役になったみたいでさー、いいよね…」

話をする堇がすっげー楽しそうに見える。

「堇に聞いた俺が馬鹿だったよ…」

「え？何それ！それって私が変わたとも言いたい訳！？」

「世間一般的にコスプレが趣味の普通の女っていないだろ？」

「えー！私はどこからどう見ても普通の女の子じゃない！」

何をムキになってんだこいつ？ほんとにこいつと話すと疲れるな…

「はいはい、わかったよ…で？俺は堇がコスプレしてたとか一度も聞いた記憶ないんだが？そんな趣味まで持ってたのか？」

「だってみゆきには話してないし。だってコスプレの趣味のないみゆきにそんな話を話する必要ないじゃん。でも隠すつもりなんて毛頭ないよ？あーもしかして、私のコスプレした姿が見たいとか？」

「馬鹿か！何で俺が堇すみれのコスプレを見たいとかそういう事になるんだよ！俺はそういう系の趣味はないんだよ！それにお前みたいな凹凸も無い貧疎な体の赤渕メガネ女のコスプレなんて見たくもない！」

「何よムカツク言い方するわね！何が貧疎よ！出てるところはちゃんと出てるのよ！見せてあげようか！」

そう言うとき突然堇すみれは上着を脱ごうとした。

「だー！待て！脱がなくていい！わかった！俺が悪かった！」

「本当に悪いって思っていないでしょ！やっぱり証拠を見せないと！」

「やめろ！本当に俺が悪かったです！すみませんでした！」

堇すみれはちらりと俺の方を見ると服を脱ぐのを途中で止めた。

「ねえ？本当に謝ってるの？」

「本当ださっきは言い方が悪かったすまん」

「ふん…じゃあ仕方ないわね」

堇すみれは途中まで脱ぎかけていた服を戻した。

ふう…あぶねーな…こんな場所で本当に脱ごうとするなよな…
こいつ何するかわかんねーから怖えな…

「あのさ？もしかしてさ、みゆきって私が嫌いなの？」

「おい待て！今までに俺が発した言葉の中のどこに嫌いという言葉が入っていたんだ？」

「え！？じゃあ…もしかして私の事が好きなの！？だからわざと強い口調であんな事を言ってたの！？」

「どうしてそうなるんだよ！」

「そっかーでもごめん、みゆきみたいな変な子は私の趣味じゃないんだよね」

「おい人の話を聞けよ！何だそれ？何で俺がお前みたいな女が好きになるんだよ！それに俺が変わって何だよ！堇すみれだって変だろうが！」

「えー？私は流石にMMOでネカマやって人を騙して天罰で女にされるような事はしてないし、みゆきよりはマシだと思うけど？」

「ぐ…くそ…」

駄目だ、これ以上言い合いをしても勝てる気がしねー

「もういい…堇すみれと話をすると疲れる」

「何？私は平気だけど？もうちょっと話する？」

「だからもういいって…」

「あ、そう？」

堇^{すみれ}は俺の顔を見てニヤリと笑みを浮かべた。
勝ち誇ったような顔しやがって…

「おい、もうふっきれた。店長のところいくぞ」

☆☆☆☆☆☆

「そのノートはCPUは昔のデュアルコアだから処理速度がイマイチなのかね？」

「でもさ店長、ミニノートだと基本的にはデュアルコアなんじゃないの？もともとミニノートに性能を求める方が間違っていると思うんだけど？」

「いや、そうでもないよ。最近はデュアルコアをHITでクアッドコアみたいな動作をするのも出てきているみたいだし、やっぱり高性能な小型ノート持ち運びが出来るって便利だし、だからこそ性能を求めるユーザーも多いんじゃないのかね」

レジカウンターに常連のお客が一人来ているな。

あれは何時もこのお店に来ている大学生の佐藤さんだ。

佐藤さんも飽きずによく来るよな…ほぼ二日に一回は来てるし…

「店長！おまたせー！結構いい感じに仕上がったよ！」

堇^{すみれ}はそう言う嬉しそうな表情を浮かべて店長の所へ走って行った。

「お？終わったのか？」

堇^{すみれ}が横まで来ると店長が俺の方を見る。

そしてよこ横にいる常連の佐藤さんも店長に釣られる様に俺の方を見た。

「あ、ちょっと佐藤さんすみません」

そう言っ店長は俺の前まで来ると俺を上から下まで舐めるように見る。

なんか妙にいやらしい目つきだな…

「おお！可愛い！すばらしい！いいねー」

余程満足した仕上がりなのか店長がすっげー喜んでる。

「でしょー！元の素材が良かったのね」

堇^{すみれ}…くそーなんだか堇^{すみれ}と店長を喜ばせる為にメイド姿になって化粧までされた様に思えてきたぞ…

そう考えると今更だが、滅茶苦茶腹が立ってくる！

「店長？何この子？新しくここに入った子？こんな可愛い子雇ったんだ？」

佐藤さんが少し驚いた様な表情で俺を見ながら言った。

「可愛いでしょ？今日からここで働く事になった高坂みゆきちゃんだよ」

「え？高坂みゆき？って確か：今日はいないみたいだけど、ここで働いている：えっと：そう！大卒なのにバイト君みたいな店員！あの人も同じ名前じゃ？」

佐藤さん、大卒なのにバイト君は余計だ：

「ああ、この子は実はあの高坂のいとこなんだよ。高坂が田舎に用事があつて戻ったんだ。それでその代わりにこの子に働いてもらう事になったんだよ」

「へーそうなんだ？君はあの高坂君のいとこなんだ？」

「あ、はあ：」

よくまあそんなに嘘を平然と話せるな店長。

佐藤さんなんてまったく疑ってないじゃないか。

「みゆきちゃん、この方はいつもこのお店に来てくれる佐藤さんだ。挨拶して」

言われなくつても知ってるよ。ってそうか、俺は初対面なのか：

「えっ、こ、高坂：みゆきです。よろしく」

「俺は佐藤っていうんだ！大学3年だ。よろしくな！」

そんな事は知ってるし、それに何だ？そのちよつと赤らめた表情は？

それは俺に対してなのか！？うわ：何か嫌だな：

あといつもと口調が違うぞ？なにがよろしくな！だよ。

「それにしても…君、何処かで見たような気がするなあ…」

ん？何だ？佐藤さんは俺を見たことがある？

「え？佐藤さんはみゆきちゃんを見たことあるのか？」

「いや、店長違うよ。今日がもちろん初対面だよ。でも何処か見た事があるような…でもってその声も聞いたような…そんな気がしたんだ」

ん？そういえば…さつき^{すみれ}堇も俺を何処かで見た事があるようになって…

もしかしてこの世界の何処かに俺と同じ容姿と声の人物がいるのか！？

そうだ！そういえば、世界には何人だか同じ容姿の人物がいるとか聞いた事あるぞ！

それか！きつとそれだな！

って待て！何時の間にか取り囲まれてるぞ！？

俺が周囲を見渡すと佐藤さんと店長と堇^{すみれ}が、簡単に言えばお店にいる人間全員が俺を取り囲んでじっと見ている。

「な！何なんだよお前ら！俺を取り囲んで何見てんだよ！」

俺は思わず大きい声でそう言った。

「お！？何だ？みゆきちゃんって結構男っぽい口調で話すんだね？」

佐藤さんが笑みを浮かべて言った。それもいきなりみゆきちゃんだと！？

その横では何故女口調で話さないんだ！という怒りの表情に満ちた店長が：

しかし！俺は男だ！女口調なんて使ってられるかよ！

「えっと、俺は男みたいに育てられたから、こういう口調のこういう性格の女です！」

どうだ？こういう男みたいな女は？嫌になれ！

「へーそうなんだ？俺、君みたいな感じの子は好きだよ！」

げ…効果なし…

「というより、君みたいな感じの子って結構好みかな？」

げげ…佐藤さん、もしかして高感度アップをしようとしてもしてるのか？口説くつもりなのか！？

しかし普段の佐藤さんを知ってる俺には効果ないぞ？
まず佐藤さんにはそういう台詞は似合ってない！

しかし、この人ってパソコンだけに興味があると思ってたけど女にも興味あったのか…

「みゆきちゃん？前にも言ったけどちょっとは女の子らしく話したほうがいいよ？」

店長が眉間をひくひくと震わせながら言った。

「無理です」

「無理ですじゃなくて、努力しなさい」

「努力の結果がこの口調です。無理です」

「いやまだ努力が足りないでしょ？常に努力して女の子っぽくしてもらえるかな？」

「あのー俺は店長の彼女でもないし、あくまでもご意見として聞いておきますけど、いちいち指示しないで貰えます？」

店長の顔が見る見る赤くなってゆく。

うわー怒ってる怒ってる。でもお客さんがいるのに切れたりしないだろ。

「おい！みゆき！俺がさっき言っただろうが！女になったんだから女の口調で話せて！それにな…」

「ちょっと店長ストップ！」

俺の予想を覆して店長はヒートアップして俺に怒鳴り始めた。
しかしすぐに堇すみれが店長に怒鳴って会話を止めた。

「何で店長が熱くなってんのよ！みゆきちゃんも店長の物じゃないんだし、いいじゃん。こういう言葉使いでも可愛い事には変わりないんだし。あまり押し付けは良くないと思うよ？あと、女になった

んじやなくって女なんだからでしょ？」

な。何だ？^{すみれ}堇が俺を擁護してくれたのか！？

こいつって味方なのか敵なのかよくわかんねーな…

店長はふうと大きく息を吐いた。

「すまん熱くなっちゃった…わかったよ…無理強いするのはやめる…すまん」

「あは…あはは…店長、こういう個性的な子って僕はいいと思うよ？僕はあまり女の子の子っていう感じよりも、こういう男っぽさが見える子の方が好きだしさ」

「あは…あはは…佐藤さん、あ、ありがとう…」

佐藤さん、擁護してもらってるのは嬉しいのだが、いちいち俺の顔をちらちら見るのはやめてもらえないかな…

俺にいくらアピールしても無駄だぞ…見た目は女だが中身は男だ。

「だがなみゆき、時と場合によっては女らしくしろよ？そういう場面だってこの先はあるはずだ」

おいおい…まだ言うのかよ？

「はいはい、わかったわかった！」

「俺は真面目にみゆきの事を心配してやってんだぞ？」

「だからわかったって言ってるだろ？」

「あ！わかった！」

俺と店長が話していると堇すみれが突然大声を出した。

「な？何だ？堇すみれ、何がわかったんだ？」

店長はすぐに堇すみれに問いかけた。

「みゆきちゃん！みゆきちゃんが誰に似てるのかがわかった！」

「「「え？」」」

その時！俺と店長と佐藤さんの言葉が見事に重なった！

無意味だけどね。

「堇すみれ？俺は誰に似てるんだ？」

「それは…」

「それは？」

早く言えよ！誰なんだよ！俺に似てるんだ！

第四話【俺がパソコンショップでメイドデビュー!?!】（後書き）

後書き人物紹介？

永井堇【ながいすみれ】

年齢 二十歳

身長164センチ

体重？ 行幸みゆきの予想だと53キロ位？

MMO大好きな上にコスプレまで大好きな女性。いつも化粧をして
おらず赤縁の眼鏡をかけている。髪は茶色に染めていてパソコンシ
ョップで働いている時はいつも後ろで纏めている。服装はジーパン
にサイズの合っていないフード付パーカー。（スタイルを隠す為？）

行幸みゆきが貧祖で凹凸が無い体と言った時に出てる所はちゃんと出てる
と主張した。実際どうなのかは不明。自己主張が激しく結構自分勝
手でよく店長や行幸みゆきと意見がぶつかる。ちなみに彼氏居ない暦は二
十年。

第五話【俺がなんでアニメキャラ!?!】

「それはね…」

堇^{すみれ}は真面目な表情で話しを始めた。

「あのね、確か2年前だっけかな? 深夜アニメで『わたしがメイドでごめんなさい』っていうのを放送してたの」

何だ? その『わたしがメイドでごめんなさい』っていう変な名前のアニメは…

名前からしても普通じゃないだろ…マニア向けの深夜アニメか? で、そのアニメと俺がどんな関係があるんだよ?

と俺が思っていると突然店長が満面の笑みを浮かべて話を始めた。

「おお! 知ってるぞそのアニメ! 確か、制作会社がエンジェルぷれしすって会社の処女作だったはずだ。しかし、結局はその一作だけしか製作してないんだよな」

「そのアニメは放送当時の前評判もまったく良くなかったので視聴率も低かったのだが、数話進んだくらいからいきなり評価が上がりだして人気が出て凄かったんだ。俺はワンクールで終わったのがすごく残念だったな…続きそうな最後だったんだぞ! 俺はあの作品は大好きなんだ!」

おい、店長やけに詳しすぎるだろ…

誰もそこまで詳しく話してほしいとか言っていないぞ。

やっぱり店長はアニメ大好、メイド好きだったのか…確信した。

「ねえ店長…やけに詳しいわね…いや、詳しくすぎて正直気持ち悪いんだけど」

堇^{すみれ}がかなりドン引きしてる…

そうか、まだ堇^{すみれ}は店長がアニメオタクだって知らないんだ。

堇^{すみれ}の表情を見た店長はしまったという表情に変わった。

おいおい、今更そんな顔をして遅いだろ…まったく馬鹿だな。

「いや、これは…ちょ、ちょっと友人にDVDを借りたんだ！それで知ってるだけだ！す、堇^{すみれ}だって知ってるじゃないか」

「え？私はアニメの題名とキャラを知ってるだけだよ？アニメは数話は見たけど、全話は見えてないし、内容もそこまで詳しく覚えてないし」

「お、俺も数回見たただけだぞ」

うーむ…店長、その言い訳はかなり苦しいだろう？

俺が思うには数回見ただけでそんなに詳しくなれない。
絶対に見まくったはずだ。

俺は少し焦った表情の店長を見て思った。

よし…ちょっと店長を引っ掛けてみるか…

「俺そのアニメに興味あるなー！店長はそのアニメ大好きなんだろ？そのアニメって本当は何回くらい見たんだ？俺もそのアニメの続き見たいから色々教えて欲しいな」

俺がそう言うと店長はすごく嬉しそうな表情に変わった。

「おお！そうか！興味があるのか！なら後でゆっくり内容を教えてあげよう！あと、見た回数だけど、自慢じゃないが五十回以上は見たと思うな！」

店長は再度興奮してそう話した。

「おい…五十回以上って…見すぎだろ…」

「店長五十回以上も見たの？へえ…」

「え？何だ？みゆきが見た回数を聞いたから答えたただけだろ？興味があるんだろ？」

「いや、興味は無い」

「おい！さっき興味があるって言ったじゃないか」

「もう無くなった」

「みゆき…まさか…俺を騙したな…」

店長は俺とみゆきの顔を見渡した。

「騙した記憶はない。あの一瞬だけ興味があった」

「く…ま、まあ…面白いから何度か見たただけだ、五十回というのは大袈裟に言っただけだ」

「大袈裟ねえ…へえ…どちらにせよ店長ってアニメオタクだったっ

て解った…まあ別にいいけどさ…私的には店長がアニメ見てるとか想像するとちよっと気持ち悪いわね…」

店長の趣味がついに董^{すみれ}にもばれた。

「待て待て！俺は単なるこのアニメのファンだ。オタクではない」

「はいはい、そんな事は私にとってどうでもいいわ。店長がオタクでも気にしないから」

「だからオタクじゃないと言ってるじゃないか！」

「あ、あの…盛り上がってて申し訳ないんだけど…」

佐藤さんは少し引きつった表情でそう言った。

そういえば佐藤さんの存在をすっかり忘れていた。

この人は存在感が無いなあ…

「あ、さ、佐藤さんすみません！じゃ、じゃあ今度発売するグラフィックボードが入ったら連絡しますから」

「え？あ…はい…宜しくお願いしますってえ？僕はまだ帰るとは…」

「入荷したら連絡しますね！」

「え！？あ、はい…じゃ、じゃあ帰ります…」

佐藤さんかわいそうに、結局追い出される羽目になってるし…

佐藤さんだってこのアニメを知ってるんだろ？

さっき俺の事を見たことあるって言ってたしさ…

店長も堇も話題に入れてやれよ…
佐藤さん！すまん！こんなメンバーでごめん！
仕方ないな…俺が…

「ごめんね佐藤さん…また来てね」

俺は佐藤さんに申し訳なくって、出て行こうとした佐藤さんについてそう言った。

すると出口に向かっていた佐藤さんが立ち止まって振り向いた。

「ああ！大丈夫だよ！みゆきちゃんは気にしないで！僕は君にまた逢いにくるからね！また！」

げ…すっごい笑顔で返事を返されてしまった…
おまけに既にみゆきちゃんって言われてるし…

「あ…はあ…」

「ではー！」

佐藤さんはご機嫌なままお店を出て行った。

うーむ…佐藤さんこういうキャラだったのかよ…意外だな。

しかしどうするかな…絶対に佐藤さんに気に入られてしまった…

………

ま、まあなせばなるかな？深く考えるのは止めとこう。

そして会話が再開する。

「おい！堇店長がオタクとかもうどうでもいいから、そのメイドが

うんたらかいいうアニメがどうしたんだよ」

「うんたらかんたらじゃなくって『わたしがメイドでごめんなさい』ってアニメよ!」

「俺はそんな題名とかどうでもいいんだよ!で?そのアニメが俺とどう関係があるんだ?」

その時、横からすっごく嫌な感じがした。

首元に生暖かい風を感じた:

俺がゆっくりと横を見ると何時のまにか真横に店長が来てるじゃないか!?

そして店長は生暖かい鼻息を勢いよく出しながら俺をのうなじを見ている。

「うわあああああ!おい!こら!何じろじろ見てるんだよ!気持ちわるい!あと何だその鼻息は!離れろ!離れろ!」

「ふふふ:気にするなみゆき」

「気になる!」

「大丈夫だみゆき」

「大丈夫じゃないから言ってるんだろうが!」

「俺は大丈夫だぞ?」

「俺が大丈夫じゃないんだよ!」

「で？何が言いたい？」

「あーもういい！俺が移動する！店長はそこから動くなよ！」

俺は店長の横からすばやく移動した。

「おかしい奴だな？」

「おかしいのは店長だろうが！」

「ちよつと！漫才はもういいから！話を戻してよ！」

堇^{すみれ}がイライラした表情で俺たちに怒鳴った。

「すまんすまん、えっと『わたしがメイドでごめんなさい』とみゆきの関係についてだな？俺なりの意見がある。聞いてくれ」

そう言って店長は腕を組むと険しい表情で語り始めた。

「みゆきは『わたしがメイドでごめんなさい』というアニメに登場するヒロイン一人、神無月みゆきっていう子に似てるんだ。いや、今みゆきが着ているそのメイド服をアニメに出ていたメイド服に代えればそっくりだと言っても過言じゃない」

「え！？何だよ、じゃあ俺はアニメキャラに似てるって言うのか！？」

「ああ、髪形、髪の色、瞳の色、そして容姿：おまけにすごい事に気がついた。それは今キャラの声を思い出したのだが、女の子っぽ

く話した時のみゆきの声とそのキャラの声がそっくりだという事だ」

「へえ…店長はさすがマニアね…私は容姿は似てるとは思ってたけど、まさか声まで似てるとか…」

「おいおい！何で俺がアニメキャラに似てないといけねーんだよ！ふざけるなよ！」

「別にふざけてなんていないぞ？マジでそっくりなんだよ」

「俺は三次元に存在する人間で二次元のキャラじゃねー！」

しかもアニメキャラの名前…みゆきとか言ったか？俺と同じ名前じゃねーかよ…

「店長、もう一度聞くんが俺がアニメキャラに似てるとか嘘だよな？」

「おい、^{すみれ}堇は何でそのアニメを知ったんだ？」

え！？無視！？

「え？私？店長に前話したけど私ってコスプレしてるじゃん」

^{すみれ}堇まで無視！？

「ああ、言ってたな？夏コミの時だっけ？」

「そう！それでその時にアニメのキャラのコスプレも人気があつてね。それでそこからこのアニメを知った訳なの」

くそ…無視しやがって…

「なるほどな…そういう経路で知ったのか」

「そうよ？だから内容は深くは知らない訳」

「おいこら！二人とも俺を無視すんなよ！人の話を聞けよ！」

店長と堇すみれが俺の方をじーと見ている。

「な、何だよ…」

「いくらみゆきが怒っても、否定しても、似てるものは似てるんだ、仕方ないじゃないか」

「店長と同じ意見」

「だ、だが…いくら何でもアニメキャラとか…ないと思うんだけど」

「いや、そっくりだぞ？よかったじゃないか？可愛いアニメキャラに似てて」

「店長と同じ意見」

「ま、まてよ…」

「以上！」

「以上だってさ」

「…」

「それで堇すみれは…」

店長と堇すみれは俺を無視して先ほどのアニメの話をしている。

こいつら…くそ…

俺が二人を睨んでいると店長が俺の方を見た。

「何か？」

「何かじゃねー！」

店長は堇すみれとの会話に戻った。

うがああああ！駄目だ…くそーこうなったら…仕方ない…出したくないこの声で…

「あ、あのお…店長…し、質問してもいいですか？」

「お！？何かなみゆきちゃん」

女の子口調だと反応しやがった…

「俺ってその何だ？その神無月みゆきってキャラにマジで似てるのか？っていうかさ…名前が一緒なんだけど…どういう事だ」

「男口調に戻ったから答えたくない」

こいつ…くそ…

「ど、どういう事なんでしょうか？」

「仕方ないな、答えてやろう。さっきから言ってるがそっくりだ。名前が一緒なのは気がつかなかった。名前まで一緒とかすごい発見だな…」

「おいおい…さっきキャラの名前言ってただろうが…名前が一緒くらい気がつけよ…」

「みゆき、店長の言葉は確かに信用度が低いけどさ、マジで似てるんだよ？ここにアニメでもあれば見せてあげるんだけどね…私は数度しかアニメは見えてないけど、記憶だけ辿っても似てると思うのよね。まあ名前が一緒なのは偶然だと思うけど」

「そうなのか…おい、店長！そのアニメを実は持っていたりしないのかって？いないぞ！？」

俺が店長にそう問いかけたが周囲には店長の姿がない！？

「おい、^{すみれ}店長は？」

「あれ？店長？何処いったんだろうね？呼んでようか？おーい！てんちょー！」

^{すみれ} 堇が大きな声で店長を呼ぶと店の奥から店長が自分のノートパソコンを持って来た。

いつの間に奥に引っ込んだんだ？気がつかなかったぞ。

「思い出したんだ！このノートに全話保存してあった事を」

え!?!何だと?と言う事は今そのアニメが今見れるのか?

「店長?まさかそのノートに『わたしがメイドでごめんなさい』が全話入ってるの?」

「ああ、そうだ!」

「うわ…きも…」

「な!?!」

「メイド好き、アニメ好きまでは許してあげようと思ったけど、仕事場にアニメを持ち込むほどオタクだったとはすごく残念だわ。まあ別に趣味を否定するつもりはないけど…」

こいつ…性格悪いよな…お前だってコスプレとか変わった趣味もってるだろ?

それにネットゲームもはまってるし。普通の女じゃねーだろうが!

「これはたまたまだ!たまたまこのノートに入ってただけだ」

「へえ…たまたまなんだ?で?そのノートにはアニメが何作品入ってるの?」

「そ、それは言えない…」

「…へえ…そっか…まあ言いたくないならいいわ。そんな事を聞いても仕方ないし、じゃあ見せてよそのアニメ」

「…」

店長は肩を落としたまま無言でノートパソコンをレジカウンターに置くとアニメを再生した。

がんばれよ店長…大丈夫だ俺はアニメオタクな店長でもキモイとは思わないからな…

…

って何で店長を俺がフォローしてんだよ…

第五話【俺がなんでアニメキャラ!?!】（後書き）

後書き人物紹介？

佐藤純一【さとうじゅんいち】

年齢 二十一歳

身長 177センチ

体重 63キロ

某大学の三年生で、行幸^{みゆき}の働くパソコンショップの常連。細身の体で黒髪短髪眼鏡姿。服装はジーパンにチェックのシャツを着ている。パソコンについては性能フェチでゲームをすると言うよりはパーツを最新にしてゆく事を楽しんでいる。ほぼ二日に一回は顔を見せるほどお店には良く来る。女になった行幸^{みゆき}を見て惚れたらしく、気を引く為に精一杯のアピールをしている模様。正直キャラが薄いので再登場するのか作者すらわかっていない。

第六話【俺は男？それとも…オンナノコ？】（前書き）

ちよつと怪しい方向に行ってる気がします…

第六話【俺は男？それとも…オンナノコ？】

店長のノートパソコンからアニメのオープニングテーマらしき音楽が聞こえる。

^{すみれ} 堇の一言に意気消沈していたはずの店長だったがアニメが始まると先ほどとは打って変わり表情はあつと言う間に元に戻っている。とかさつきより笑顔に？いや、ニヤケ顔になっているじゃないか。

それほどにこのアニメが好きなのかよ…

^{すみれ} 堇はと言うと店長と一緒にノートパソコンの画面を見ている。

俺はこんなアニメは見たくも無いのだが、見ない事には何も始まらない。仕方なくノートパソコンの画面を覗いてアニメを見た。

そして約二十数分後に第一話が終了。

俺の感想はと言うと…

マニアックすぎてダメだ…

なんだあの登場人物は？何でメイドがあんなにいっぱい出るんだ？ストーリーもよくわかんねーぞ…

俺には全くもって面白さが理解できないアニメだった。

まったくなんでこんなアニメを店長は好きなんだ？

「つて！うわ！」

ふと横にいた店長を見ると店長はニヤケ顔で余韻に浸っている…

「店長！なんて顔してんだよ！おい！」

「何度見てもかわいいよなあ、神無月みゆき…」

「店長！もうアニメは終わってるぞ！」

「可愛いよなあ…」

「無視かよ…」

しかし、店長のイメージが今日一日でここまで崩壊するとは思わなかった…

昨日まではスポーツマン店長のイメージだったのに、今はオタク店長だ…

まあこれが本来の店長なんだろうが…

「みゆき、店長はほって置いていいわ」

堇はそう言ったと思うと正面から俺の顔をじっと見始めた。
すみれ

「な、何だよ？俺の顔に何かついてるのか？」

「…」

「そんなに見るなよ…」

「…」

「おい！聞ってるのかよ！」

「ちょっと、大声出さなくっても聞こえてるよ……ふーん…それにしても良く似てるわね」

すみれ
堇は俺の顔をまじまじと見た後にそう言った。

「本当にか？俺はよくわかんねーけど…」

「そりゃみゆきは自分の姿を自分で確認出来ないだろし、声だって自分で聞く声は私達が聞く声とは違って聞こえるからね。そうだ！みゆき！ちょっといいかな？そこに立って」

「え？立つ？立てばいいのか？」

「ええ、そうよ」

何故か俺は言われるがままにレジの前に立った。

すみれ
堇はノートパソコンを覗きながら俺に色々と指示してくる。

何故だか俺は言われるがままに格好をつける。

ちなみに店長はいつの間にか元に戻り、画面と俺をずっと見比べている。

「そうそう、そこで両手を胸の前で手を組んで・・・うん！いい感じよ！」

「いい感じって…写真撮影か何かをされてる気分だぞ？」

「いいじゃん！気にしないの！はい、そこでいいわよ！あとはそこでこの台詞を言うのよ！『私はご主人様が大好きです』って」

「え？おい！ちょっと待て！何だよその台詞は！そんな台詞言えるか！」

「今は重要な検証中なんだよ？いいからやりなさい！」

「何で俺がそんな恥かしい台詞を！」

「みゆきの為でしょ！これで何かが解れば、もしかすると男に戻る方法が解るかもしれないんだよ？」

何だと！？男に戻る方法が解るだ！？
そう言われると協力しない訳にはゆかない！

「おい！マジで男に戻る方法が解るのか！？」

「だから、戻る方法が見つかる可能性があるってこと！わかった？だから協力して」

「あ、ああ…でもさっきの台詞は流石に恥ずかしいな…」

「そんな事を言っても駄目！早く！さっさとしないとお客さんが来ちゃうかもしれないじゃん！」

「う…」

「あーもう！こういう感じよ！やさしくね、やさしくこう、胸の前で手を組んで…」

「私はご主人様が大好きです…」

堇すみれは恥ずかしげもなく、少しもじもと格好をつけながら台詞を言った。

聞いている俺の方がはずかしくなる。

しかし…堇すみれには似合っていない台詞だな…

声は思ったよりも可愛かったが、その容姿がなあ…

「ちよっとみゆき！言い方はわかったでしょ？早く言ってよ！」

「え？あ、ああ…」

仕方ないな…くそ…俺は覚悟を決めて言った。

『私は…ご、ご主人様が…大好き…大好きです』

言い終わった瞬間に顔がすごく熱くなってゆくのが解った。

うわあああ！言ってしまった！くそー！恥ずかしい！

「おい！言ったぞ！もういいだろ！」

俺がレジを見ると堇すみれと店長が俺の事をきよとした表情で見ている。

「お、おい？堇すみれ？店長？どうしたんだよ？」

俺がそう言うのとハツとした感じで堇すみれと店長が動き出した。

「よ、よかったわよ…なかなか…ね、店長」

「え？ああ、すごく可愛かったぞ？台詞を言って顔を赤らめた所な

んですばらしいアドリブだった」

「アドリブじゃねえ…マジで恥かしかつたんだよ！」

「そうなの？本当に女の子っぽくって可愛かったわよ…悔しいけど認めてあげるわ」

「別に認めなくていい…」

「お！そうだそうだ！今の台詞を録音したからみゆきも聞いてみる」

店長はノートパソコンをカチャカチャと動かし始めた。

「え？何だと！？録音した！？」

「そうよ、検証の為だしね」

「聞いてないぞ…録音するとか」

「言っていないし」

「…」

こいつら…

「みゆき、ちょっとこっち来てよ！検証するからさ」

「あ…わかった…」

どうせ聞きたくないと言っても無駄なのはよくわかっている。

だから俺は仕方なくノートパソコンの前へと移動した。

「いい？これがアニメの方…」

『私はご主人様が大好きです』

「でもって、これがみゆき」

『私は…ご、ご主人様が…大好き…大好きです』

自分で自分の声を聞くのはなんとも嫌なものだな…
それも女になった自分の声とか…

「結論から言うと、みゆきはこのアニメのヒロインである神無月みゆきに容姿も声も両方そっくりである。しかし！台詞についてはみゆきの方がぶっちゃけ可愛いと私は思う。それにさっきの顔を赤らめていたみゆきは…女の私から見てもマジ可愛かった…」

「可愛いとかそんなのはどうでもいい。それより俺が男に戻る方法とか解ったのかよ？」

「そんなのそう簡単に見つかるはずないじゃん」

「おい！お前はさっき見つかるかもしれないって言っただろうが！」

「かもよ！かも！かもっていうのは絶対じゃないの！」

「堇^{すみれ}は元々見つかるはずないと思ってたんだろ！」

「そ、そんな事は…」

「ほら！答えられねーじゃねーか！やっぱりな…俺は男に戻る方法が見つかるかもって言うからあんな恥ずかしい台詞を言ったのに…」

「ま、まあまあ…そのうち戻る方法も見つかるかもしれないしさ、そんなに気を落とさないでよ」

「お前はなあ…実際に性別が変わった事が無いからそんなに簡単に言えるんだ…俺はな！俺は今すっげー辛いんだぞ！わかってんのかよ！わかってねーから軽々しくそんな台詞が言えるんだろ！」

俺が怒鳴ると堇^{すみれ}は言葉を失い俯いた。

あれ…ちよつと強く言い過ぎたかな…

俺の横にゆっくりと店長が側に寄ってきた。

「おいみゆき…」

「何だよ…」

「大丈夫だ…俺はお前をすごく心配してる…俺は例えお前が女のままでもずっと支えてやるからな」

「断る」

「みゆき、もし戻れなくっても本当に俺が支えてやる！」

「だから断る！」

「安心しろ」

店長は真剣な眼差しでそう言うといきなり俺の両手を握り締めた。店手を握られた瞬間に背筋が凍るほどにぞっとし、体に震えが走った。

「うわああああ！何をやる！離せ！さっきから断るって言ってるだろうが！俺は絶対に男に戻るんだ！店長に支えて貰いたいと思ってる！」

俺は強引に店長の手を振りほどいた。

「俺に気を使わなくってもいいんだぞ？」

「使ってる！マジで遠慮する！」

き、きもち悪い…危険だ！店長が危険すぎるぞ！
すっげー真剣な所が危険さを際立たせてる…

そう俺が思っていると…

「店長…そういうきもい行動はマジでやめなよ…」

俯いたまま動かなかった堇^{すみれ}が声を発した。

「え？何だ？何が駄目なんだ！」

「きもい…元々男のみゆきの手を握ったりしてマジできもい…」

「だから言ってるじゃないか、俺はみゆきが女のままでも大丈夫と

いう事を言いたいだけで…」

「店長はさっきみゆきが私に言った言葉を聞いてなかったの？ 私は…」

そこで堇は再び言葉を失った。

「おい？ 堇大丈夫か？ 俺がさっき強く言い過ぎたから…」

堇は俯いたまま首を横に振った。

「大丈夫…ごめんねみゆき、私はみゆきが女の子のなった事を少し面白がってた。そうだね、好きで女の子になった訳じゃないのに…私はみゆき事を…」

再び堇は言葉を詰まらせた。

らしくない…普段の堇とはまったく別人みたいだ。

俺はそんなになるまで強く言い過ぎたのか？

：

少し言い過ぎたのかもしれないな…

「堇、お前らしくないぞ？ そんなに元気を無くすなよ。俺はそんな堇を見ていると何だかすごく悪い事をしたみたいに感じるじゃないか」

「みゆきは悪くないよ…ごめんね、ちよつとさっきのみゆきの言った事が胸に突き刺さるような感じがして…」

「まあ…そうだな…強く言い過ぎたかもしれないけど、でもあれだ

ぞ？俺は本当に男に戻りたいんだぞ？」

「…うん」

「だから男に戻る方法を本当に早く見つけたいんだよ」

「そうだよね：解った、私はみゆきが男に戻る方法を見つける為に協力するからね」

「え？本当にか？」

「うん、本当にだよ。それと…店長！」

「何だ？」

「店長もみゆきが男に戻るように協力しなさいよね！」

「え！？俺も！？あ、わ、わかった」

「あと！みゆきに手を出したら私が許さないからね！」

「！？」

何だかわかんねーけど、知らない間に堇が完全に俺の味方になったらしいぞ。

「ちょっといいかな、早速なんだけど、みゆきの事を考えると今日の店頭でのキャンペーンは止めたほうがいいと思う」

店長は堇がそう言うのと咄嗟に言い返した。

「え？何でだ？いいじゃないかそれ位は？俺がみゆきに手を出すとかそういうんじゃないんだぞ？何がダメなんだ？」

「みゆきが神無月みゆきにそっくりと言う事がわかったでしょ？それに声までそっくりという事もわかった。という事はあのアニメを知ってる人がこの秋葉原に来ていた場合にみゆき寄って集ってくる可能性がある。正直言っであの系統のアニメはオタク系だから正直ファンも危険な可能性が…だから一人で立たせるとみゆきが危ないかも」

「ふむ…確かにな。正直俺はやりたくなかったんだ」

「ちょっと待て！それは偏見だ！俺みたいにあのアニメが好きでも健全な男だっている！」

「ごめん店長。既に店長は健全じゃないわ…」

「俺もそう思う」

店長が崩れるように床にへたり込んだ。

「自業自得だな」

「実は止めた方がいい理由はもう一つあるの」

「ん？まだあるのか？」

「そう！それはね…」

堇^{すみれ}は俺の胸の辺りをじっとみた。

「ど、どこ見てるんだよ」

「みゆきは下着をつけてないよね」

「え？何だと！本当かみゆき！」

床にへたり込んでいたはずの店長が堇^{すみれ}の一言で完全復活を果たした！

「おい！そういう事に素早く反応するんじゃないかー！」

「みゆきよ、今の言葉に反応しない男なんっていないぞ？で？本当なのか！？下着を身につけていないというのは…」

「おい：俺は男だぞ？俺が女物の下着とか持つてるはずないだろう？普通に考えればわかるだろう！」

俺が店長に向かって怒鳴っていると堇^{すみれ}がいきなりメイド服の上から俺の胸を掴んだ。

「うわ！こ、こら！堇^{すみれ}！何すんだよ！」

「確認よ」

そう言って堇は数度俺の胸を揉んだ。

堇^{すみれ}が胸を揉む度にむにゅっとしたなんとも言えない感触が伝わってくる。

「確認って何だよ！おい！こ、こら堇^{すみれ}！やめろ！ストップ！」

「…思った以上に大きいのね…みゆき」

むにゅむにゅむにゅ…

うわー揉むなって言ってるのに！

「揉むな！もう確認終わっただろ？終わり終わり！」

と言っても^{すみれ}輩はまったく揉む事を止めない。

むにゅむにゅ…

「…結構弾力もあるのね…」

おい…既に下着の確認なんでどうでもよくなってるんじゃないのか！？

それに何だ！？結局俺は^{すみれ}輩に遊ばれてるじゃないか！
さっきの言葉は何だったんだよ…

むにゅむにゅ…

「…こんな胸があるのに下着つけないと肩が凝るわよ？」

「っ、つけ…るって…持って…な…い…もんは…く…やめてくれ」

くそ…こいつはなんでやめねーんだよ…

うーん…あれ…何だこの感覚は…あ…何だ…

「あん…」

俺は変な感覚のせいなのだろうか？無意識に喘ぎ声を出してしま

った。

うわああああ！しまった…俺は何で「あん…」とか言ってるんだよ！

堇^{すみれ}は俺が発したあえぎ声に驚いて慌てて胸から手を離れた。
その瞬間に俺は慌てて両胸を両手で隠した。

「も、もう触るなよ！」

「みゆき？今…あんって言った？」

「ば、馬鹿！堇^{すみれ}が悪るいんだろ…お前が…くそ…」

「まさか…か、感じちゃったとか！？もしかして心も女になっちゃってたって事！？」

「うわー！やめろおおおお！馬鹿か！俺は男…のはずなのに…ああ、もう駄目だ…俺はもう駄目だ…わかんねー俺って何なんだ…」

店長がゆっくりと俺の正面に歩いて来た。

「店長…」

「大丈夫だ…みゆき」

「え？大丈夫って？お、俺は男って事だよな？」

店長は俺の肩をぽんと叩くと止めの一撃を放った。

「さっきのみゆきは立派に女の子だったぞ」

「エ？ オンナノコ？」

俺は気が遠くなりその場であつくりと膝をついた。

第六話【俺は男？それとも…オンナノコ？】（後書き）

後書き内容紹介？

アニメ『わたしがメイドでごめんなさい』

制作会社はエンジェルぷれしす

2年前の深夜アニメで毎週月曜日の二十五時から放映していた。
全十二話で終了。続きそうであったが続編は制作されなかった。

続編を望む声も多かったが、続編以前に制作会社が倒産した。

あるお金持ちの我がまま息子の元に来たメイド達の物語で、ヒロインは神無月みゆき。他にも数人のメイドがいた。内容は恋愛系でとにかくメイドが可愛い。※私の妄想アニメなのでこんなもんで簡便を…

第七話【俺に訪れた悪夢？】（前書き）

※すみれ堇視点から始まります。これから先の小説では何度かそういう事がある予定です。

第七話【俺に訪れた悪夢？】

みゆきは店長の一言を聞いた後、突然生気が抜けたようになってかと思うと放心状態になってそのまま床にがつくりと膝をついてしまった。

床で四つん這い状態になったみゆきはそのまま固まって動かなくなっただ。

「あれ？みゆき？どうした？」

店長は先ほどの一言に対する悪気などまったくないみたい。首を傾げて四つん這いになったみゆきを見てる。

まったく…店長はこんなだから彼女の一人も出来ないのね…

っと…そうじゃない…みゆき…

うーん…みゆきの声があまりにも女っぽかったからついつい心も女になったんじゃないかな…なんて言っちゃったけど…

それと、店長がまさかみゆきに止めを刺すなんてね…そしてみゆきは撃沈…

それにしてもみゆき…まったく動かないわね…かなりショックだった様子ね。

私はしゃがみ込んでみゆきの表情を確認した。

うわ…やばい…目が完全に死んでるよ…

「み、みゆき？大丈夫？」

声を掛けてみるもまったく反応なし。どうしようかな…

「みゆき？ねえ？ごめんね、私もちょっと言い過ぎたかも…」

ダメだわ…

「堇？^{すみれ}みゆきはどうしたんだ？」

私は店長を睨んだ。

「な、なんだ？何でそんなに怖い顔をしてるんだ？」

「店長！店長の止めの一言でみゆきがこんなになっちゃったんだよ！わかってんの？」

「何を言ってるんだ？俺はみゆきが女の子らしい反応をしたから女の子だと言っただけだ。その前に堇も^{すみれ}心も女になったとか言ってたじゃないか」

「な、何よその言い方！確かに私もそういう事を言っただけど、でも店長の余計な一言でこうなったんじゃないのよ！」

「待て待て、だから何で俺が堇に^{すみれ}そんなに怒られなきゃいけないんだ？取り合えず言えるのは、俺にも堇にも^{すみれ}原因があるって事だろ？」

確かに…

「ま…まあそうだけど…」

「しかし…みゆきはどうなってるんだ？」

店長は放心状態になって固まっているみゆきを見た。

「私の予想だけど、たぶんみゆきはさっきの女っぽい喘ぎ声を出してしまったのと私と店長に女だと言われたショックで意識が飛んじやってるんだと思う」

「何だそれ…あれしきの事でか？」

「うん、だって…目も死んでるし、放心状態で固まってるし…」

「みゆき…なんて弱い奴なんだ…」

「うーん…みゆきは思った以上に女になった事を気にしてたみたいね…」

「俺は女になっても全然平気だけどな」

「げ…何それ？私は店長の女になった姿とか見たくもないよ…」

「ん？もしかすると結構かわいいかもしれないぞ？」

「うわー…ないない、私は怪物女しか想像できない…」

「おいおい…それって偏見だろ？」

「え？…っていうか…店長ってもしかして女になりたいの？」

「…」

店長が私から目を逸らした…これは…

「マジ？うわ…きもい…そういう願望があったんだ…」

「ち、違う！俺は女になってみたいなんてこれっぽちしか思っていない！」

「思ってるんじゃない…」

「いや、世の中の男は少しは女になってみたいとか思うものだぞ？
堇^{すみれ}だって男になってみたいとか思わないのか？」

「思わない。コスプレで十分」

「…」

「何か言いたい事でも？」

店長は挙動不審に店内を見渡すとみゆきに目をやった。

「そうだと、とりあえずこの放心状態になったみゆきをどうにかしないと！」

「話を逸らしたわね…」

「違う！話を逸らした訳じゃない！こんな場所で放心状態になったみゆきを放置出来ないだろ」

どう考えても話を逸らしてるわね…まあいいか…

「まあ確かにね…レジカウンターの前でメイド姿の女の子が四つん

這いになって放心状態っていうのは頂けないわよね…」

「そうだろう？今はお客さんがいないからいいが、お客さんが来たらびっくりするぞ？」

「そうね…でも、もう五分くらい経ったし、そろそろ自動的に立ち直ってくれないかな…」

かなりの時間店長とやり取りしていたが、みゆきは放心状態のままぴくりとも動かない。

「動きそうもないな…」

「そうね…よし！私がもう一回呼んでみるわ。反応するかもしれないし」

「そうだな、やってみてくれ」

「うん」

私はすこし大きめな声でみゆきを呼んだ。

「みゆき？大丈夫？ねえ！みゆき！」

「…」

全然反応がないわ…もう一度呼んでみよう…

「みゆき！ちょっと！しっかりしてよ、みゆき！」

その瞬間、ぴくりとみゆきが少し動いた。

「みゆき！？気がついたの？みゆき！あれ…動かなくなった…一瞬動いたのに…」

「^{すみれ}堇、もう一回呼んでみたらどうだ？」

「そうね…」

私はもう一度大きな声でみゆきを呼んでみた。

「みゆき！みゆきー！み・ゆ・き！みゆきいいい！げほ…げほげほ」

「おい、^{すみれ}堇…大丈夫か？」

「はあはあはあ…ちよつと噎^むせただけよ…」

「そうか、しかし、みゆきはまったく反応がないな」

「そうね…」

私がふうと溜息をついていると店長が突然四つん這いのみゆきの両脇を掴むと強引に持ち上げた。

「え？ちよ、ちよつと店長！？何をする気よ！？」

「少しハードだが、こういう場合は揺らせば起きるだろ」

「え？揺らすって…」

「いわゆるショック療法だ！」

「え！？何それ！？」

「呼んでも意識が戻らないんだから仕方ないだろう？」

「で、でも…揺らすとかどうなの？」

「どうもこうも無い！実行あるのみ！」

店長は私の目の前でみゆきを上下左右に激しく揺らし始めた。

☆☆☆☆

ここは行幸みゆきの閉鎖された思考空間

しまった…俺は何を女にみたいな喘ぎ声なんか出してるんだ！？
それも意識して出したんじゃない…自然と出た…

や、やばいぞ…もしかして堇すみれの言う通り、俺はマジで心まで女になっただか？

…いや、ない！ない！ないない！そんな事は絶対にない！

おい、行幸みゆき、よく考えてみろよ…

堇すみれにちよっと胸を揉まれて思わず出た声がちよっと喘ぎ声ばかりだっただけだろ？

そ、そうだ…そうだ！その通りだ！

そうだ！それだけの事だ！気にするな！お前は男だ！

そうだ！俺は男なんだ！

：

でもあれだよな：

男は胸を揉まれても声なんて出さないよな！？

え？まで：よく考えろ？さっきはどうだったんだ？

俺は胸を揉まれてたらだんだん変な気分になっていて：

それも何て言うか、男の時には感じなかった変な感覚だったんだ

よなあ：

ちよつと気持ちがいいというか：

って！うわあああああ！

俺は何を考えてるんだ！？

ダメだ：今は何も考えるな！

：

よし：落ち着け：

：

ああ：これが夢ならいいのに：

：夢？

そ、そうか！きつと夢だ！これは夢なんだ！

俺が女になるなんて有り得ない！現実的に考えろよ、男が女になる？そんな事が現実にかかるなんて無いだろ？

あはは…そうだ、そうだな…なるほどな…夢だったのか…しかしリアルな夢だな…それも悪夢っていう奴だ。

「ゆき？………」

ん？誰かが俺を呼んでる？

「……………ゆき！」

誰だ？俺を呼んでるのは？

俺をこの悪夢から覚ましてくれるのか？早くこの悪夢から目覚めさせてくれ…

その瞬間、ふわっと体が軽くなった。

ん？何だ？なんか体が宙に浮いてるような感覚が…

と思ったその瞬間！俺の体は突然震度八の地震でも直撃したのかという位に激しく揺れ始めた！

え！？何だ！？どうなってんだ！？

「こら！みゆき！起きろ！うおおお！」

店長の叫び声にも似た大きな声が聞こえる。っていうか店長の声だ…

俺はあまりにも激しい衝撃で我に返った！

気がつく俺は両脇をがちりと掴まれて店長に持ち上げられている！？

そして店長は大声をあげながら俺を両手で上下左右に揺すっているじゃないか！

な、なにやってんだよ店長は！

く…しかしこれはきつい…激しすぎる！

俺は何とか脱出しようかとジタバタと動いてみたが、激しく揺すられてる上に空中に持ち上げられてるせいもあって体の自由がきかない！

でも何で俺は店長にこんなに激しく揺すられてるんだよ！？

まさか！俺が女になったのは夢じゃないという現実を俺に教えたのか！？

とか考えてる暇はないな…うえ…なんか目が回ってきたぞ…気持ち悪い…

と、取り合えずこの状態から脱出しなければ！

再度俺は体を動かそうとがんばった。

ダメだ…やっぱり動けない…

俺の両脇の下を掴んでいる店長の手をなんとか振り払おうとしたが揺れすぎているせいもありうまく両手も動かない。

おまけにがちり掴みすぎ…

やばい、まじで目が回る…

こ、こうなったら仕方ない…認めたくないがここは…

「解った！店長！俺は今女です！認める！認めるから揺らすのやめて！」

これで…

…

…あれ？店長？

店長は揺するのを全く止めようとしなない。

おい！止めないじゃねーかよ！今は女だって認めたのに！

うえ…かなりやばい…気持ち悪いし、マジで目が回って涙まで出てきた…

「みゆき！気をしっかり持て！うおおおお！」

何を言ってやがるんだよ…今の俺は気をしっかり持ってるじゃないか…

それ所かこのままだと…やばい、き、気をしっかり持てなくなる…

「や、やめろ店長！吐く！酔う！死ぬ！」

懸命に叫んだが目が回ってるせいか声がほとんど出ない…
そしてやはりというかまったく揺れは収まらない。

う…やば…気が遠くなってきた…

「お願いだから店長…やめて…」

やっぱり聞こえてない…

う…目が回ってほとんど声もでねえ…

「…」

ああ…ダメだ完全に声も出なくなった…

何でだ…何で俺がこんな目に遭うんだ…

ダメだ、頭の中が真っ白になってきた…真っ白だ…

どうしてこうなった…

ガク…

みゆきはあまりの揺れの衝撃で意識を失った。

☆★☆☆☆☆

店長に激しく揺すられたみゆきはすぐに意識を取り戻した。

「うわ！すごい！店長、みゆきが気がついたよ！」

「うおおお！みゆきいい」

しかし店長は揺するのを止めない。

「え！？店長？」

その時、みゆきが何かを言ったのが聞こえた。それでも店長は躊躇無くみゆきを揺らし続けている。

「店長！ちょっと！私の声もみゆきの声も聞こえてないの？」

私の目の前でみゆきの顔色がどんどん白く変化してゆく。

店長は目を閉じて揺らすのに一生懸命だ。その顔は真っ赤になっている。

店長は何してんのよ！みゆきはもう気が付いてるのに！何で揺らすのに夢中なのよ！

ちよと！？このままじゃみゆきが危ない！？

「ちよ！ちよと店長！やりすぎだって！ストップ！」

私は大声で店長を制止しようとした。しかし店長は揺するのを止めない。

私は咄嗟にみゆきを見た。するとさっきまで揺れに抵抗しているように見えたみゆきが、今はされるがままにブラブラと頭と手足を揺らしている。そう、まるで壊れた人形みたいになってる。

うわ！もしかして気を失ったとか！？

こうなったら手段を選んでられないわ…

「店長やめてえ！」

私はそう言いながら店長に抱きついた。

第七話【俺に訪れた悪夢?】（後書き）

おまけ? 作者と対談その0

作者「今日のお客様は行幸さんです」

行幸「作者:これは何だ?」

作者「いやー後書きの内容を思いつかなかったからつい:」

行幸「で?俺は何をすればいいんだ?」

作者「えっと:じゃあ:質問するので答えてください」

行幸「え?えっと:了解」

作者「えっと:彼女居ない歴は何年ですか?」

行幸「聞く必要ないだろ:」

作者「えっと:彼女は欲しいですか?」

行幸「そりゃ:多少:」

作者「へえ:そうなんだ:」

行幸「な!何なんだその言い方は!」

作者「いや:何でもありませんよ?彼女を作る為にはまずは男に戻らないとね」

行幸「今すぐ戻せよ」

作者「えーそうしたらこの小説終わるじゃん」

行幸「いいよ終わっても」

作者「一応は終わりまでもう考えてあるんだよね」

行幸「おお!そうなのか!じゃあ俺は男に戻るんだな!」

作者「おっと:次話を書かないと:それじゃ!」

行幸「ちよ、ちよっと待て!答えてから行け!」

って何よこれw

第八話【俺に訪れた悪夢？】

私は店長に抱きついて制止した。そして店長はやっと揺らすのを止めた。

「ふう…やっと止まった…」

店長はきょとんとした表情で私を見ている。

「何だ！？どうした輩^{すみれ}？俺にいきなり抱きつくなんて…ま、まさか！ダメだ！俺は店長でお前は店員だぞ！」

何この人！？何を勘違いしてるの！？

私は慌てて店長から離れた。

「店長！何を变な勘違いしてるのよ！」

「勘違い？じゃあ何で俺に抱きつく！抱きつくのは愛情表現じゃないのか？」

「私は別に店長に抱きつきたくなんてなかったの！店長がみゆきを揺らすのを止めないから体を張って止めただけ！だいたい何で私が店長なのに愛情表現とかしないといけない訳？キモイ！」

「おいおい、キモイとか酷くないか？大体、俺はみゆきの意識が戻らないから揺らしてただけだぞ？そうしたら輩^{すみれ}が突然抱きついて来たんじゃないか」

「あのね…店長が揺らし初めてからすぐにみゆきは気がついたの！それに何かやめてほしいって事を懸命に訴えてたんだよ！」

「え！？それは本当なのか？」

「何で私がウソをつかなきゃいけないのよ…まったく…」

「だが今おれが持ち上げてるみゆきは…」

店長はみゆきの顔を見上げた。

「あ…」

「あ！じゃないよ！」

みゆきは店長に両脇をしつかりと掴まれて持ち上げられたままうな垂れていた。

その姿は本当に糸の切れた操り人形のように見えた。

真横から見たら何かの対戦格闘ゲームでメイドの格好をしたキャラが店員の格好をしたキャラに吊り上げる技か何かでKOされた姿にも見えなくもないけど…

「ひっどいこれ…ちょっと店長やりすぎ…みゆきが完全に気を失ってるじゃないのよ」

「みゆきがこうなったのはもしかして俺のせいかな？」

「もしかしても何も、どう考えても店長のせいでしょう…」

「いや、だから俺はただみゆきを起こそうとしただけで…」

「だから、さっきも言ったけどみゆきは店長に揺すられてからすぐに気がついたの！それなのに気が付かないで気絶させたんでしょ！」

「え…すまん、揺らすのに夢中で…」

「やっぱりね…まったく…」

流石の店長も今回は悪気を感じている様子だ。

「よしわかった、俺が責任もってみゆきを起こす」

店長はそう言うともゆきを一旦下ろすと両脇を掴み直して再び持ち上げた。

「え？ちょっと待ってよ店長！何する気？まさかまた揺らすとかないよね？」

「ん？そうだが？」

「ちょっと何を考えてるの？みゆきを殺す気？」

「ん？殺すだと？大丈夫だ！今度は目を開けて揺らすからな」

「そういう事じゃなくって！」

「じゃあどういう事だ？」

「ほら見てよ！こんな壊れたお人形みたいになっちゃってるのに、強引に揺らして首の骨とか折れたらどうする気よ！みゆきは今は女

の子なのよ？もしかしたらすっごく柔い体質になってるかもしれないんだよ？」

店長はみゆきの全身をじろじろと見た。

「確かに壊れてるな…ふむ…しかし、力が抜けているからそうそう簡単には骨は折れないと思うんだが…まあそうだな…すみれ堇の言う通りに身長も変わってる所を見ても体質も変わってるかもしれないな…そうなるとうんちく関節を痛める可能性は否定出来ないな」

「そんな^{うんちく}蘊蓄はどうでもいいの！もうやめなさいって事！」

店長はしばらく考えるとみゆきをゆっくりと下ろした。

「わかった、やめておく」

ふう…よかった…店長の事だから強引にやっちゃうのかと思った…

「だがしかしだ…」

「え？しかし？」

「みゆきは本当に女になったんだな…すっごく柔らかい…」

「え？」

良く見れば店長の手がみゆきのふくよかな胸に若干かかっているじゃん！

そして店長は普通を装ってるけど、すこし顔がニヤケてる…コスプレした私に興味ないねーっていいながら実は興味があつて

じろじろ見てる人みたいだわ…きつと同じ部類ね…

「ちよと…店長！どさくさに紛れてどこを触ってるのよ！」

「何だ？ちよと胸に手が触れたただけだろ、これは不可抗力だ。俺はみゆきを起こそうとしてたまたまこうなっただけだぞ」

「店長…それは言い訳よね…言い訳するなんて男らしくない」

「な！？何だと！お前、それが目上の人に対して言う事か？」

「あ！そうか！わかった！店長はみゆきの胸に手が触ってたからそっちに意識がいつちゃってみゆきが起きたのに気がつかなかったんだ！」

「ち、違う！」

店長はどう見ても動揺している。凶星かな？

「気を失った女の子の胸を触るなんてやっぱり変態ね…」

「待て待て！俺は変態じゃない。考えてみろ！みゆきは男だろうが！」

「こんな時にだけ男だとか…なんて都合の良い言い訳…」

「言い訳じゃない！俺は事実を言っているだけだ」

「真実って…じゃあ言い直すわよ。真実、今のみゆきの体は女の子です！」

「う…だが、さっきも言ったが、これは不可抗力であって俺は変態ではない！」

すごいムキになってるし…このまま相手をしてても疲れるだけね…

「ふう…いいわよ…もういいわよ。店長が変態だろうが変人だろうが変質者だろうが犯罪者だろうが私には関係ないもの」

「待て…どんどん言い方が酷くなってないか？犯罪者とか…」

「気のせいじゃない？別に気にしないでいいわよ。で、ちょっと店長、みゆきを事務所のソファーまで運んでくれる？但し、今度は胸を触らないようにしてね」

「な…俺はそんなに信用ないのか？」

「無いよ！」

「…」

「さあ、私も手伝うからさ」

「…」

「店長！お尻も触るな！」

「う…」

私は店長と一緒に気を失ったみゆきを事務所まで運んだ。

☆★☆☆☆☆

「…みゆき？」

誰かが俺を呼んでる…

あれ？俺は寝てたのか…なんだろう、ひどく嫌な悪夢を見ていた気がするな。

なんだったっけ…えっと…確か…
そうだ！俺が女になった上に酷い目に遭ってしまっただ！

「…みゆき？」

また呼ばれた…ふう…よし、起きなきゃ…

俺はゆっくりと目を開けた。
すると俺の目の前には堇すみれの姿が…

「あれ？堇？すみれ何で堇すみれがいるんだ？」

「あ、やっと起きた！」

「え？やっと？起きたって？」

俺はゆっくりと周囲を見渡した。
暗くって窓の無いちよっと機械油の匂いのする個室…

そっか…ここは俺の働くパソコンショップの事務所だ…
俺はこんな場所で寝てしまったのかよ…何時の間に寝たんだろ
う…

あれ？何かあったっけ？確か何かあったような気もする…あれ？
思い出せない…

「堇^{すみれ}、もしかして俺はずっとここで寝てたのか？」

「うん、そうだよ…三時間くらい寝てたかな？」

「三時間！？って今は何時だよ！」

「え？もうすぐ四時かな？」

「四時！？ってバイトが終わる時間だよな？」

「そうだね」

「で、何で俺はここに寝てたんだ？」

「え！？何？さっきあった事を何も覚えてないの？」

堇^{すみれ}が驚いた表情で俺を見て居る。

「え？えっと…何かすっげー変な夢みちゃったような気がする」

「え？夢？」

「そうそう、俺が女になっちゃう夢なんだよね…それで店長にメイ

ド服を着せられてさあ…マジで最悪な悪夢だった」

「みゆき…」

「^{すみれ}堇どうした？」

「みゆき？ ちょっと記憶が飛んでるかも…」

「え？ 記憶が飛んでるって何を言ってるんだよ」

「気持ちは解るけど、ダメよ…現実逃避しちゃ…」

「現実逃避！？ 何だそれ？」

「何だ！？ ^{すみれ}堇は何を言ってるんだ？」

「そりゃショックだと思うよ…突然女の子になったり、店長にメイド服を着せられたり、私もみゆきの胸を揉んだりしちゃったけど…」

「え！？ ま、まさか…さっきの出来事は夢じゃなかったのか？」

俺は慌てて自分の格好を確認した。

「何だこの格好は！ メ、メイド服！？ それにこの違和感のある膨らみはもしかして！？」

俺は慌てて自分の胸を触った。ふにゃふにゃと柔らかい感触が…

「この感触は…って事は…俺は…」

「だから言ってるじゃないの…女の子になって店長にメイド服を着せられたんだって」

「うおおおおおおお！嘘だ！夢だ！夢落ちだったはずなのに！」

「ちょっと！落ち着いてよみゆき！いくら騒いでも男に戻る訳じゃないのよ！私も一緒に男に戻る方法をちゃんと探してあげるから！」

「ダメだ…俺はもうダメだ…夢だと信じてたのに…」

「だから私が一緒に男に戻る方法を探してあげるって言ってるでしょ？」

「夢だ、夢だ…夢であってくれ」

「…」

「そ、そうか…まだこれも夢なんだ…もう一度寝ればきっと…」

俺は先ほどまで寝ていたソファに再び横になった。

そしてふと^{すみれ}堇を見ると何かすっぱー機嫌が悪くなってる…

「ねえ！みゆき！あんた男でしょ！（今は女だけど）だったら今の現実をちゃんと受け止めてよ！私が一緒に男に戻る方法を見つけてあげるって…言ってるのに…もう…」

その時、ガチャ！という音がして事務所の扉が開いた。
そして店長が部屋の中へ入って来た。

「お？みゆき、やっと起きたのか？」

俺は店長の顔を見た瞬間に店長に激しく揺すられた事を鮮明に思い出した。

「ん？どうした？俺をそんなに見て？」

そうだ！やっぱり夢じゃない！俺は店長に揺すられて：

「おい：みゆきは何で俺をそんなに睨んでるんだ？」

「おい店長：よくも俺をふるふるゼリー缶みたいにシェイクしやがったな！」

俺はソファーから立ち上がると店長に詰め寄った。

「え？あ、ああ：あれか：いやすまん、あれはみゆきを起こそうと思っただな：」

「何が起こそうと思ってだ！ホントにマジで死ぬかと思ったじゃねーか！三途の川が見えかけてたぞ！急に視界が明るくなって記憶も飛んだんだぞ！」

「まあまあみゆき、落ち着け、あれはちょっとやり過ぎた。謝るから落ち着け」

「許さない！絶対に本気で悪かったと思っただろ！」

「思ってるから言ってるんだろ？ほら、みゆきが寝てた時間もちや

んとバイト時間で換算してバイト代金は出してあげるから」

「そんなに当たり前だろ！バイト代金が貰えなかったらこんな店なんか！」

「こんな店なんか？」

しまった！バイト代が無いと生活が…や、やめれねえええ！

「…い、今まで通りに働く…」

悲しい…すっげー悲しい…これが現実だ…

「ファイトよ…みゆき」

すみれ
堇は俺の横まで来ると俺の肩をぽんぽんと軽く叩きながらそう言った。

「大丈夫だみゆき。お前はここでずっと働いていいからな」

「あ、はい…これからも宜しくお願いします…」

情けない…あそこでやめてやる！って言えない俺ってかなり情けない…

「しかしお前の体は本当に柔らかいな…」

店長は俺を舐めまわすように見ながらそう言った。
そして俺は一瞬背筋がゾツとした。

「え？そ、それはどういう意味だよ？」

「店長：体じゃなくって胸がでしょ？」

堇すみれそう言いながら店長をすっごく冷たい視線で見ている。

「え！？て、店長：俺の：俺の胸に触ったのかよ…」

「え…いや…」

よく見れば店長の視線が俺の胸でロックオンされてる！

俺は咄嗟に胸を両手で隠した。

「見るな変態！」

「変態じゃない！男は自然と視線を胸に持ってゆくものだ！それにさっき堇すみれが言っていた事はみゆきを起こそうとした時にちよっと胸に…本当にちよっと触れただけなんだ！不可抗力だ」

「店長はみゆきのふくよかな胸に触れたせいで意識がそっちにいつちやったから、みゆきの声に気がつかなかったのよね？」

「げ…マジかよ…俺が懸命に訴えかけても揺れが収まらなかったのはそういう事なのか」

「いや、だから…それは…」

「堇すみれに胸を揉まれるわ、店長に触られるわ、揺らされて気を失うわ…俺はお前らのおもちゃか！」

「…」

「おい！否定しろよ！」

「すまん…ちょっとだけおもちゃだった」

「逆に肯定するなよ…」

「馬鹿店長！何を言ってるのよ！そんな事を言っているとまたみゆきが放心状態になっちゃうじゃん！みゆき、本当にごめん、私達が悪かったよ…」

「どうせ堇^{すみれ}だって本当は俺の事…おもちゃみたいに思ってたんだろ……」

「え？違う！違うよ！」

「違うって言われてもそんな簡単に信じられるかよ！」

俺は怒鳴りながら堇^{すみれ}を睨んだ。

第八話【俺に訪れた悪夢？】（後書き）

おまけ情報

みゆきの出身地は何処なのか？答えは埼玉県です。

え？近いのになんで両国に住んでいるのか？

それは家にいると自由にパソコンが出来ないからというのと、埼玉は埼玉でもちよと遠い所だからです。

まあ結局一番は自由にパソコンが出来ない（MMOが）って事です
ね。

あと、小説に出てませんけど妹がいます。現在高校3年です。

登場するかは未定ですが：妹はMMOなんか興味なくてパソコン
||オタクっていう偏見の目で見ていたようです。

決して嫌われていた訳ではありません。

という事で今回はこの辺で：

第九話【俺に訪れた悪夢？】

俺にいきなり怒鳴られた堇すみれは悲しそうな表情で俯いた。

「な、何だよ…そんな表情すれば許して貰えんでも思ってるのかよ」

「本当に思っていないのに…」

堇すみれは俺に聞こえるか聞こえないか位の小さな声で言った。

「本当にかよ？」

「本当だよ…」

「…でも、本当はそうやって謝れば済むと思ってるんだろ？」

「…思っていないよ」

堇すみれは再び小声でそう言った。

俺は堇すみれの沈んだ姿を見て少し気持ちを押さえ込んだ。

「おいみゆき、堇すみれがちゃんと謝ってるんだ、許してやれ」

店長がまるで他人事の様いきなり俺と堇すみれとの会話の間に入ってくる。

何が許してやれだ！俺は店長も許してないんだぞ！
ここで一緒に謝らない店長は見るだけムカツク。

普通は店長が先に謝るべきだろ？結局は俺に対して悪い事をしたとかまったく思っていないんだな。

くそー、すっげー文句言ってやりたいけどアルバイトをクビになると困るしな…

よ、よし…これからは店長を無視してやるからな！

「本当にごめんね、みゆき…」

再び^{すみれ}堇が謝って来た。

^{すみれ}堇の表情を見てこいつは本当に悪いって思ってるんだなと感じた…俺も男だ、これ以上年下の女に対してムキになって怒っても仕方ないな。

ここは寛大に許すか…と思っているとまた店長が割り込む。

「ほら、みゆき、こんなに謝ってるんだ。許してやれ」

…何が許してやれた…お前が先に謝れよ！っと…無視するんだった無視っと…

「わかったよ…^{すみれ}堇。お前は反省してるみたいだし許してやるよ…だけれどな、このシチュエーションはさっきもあっただろ。^{すみれ}堇は一度は謝ったのにすぐにその事を忘れて俺の胸を…も…揉んだ…よな…」

^{すみれ}堇は少し顔を上げた。

「私は謝った事は忘れてなかったよ、ただ…私は店長にみゆきが下着を付けてないという事を証明したくって…つい…やりすぎちゃった…ごめんね」

「証明するにしても本当にやりすぎだろ…」

「だって…みゆきの胸って私よりも柔らかいし…揉んでて気持ちよかったし…」

「ちょ、ちょっと待て！何だそれは！？」

「というか比較対象がお前の胸なのか？っていう事は^{すみれ}堇の胸は俺の胸よりもちよと硬いのかな…って何を俺は考えてるんだ！

「何だそれはって…言ったまんまだよ？みゆきの胸って大きいのに柔らかいんだもん…ぷにゅぷにゅしてたよ」

「何だそのぷにゅぷにゅって…も、もしかして^{すみれ}堇は女に興味があるのか？そうなのか！？そういう系なのか！？」

「え！？な、何を言ってるのよ！私は店長じゃないし！そういう趣味はないもん！店長みたいに変人じゃないよ！」

^{すみれ}堇は顔を真っ赤にして否定した。

「おいおい！待て待て、聞き捨てならんな！俺は変人じゃないぞ？俺は普通だ」

こういう事にはすぐに反応するんだな店長。

「え！？店長は絶対普通じゃないよ！だって今日の行動とか、秘密にしていたアニメの趣味とか、私には理解出来ないし」

「な、何を言ってるんだ？俺だって堇すみれのコスプレの趣味は理解出来ないぞ？」

「私の趣味を店長に理解して欲しいとか思った事なんてないわ、ただ、店長は自分の趣味を人に言えなかったんでしょ？要するに自分の趣味を隠すっていうのが理解出来ないの。私は隠したりしないし。聞かれれば話すし。自分の趣味に自信がないって事は変な趣味なんだっていう自覚があるって事でしょ？」

「く…それは…」

二人の言い合いの内容はともくだらない事だが、それにしても今日の堇すみれは店長に強い…俺と違って金があるから辞めさせられる恐怖感がないんだろうか…

「と言う事でみゆき、私は決して女性に興味なんてないからね！誤解しないでね」

うーん…まあいいか…

「堇すみれ、もう二度と俺の胸を揉んだりするなよ」

「うん、わかった…本当にごめんね」

「もういい、許してやるよ」

「ありがとう…」

堇すみれはもう許してやろう。しかし、ここでスパッと許せる俺ってやつぱり男だよな！

で…今だに謝らない店長はどうする？と言っても何も出来ないしな…やっぱり無視しかないか。

「みゆき！お前は俺が変人だなんて思っただけだよな？」

店長が唐突に質問をしてきた。

何を質問して来てるんだよ…結論から言うとなんか俺は店長が変人だと思ってるんだが…

しかし、あまりに不利な事をハッキリ言うところで働くにしても職場環境とかに悪い影響が出そうだし…無難に相手するか…

「えっと…わかりません」

「わかりませんか？それじゃ俺が変人かもしれないですって言うてるようなものじゃないか」

「はい」

「はい！？」

あ…しまった…つい「はい」とか言ってしまった。

「あ…いや…普段の店長は普通でした」

「でしたって過去形だよな…」

「あ…」

しまった…その通りだ。

「どうなんだ？ みゆきはどっ思ってるんだ？ ハッキリ言え！」

店長は厳しい表情で俺に詰め寄った。

「ふ…普通だと思います…」

「そうだろ！ やっぱりそうだよな？ おい堇すみれ聞いたか？ みゆきは俺の事を変人だと思っ
てないぞ？」

堇すみれが俺の方を見てる。その表情は仕方無い人ね…って感じに思える。

そうなんだよ…仕方ないんだよ…しかし弱い…俺はかなり立場が弱いな…

「堇すみれだけだぞ？ 俺が変人だと思ってるのは」

いや、俺もそう思うけど言えないだけだ…

「そうですかー？ 別にみゆきがどっ思っても私は店長は変人だと思っ
てるいますから！」

「ちょ！ まだ言うのか？ 堇すみれも強情な奴だな」

「強情じゃなくて素直な意見ですけど？」

「く…」

言い合いは相変わらず堇すみれ優勢だな…

「もういいですか？ 店長」

「…」

店長は無言で堇すみれを見ている。言い返したいのに何も言えないって
いう表情だな…

「みゆきも立場はわかるけど、思ってる事は素直に言ったほうが
いいよ？」

堇すみれが俺の方を見ながら言った。

今ここで余計な事を言わないでくれよ！ ほら！ 店長が俺を睨んで
るじゃないか！

俺は変な事を言ったら店長に辞めろとか言われかねないんだ！

「え…いや…うん…あはは…」

「みゆき…お前はやっぱり俺の事を？」

「え？ いや、ふ、普通だと思います。誰でも隠し事はあるし…」

俺はそう言いながら堇すみれを見た。堇すみれは俺の言った事に不満そうな顔
をしている。

そして声は聞こえないが口が動いた…何か言いたいのか？ えっと
…い？ く？ じ？ な…「意気地なし！？」 だと！？

くそー！ 何が意気地なしだ！ っていうか…意気地なしだよな…今
の俺は…

「店長、店長は何でみゆきに謝らないの？」

堇^{すみれ}は店長に向かって言った。

「ん？俺が何でみゆきに謝る必要があるんだ？」

「…はい…もういいです…」

堇^{すみれ}はそう言うとき大きな溜息をついた。

「どうやら店長の相手をするのはやめたいらしい。」

「俺も今更店長に謝られても気分がすっきりする訳じゃないし、もうどうでもいい。」

「そうだみゆき！私ね、お詫びという訳じゃないけど、みゆきが男に戻る方法！本当に一緒に探してあげるからね！」

堇^{すみれ}は俺の方を向くと突然大きな声でそう言った。

「え？あ、ああ、ありがとう」

「おい、みゆき！俺も一緒に探してやろう！」

「え？あ、どうも…」

突然話題が変わってびっくりした…

しかし…堇^{すみれ}は確かに一緒に探してくれそうだが…店長はどうなんだ？

「どうも勢いだけで言ってる気がするな…でもまあ…探してくれると言ってるんだから断るのもおかしいしな…」

「しかし…本当にどうすれば俺は男に戻るんだろうな…」

「そうね……どうすれば戻れるのかな……」

「おいみゆき！」

「え？ な、何ですか店長」

「俺も一緒に捜してやるが…」

「はい？やるが…？」

「捜してやるが……もしも……もしも万が一だぞ？　もしもみゆきが男に戻れ無くっても大丈夫だぞ？　俺は今のお前を受け止めてやる覚悟は出来ているからな！」

受け止める覚悟は出来てる！？
 いらない！いらなすぎる！そんな
 覚悟は必要ない！

「げ！店長！みゆきが男に戻れ無くてもって受け止めてやるって……本当は戻って欲しくないんでしょ！みゆきの体が目的なんでしょ！キモイ……いやらしい……」

「堇^{すみれ}何を言うか！ 違う！ 俺はそんな事はまったく微塵にも思っていないぞ！？」

「ふーん…でもね、みゆきがもしも女の子のままだったら…」

「ん？ だったら何なんだ？」

「わ、私が…面倒見る…」

え！？何だ？^{すみれ}堇は何を言ってるんだ！？俺の面倒見るって何だ！？

「す、^{すみれ}堇！？どういう意味だよ」

俺が動揺しているのを見て^{すみれ}堇は慌てて自分で自分をフォローした。

「へ、変な意味で取らないで！私は店長が危険だからそれならって意味で言っただけ！別に何をしたい訳じゃないからね！」

^{すみれ}堇の顔が真っ赤になっている。

「そ、そうか…びっくりした」

「待て！何だ？やっぱりお前らは俺が信用出来ないのか？みゆきは俺を信用してるだろ？」

げ…うーん…何ていうかな…店長はイマイチ信用出来ないんだけどな…

^{すみれ}堇と店長なら確実に^{すみれ}堇の方が信用出来るな。
だからと言っても^{すみれ}堇に面倒を見て貰うのもあり得ないし…

「あのさ…信用とかそういう事よりも、俺はもしも戻れなくても一人で生活するし…別に店長や^{すみれ}堇を頼ったりしないから…というか…絶対に男に戻るからそんな心配はいらないし」

「みゆき？別に遠慮しなくていいんだぞ？俺はみゆきの力になりたいんだからな」

と言ってる店長の不気味な笑み…視線は完全に俺の胸にロックオンされてる…下心が見え見えで危険だ…

「店長の視線がいやらしい…みゆきの胸ばっか見てる…」

俺の思ってる事を^{すみれ}董がハッキリ言いやがった。

「み、見てないぞ！」

店長は慌てて視線を外した…

「あ、そうだ！みゆき」

「ん？」

「みゆきが気を失ってる間に店長と話をしたんだけどさ」

「店長と話をした？何をだよ？」

俺はちらりと店長を見た。視線が何時の間にか俺の胸に戻ってるじゃないか！

あれだ…こういう立場になって解ったが、男の視線って思った以上にハッキリわかるんだな…女の子か男にじっと見られるのが嫌って気持ちがすっげーわかる…

「ねえ？みゆき聞してる？」

「あ…ああ…聞してるぞ」

やばい、聞いてなかった…

「もう一回言うよ？まず一つ目はみゆきは今日は下着をつけてないから店頭キャンペーンはなしという事ね」

「なしか：でもあれだぞ？下着も問題だが時計を見ろよ、バイトの終わる時間になってる。時間的に考えてももう無理だろ？」

俺がそう言いながら再びちらりと店長を見ると今度は店長と目が合ってしまった。

店長は怪しい笑みを浮かべると俺の方へと歩き出す。そして俺の真横まで来た。

真横に立たれると改めてその身長のでかさが際立つ：威圧感をすごく感じる。

「な、何だよ店長！？何の用事だよ：さ、触ったら怒るぞ！」

「大丈夫だ、触ったりしない」

「じゃあ何だよ」

「いや、あれだ、みゆきのやる気があるのなら今からでもキャンペーンOKだぞ？」

そう言って店長は俺の肩に手を置いた。その瞬間に背筋がゾツとした。

おい！触らないって言ってこっそり触ってるじゃないか！と心の中で文句を言った：

「みゆき…」

「な、何だよ」

「キャンペーン…やらないか？」

うわ！目が！店長の目が怖い！だ、だが断るぞ！流石に断らないと！

「えっと、お、俺は…」

俺が途中まで断りの文句を言いかけていると堇がそれに割り込むように大きな声で店長に向かって言った。

「ちょっと！さっき店長と私で話しをしたばっかなのに今更何を言ってるの？今日は店頭キャンペーンはなしって決めたんだから何でみゆきに『やらないか？』とか馬鹿な事を言ってるのよ！」

「え？いや、俺は別に強要してる訳じゃないぞ？」

「私から見れば脅して強要してるようしか見えないわよ！」

「俺はみゆきのやる気があればと言ってるだけだろ？さっきからあらゆる事に突っかかってくるな」

「私はみゆきの事を考えてあげてるの！店長には任せられないから」

「何だそれ？みゆきの事を考えてあげてる？俺だって考えてるんだぞ！」

「私の方がちゃんと考えてるわよ！」

「おい：何だ？そんなにムキになって：もしかしてお前：みゆきが好きなのか？」

て、店長！何を突然言い出すんだよ！？

「え！？な、何で私がみゆきなんかを！わ、わ、私はね！男になんて興味ないんだから！」

「ほう：興味ないと？じゃあなんでそんなに動揺してるんだ？怪しいな」

確かに：堇^{すみれ}は動揺してるようにも見えるが：でもまさか俺を？ないだろ？

「い、今はそういう話じゃないでしょ！みゆきの事を話てるのに何で私の事なんか…」

堇^{すみれ}はそういうと俺の方を向いて俺を指差した。

「見なさい！こんな状態になってるから心配してあげてるだけですよ！」

店長は俺の方をじっと見た。

「まあ：お前が誰を好きになろうが俺の知ったこっちゃないけどな」

「だから何で私がみゆきなんか好きになるのよ！私の理想はもつとレベルが高いんだからね！」

おいおい何だか酷い言い方されてるな：その台詞は俺はレベルが

低いって言ってるとしか聞こえないぞ…

「わかったからムキになるな、キャンペーンは無しでいい」

「だから最初からそう言ってるじゃん…みゆきは解ったの？やんなくていいんだからね」

「というか最初からやる気なんて無いんだけどな…」

「ああ…わかった」

「あとは、もう四時だから私とみゆきは上がりってOKって事」

堇^{すみれ}がそう言った瞬間に店長は驚いた表情になった。

「ちょっと待て！みゆきはシフトで四時までだったからいいが、堇^{すみれ}は五時までだろ？お前まで上がるなんて聞いてないぞ！？」

「店長、もう昼からのバイト君は来たんでしょ？」

「来てるが、それは関係ないだろ？」

「関係あるよ。私もみゆきも休憩とってないし、バイト君がいるなら休憩の一时间分早く終ってもいいじゃん」

「待て！俺だって休憩を取ってないぞ？」

「それは店長だから仕方ないでしょ？」

「何だその言い方は？そんな我俣を言っているとお前のバイト代カツ

トするぞ?」

「何それ? 私まで脅すつもり? いいわよ? 別に私はお金に困ってないし、一時間分引けば? 何なら今日の分もいらないわよ?」

「いや、そういう事じゃなくって:俺は堇すみれに時間まで仕事をお願いしたいだけなんだが」

うわ:堇すみれの言い方は強いな:流石お金に困ってないだけある。正直うらやましい:しかし:ここは店長の言い分もわかる気がする:これは堇すみれの我俣すみれだろう。

「と言う事なの! もう私もあがるからね! はいはい! 着替えの邪魔! 出ていって!」

「待て! まだ話は終わってないぞ!」

「煩い! もう終わったの!」

「ちょ! ちょっと待て勝手に決めるな」

「何よ! 店長まさか私の裸を見る気なの?」

「え? いや、そういう訳じゃない」

「じゃあ出て行って下さい! 女子は着替えです」

「まで! みゆきは男だろうか!」

「今は女だからいいの!」

堇^{すみれ}はそのまま店長をグイグイと事務所の外へと押し出した。

無理やり追い出したぞ…なんて強引なんだ…

「おい！ちよとま…」

バタン！かちや！

堇^{すみれ}は店長を追い出すと扉に鍵をかけた。

第九話【俺に訪れた悪夢？】（後書き）

後書き（永井堇【ながいすみれ】について？）

堇は裕福な家庭に育った一人娘です。

実は勉強も出来るとっても優秀な女の子ですが、どうも遅い反抗期なのか親の言う事を聞いていません。それで実家を飛び出て都内に一人暮らしをしています。（しかし親の持っているマンションに住んでる）

パソコンは中学時代からやっており、親に隠れて遊んでいました。コスプレはあるMMOのオフに行った時に誘われたからやり始め、それから嵌ってしまった様です。（もちろん親に内緒で行ってますし、コスプレも内緒です）

この子は恋愛に関しては相当に初心です。だってまともに恋愛した事がないのだから：

しかし、一人娘で裕福に不自由なく育った為に相当に我が侂です。彼氏なんて出来るのでしょうか…最後までパソコンが恋人とか？読者の皆様も寛大な気持ちで見守ってあげて下さい。

第十話【俺に訪れた悪夢？】

ドンドンドン！と店長が激しく扉を叩く音が室内に響く。

店長は堇すみれに無理矢理事務室から外へ出されてかなり怒っているだろう：

しかし、そんな事なんて一切気にしていない堇すみれは扉の前で勝ち誇った表情で腕を組んでいる。

「ふう…邪魔者は居なくなったわね…」

「いや…お前が追い出したんだろ…」

「え？別にいいじゃないのよ何だって、居なくなったのは本当なんだから」

「いや、よくないだろ…」

その時、「おい！開けろ！話はまだ終わってないぞ」と扉の外から店長の怒鳴り声が聞こえた。

そしてドン！ドン！ドン！と再び扉を叩く音が室内に響く。

「おい堇すみれ、マジでこんな事してもいいのかよ？店長はかなりお怒りモードだぞ？堇すみれはバイト代がカットされても平気なのか？いや、バイト代ならまだいい、バイトを辞めされられたらどうする気なんだよ」

俺がそう言うすみれと堇はドン！ドン！と叩かれて今も振動している扉を見ながら言った。

「別にいいよ。私はお金に困ってる訳じゃないし、辞めろって言われればこんな店なんて辞めて…」

^{すみれ} 堇の話が途中で突然途切れた。

^{すみれ} そして堇は俺の顔をじっと見ている。

ん？ 何だよ、俺にここまでの話で察しろって事なのか？

「どうしたんだよ？ 金に困ってないから辞めてもいいって言いたいのか？」

俺がそう言うとき^{すみれ} 堇は不満そうな顔に変化した。

なんだよこいつ…何が言いたいんだよ…

^{すみれ} 堇に先ほどの威勢の良さは無くなった。

「辞めてもいいわよ…いいけど…」

「何だよ…結局は辞めたくないんだろ？」

「違う、こんな事で辞めるのって馬鹿じゃん。私の負けみたいになるでしょ」

「だから何だかんだ言っても結局は辞めたくないんだろ？ じゃあ店長にお前が嫌でも謝った方がいいんじゃないか？」

「…それはやだ」

「おいおい…何が「やだ」だ…子供じゃあるまいし」

「いいじゃないのよ！どうせ私は子供よ！別にみゆきには関係ないでしょ！」

先程まで元気の無かった堇^{すみれ}が、今度は顔を真っ赤にして俺に怒鳴ってきやがった。何だ？逆切れかよ？

「ああ、別に俺には関係ねーよ。だけどな？色々と事情があったにせよ、俺に関わったせいでお前がこの店を辞めた！っていうのは俺はやなんだよ！」

俺も堇^{すみれ}に向かって怒鳴った。すると堇^{すみれ}は何も言い返さずに不満そうな顔で俺の顔を見ている。

「何だよ？言いたい事があれば言えよ」

俺がそう言う^{すみれ}と堇は唇を噛んで俯いた。
そしていきなり「…ごめん」と小さな声で謝ってきた。

何だこいつは…喜怒哀楽が激しいというか…難しい女だな…
しかし…逆に考えれば自分の考えに対して素直なんだろう。でもまあ感情のコントロールが出来ないって事はまだまだ子供だよな。

「みゆき…ごめんね…そうだよね、みゆきには迷惑かけられないし…でも大丈夫だよ！きつと店長は私に辞めろなって言わないよ。それに私も辞めるって言わない、だから今日は終わりでもう着替えて帰ろうよ」

しかし結局そういう結論になるらしい…
前言撤回、こいつは素直じゃなくなって自分勝手に我侭なだけなんだな。

まあもういいか…これ以上俺が何か言うのも面倒すぎる。

確かに店長はああは見えても結構へたれだから^{すみれ}堇に辞めろとか言わないだろうしな。

「わかったよ…それにしても今日の^{すみれ}堇は店長に対して超強気だったな」

俺がそう言うとき^{すみれは}堇は赤渕の眼鏡を右手で触りながら言った。

「私はいつもは我慢してただけなの！今日は我慢しきれなくって思ってる事をハッキリ言っただけ。ほら、今日の店長は何かおかしかったっていうかさ…変な事ばかり言ってたし、怪しい趣味も発覚したでしょ？」

「まあ…確かに…おかしかったし、変な趣味も発覚した」

「私ね、まさか店長があそこまで変人だと思って無かった」

「確かに…って、まて、あそこまでって…^{すみれ}堇は前から店長が変人だと思ってたのかよ？」

「え？何それ？当たり前でしょ？みゆきこそ店長が普通の人だと思ってたの？ただのパソコンショップだったらまだしもこのお店は同人系や十八禁のソフト、コスプレグッズまでまで取り扱ってるお店よ？こんなお店の店長が常人に務まるはずないじゃん。何かあるって思わない普通？」

う…俺はそんな事をまったく思った事のなかった…気にした事も無かった…

もしかして俺も^{すみれ}堇に怪しい奴とか思われていたのか？店長が常人

で務まらないと言うのであれば、店員も常人では務まらないで考えるだろ。

そうなる^{すみれ}と葦自身はどうなんだ！？人の事を言えるのかよ！だいたいコスプレグッズはお前がこのお店でバイトを始めた時に店長をそそのかして取り扱う様にしたんだろうが…なんて俺からは言えないよな…

俺がこのお店が働く事になった切欠はこの店の前に張ってあったバイト募集！の求人ポスターだ。細かい事なんて考えて入った訳じゃない。

しかし、よく考えれば何で葦^{すみれ}はこの店で働く事にしたんだ？金の困ってないし、18禁ゲームに興味ある訳でもないし、同人系ゲームソフトまで扱ってるこのお店に…何でだ？

「ねえ…みゆきってさ…」

「え!？」

「何を驚いてるのよ？」

びっくりした…ちよつと考え込みすぎてた…

「何でもない！で、何だよ？」

「みゆきってさ、自分しか見えてないでしょ？」

何だそれ？というか、お前が人の事を言えるのか？と言い返したくなる。

「それってどういう意味だよ」

「え？……えっと、店長が普通だと思っていたとか…そういう事よ」

「俺は他人の事なんてあまり気にしない性格なんだよ」

「そういう性格だからみゆきは…」

^{すみれ} 堇はまた途中まで言いかけた所で話を止めた。

「何だよ？俺がどうしたんだよ？」

「……………」

^{すみれ} 堇は何も答えずただ呆れた表情で俺を見ている。

「おい、^{すみれ} 堇？だから何だって聞いてるんだろ？いきなり黙るなよ」

「別に…もういいよ…」

「言いかけて止めるな、気になるじゃないか」

「気にしなくてもいいよ、今はそんな事よりも今は男に戻る方法を見つけるのが先決でしょ？さっきの事はまた今度話すからいいよ」

「確かに、今は男に戻る方が先決だ。けどな、気になるものは気になるんだよ」

「だからもういいって、気にしないで」

^{すみれ} 堇はそう言って俺から視線を外した。

「おい！」

堇^{すみれ}は俺の呼び声を無視して自分の鞆をこそごと弄^{いじ}り始めた。

くそ…無視かよ…しかし結局なんだったんだ？

堇^{すみれ}の奴は何が言いたかったんだ？俺にもっと他人の事を観察しろか？

俺はあれだぞ？別に自分の事しか考えていないなんて事はないし、最低限は近くにいる人の事を考えている。現にさっきは堇^{すみれ}の事だつて心配してやってるし。

ましてや俺は堇^{すみれ}に迷惑をかけた記憶もない。だから堇^{すみれ}にあんな事を言われる筋合いなんか…

と考えていたら突然『ぐにゅ！』と胸を鷲掴みにされたような感触が！

俺は慌てて自分の胸を見た。すると堇^{すみれ}が両手で俺の胸を鷲掴みにされてるじゃないか！

「お、おい！何してんだよ！胸はもう揉むなって言っただろ！」

「まだ揉んでない！掴んだだけよ！」

「同じだ！同じ！触った時点でアウト！早くその手を離せ！」

俺はそう言って堇^{すみれ}の両手を振りほどいた。

「まったく！何するんだ！」

「何って？私が何度もみゆき！って呼んでもみゆきが返事しかったのが悪いんでしょ？私は自分の世界に入り込んでたみゆきをこっち

の世界に連れ戻してあげたんだからね」

ぐ…確かに俺はまた考え耽^{ふけ}っていたが…

「だ、だからと言って何故俺の胸を掴む！」

俺は両胸を両手で隠しながらそう言った。

「何でって、胸を掴むのが一番効果的だと思っただけ。別に揉みたいとか思った訳じゃないよ」

「どんな理由だろうがもう触るなって言ったじゃないか！もう二度と触るなよ！わかったか？」

「はいはい、わかったわかった、触らない触らない」

こいつ絶対わかってねー！

「よし、みゆきが我に戻った所で変態店長をほっておいて帰ろうよ。扉を叩くも聞こえなくなったからきつと諦めてお店に戻ったんだと思うし」

「ん？確かに扉を叩く音が聞こえなくなったな…マジで諦めたのか？」

「多分お客さんが来たんじゃないの？」

そう言う^{すみれ}と堇は扉の鍵を外すと躊躇^{ちゅうちよ}なく扉を開いて外を覗いている。

「うん！やっぱり店長は居ないわよ」

^{すみれ}堇は再び扉を閉めて鍵をかけた。そして振り返ると何故か俺の方をじっと見る。

「何だよ？」

「みゆき…本当に女の子になっちゃったんだよね…」

「おいおい、何を今更言ってるんだよ」

俺がそう言うとき^{すみれ}堇は俺の横まで歩み寄り、突然俺の周りを廻りながらジロジロと全身を見はじめた。

そして^{すみれ}堇は俺の目の前で立ち止まり俺の瞳をじっと見ながら言った。

「ねえ…貴方って本当はみゆきじゃないんじゃないの？」

「え？ちょっと待て！何でそうなるんだ？俺はみゆきだ」

「本当に？」

「本当だ！今朝俺がみゆきだって検証したじゃないか！」

「…でも…実は無線機が耳に仕掛けてあって、それで貴方は本当のみゆきからの指示で動いているとか？」

「無い！見ろ！無線機なんて何処にもないだろうが！」

「じゃあ、実は本物のみゆきを拉致監禁していて、そこで私達の情

報を聞き出した上で準備万端にしてここに乗り込んできたとか？」

「無い！大体そんな事をしても何のメリットもないだろうが！」

「じゃあ、やっぱり本当にみゆきなの？」

「だから本物の行幸^{みゆき}だって言ってるだろ？何で俺が嘘をつく必要があるんだ？」

「…そっか…やっぱり本当にみゆきなんだ」

「俺だって信じたくないんだ…こんな事…」

俺はそう言って事務所の奥に視線をやった。するとそこにある姿見に映るメイドの格好の自分の姿が目に入った。

「やっぱり…俺は女になったんだよな…」

堇^{すみれ}に言われたからという訳じゃないが、今更ながら女になった事はショックかなりだ…

そしてこのメイド姿…情けなくて涙が出そうだ。マジでどうしてこうなったんだ。

「みゆき、そんなに落ち込まないでよ」

「これが落ち込まずにいられるか…女になった事もだが、俺はこの先ずっと店長にこんな変なメイドの格好とかを強要されるかもしれないんだぞ？それを考えると…最悪だ…考えたくない…」

「だ、大丈夫だよ」

「おい：そんな簡単に大丈夫なんて言うなよ：お前はもう解ってると思うが、このバイトに俺の生活がかかってるんだよ！生命線なんだ！だから店長にまたメイドの格好をしろって言われても断れないんだよ：」

俺はそう言っていると「ふう」と大きな溜息をついた。

すると堇^{すみれ}は今度はいきなり俺の両肩を両手で掴んだ。そして真面目な表情で言った。

「みゆき、大丈夫！私がみゆきをメイドの格好なんかさせない！断固として拒んであげる！それでももし店長が無理矢理にさせたらセクハラで訴えればいいの！」

何だ！？何なんだ！？

「え？セ、セクハラ？？？俺が店長を訴える？？？」

「うん！そう！訴えてやるの！」

「待て、俺は男だぞ？男でも訴えられるのか？」

「大丈夫よ、セクハラに男も女も関係ない！それに今のみゆきは女の子なんだからOKよ！」

こいつ：凄く真面目に言ってるが、もし俺が店長を訴えたりしたらこのお店を辞める事になるじゃないか：俺はこのバイトを続けたいって言ってるんだぞ：別に店長をどうにかしたいんじゃないんだ。

「だけど…あれだ：ま、まあ…一つの手法として参考にしておく…」

だからそういう理由で俺は店長を訴える何て出来ないんだよ。

「何でそんなに弱気なの？よし！もしみゆきが訴えれないのなら、私が店長を訴えるわ！」

「え！？^{すみれ}堇が！？待て、何でお前が俺の代わりとか、別にセクハラとかされてないだろ？」

「されてない！だから私の場合は婦女暴行で訴えるの」

「ちょ、ちょっと待て！いつお前が店長に暴行されたんだよ」

「されてない！」

「セクハラも暴行もどっちもされてないんだろ？ダメだろ？そんなのダメだろ！？」

「大丈夫！私と店長の話を警察官が聞いた場合、絶対に私の話の方を信じるはず！それにセクハラよりも婦女暴行の方が効果発動が早いわ！どうせやるなら即効性がある方がいいでしょ？ほら、MMOでも効果が高くて即効性がある魔法とか薬が一番いいじゃない」

「待て！確かにMMOでは堇^{すみれ}の言う通りかもしれない。しかしここは現実社会だ。お前のやろうとしているそれは犯罪だ！いくら何でも無実の罪を店長に被せるのはよくないだろ？」

「え？何よ？みゆきって結局は店長の味方なの？」

「馬鹿か！そういう問題じゃない！」

「じゃあ、やっぱりみゆきを守るには…私が鬼になるしかない！」

「おい待て、鬼になるどころか犯罪者になるぞ」

「…仕方ないわね…未成年ならきつと…」

「やめろ！何を言ってるんだ！大丈夫だから！俺はちゃんと店長に断るから！よーし断るぞー！絶対断るぞ！」

「え？本当に？別に無理しなくてもいいよ？」

「大丈夫だ！俺も男だ！やる時はやる！それにお前にそんな事をやらせて警察に捕まったなんてなったら洒落にもならない」

「え？それってもしかして私の事を心配してくれてるって事？」

「違う！お前の無謀な行動計画を心配してるって事だ！」

「えー…そっか…でもそうよね…まあ多少のリスクはあるよね…」

「いや、多少どころかリスクしかない」

「わかった、みゆきがちゃんと断われるんならいいよ」

こいつマジ危ないな…マジで言ってるのか冗談なのかわかんねーけど…

しかしさっきの表情、^{すみれ}堇らしくないとかすごく真面目だった…
堇なら店長を訴えたり平気そうだし、犯罪に加担しかねない…

ここは俺がメイドの格好をされられる事より、こいつが変な行動

を起こさない様に俺は大丈夫だってもう一回言っておかないとな…

「堇^{すみれ}、もう一回言っておくが、俺は自分の事は自分でなんとかするから、お前は俺が男に戻る方法だけを探してくれ」

「うん、わかった」

そう言う^{すみれ}と堇はニコリと微笑んで俺の両肩からやっ^{すみれ}と手を外した。
そして堇はロッカーの前へ移動した。
ふう…危なかったな…ここは何とか収まったか？

「よし、今日は上がるよ？私は家に戻ったら早速ググッて男に戻る方法を探してみるからね！」

「えググる？女になった俺が男に戻る方法なんてググッても出ない
だろ？」

「え？出ないかな？やってみないとわかんないじゃん？」

「いや…それは…」

「大丈夫、ヤフーもあるから！」

いやいや、そういう事じゃない…ネット検索なんてやってみなく
ても解るだろ…

普通そんなのググッても出ない…もちろんヤフーでも出るはずも
ない。

精々出たとしても今の俺には関係ない事ばっかだと思うが…

例えば…女装して女になる方法とか性転換手術で女になる方法と
か…そっち系しか出ないと思うんだよな…

でもまあ俺の為にやってくれるんだし…文句は言えないよな…

「心配ならG O Oとかライブドアとかもやってみようか？」

「いや、いい…多分結果は見えてるから」

「そうかな？結構すぐ見つかったりして！」

堇すみれのそんなポジティブさが羨ましすぎる…

「よし、私は着替えるね？」

「あ、ああ、そうだな…よし…着替えるか…って！お、おい！お前はどこで着替えるんだよ」

「え？もちろんここよ」

「こ、ここだと！？」

俺は思わず数歩後ろに下がった。

ふと堇すみれを見ると、堇すみれはニヤリと不気味な笑みを浮かべながら俺を見ていた。

続く

第十話【俺に訪れた悪夢？】（後書き）

人物の性格？永井堇^{ながいすみれ}の性格

本文を読んでわかるとおもいますが、堇^{すみれ}はかなり喜怒哀楽の激しい性格の子です。友達として付き合うと面白いかもしれませんが、親友として付き合うのはちょっと大変かもしれません。あと、彼女にするにはちょっと性格上の問題も大きいかもしれません。あと、悪い性格として、自分の事は棚にあげますw

やってる事は悪い事ではないと勝手に思い込みます。後でももちろん悪かった場合は悪いと気が付くのですが：

強情の性格なのでわかっていても曲げるのが苦手です。これから先の成長に期待したい所ですね。

第十一話【俺の目の前にいた小悪魔？】

「ねえねえみゆきい？もしかしてさあ…変な想像してるんじゃないの？」

^{すみれ} 堇は怪しい笑みを浮かべてながら言った。

「え？何を言ってるんだ、何で俺が変な想像なんてしないといけないんだ！」

「ふーん…やっぱりそっかあ、見た目は女でも中身は男なのね」

^{すみれ} 堇は俺の話なんか聞いてない…いや、無視している。

「おい、何だよそれ？」

「だから、体が女になっても中身は男なのねって事よ」

腕組みをした^{すみれ} 堇は首を小さく縦にふりながら勝手に納得している。

「当たり前だろう、俺は男だ！っていうか俺は変な想像なんてしてないって言ってるんだよ！ちゃんと聞けよ！」

俺の言葉は^{すみれ} 堇には効果が薄いのか聞いていないのか、いくら怒鳴っても^{すみれ} 堇の表情に変化は見えない。それどころか更に楽しげな表情に変化している。

「聞ってるよ？一応…でもさ、いくら変な想像なんてしてないって言われてもそんなに顔を真っ赤してたら何の説得力もないんですけ

ど？」

堇^{すみれ}は楽しげに、そして勝ち誇ったようにそう言った。

俺は堇^{すみれ}に言われる前から俺は赤面していると気が付いている。自分の顔がものすごく熱くなっているのがわかっていた。しかし…

「これは…この部屋が暑いからだ」

負けたくない！

「ふーん…別に私は暑くないけど？」

「俺は暑いんだよ！」

「へえ…」

「その目…信じてないだろ？」

「そりゃそうでしょ？さっきまで暑いなんて一言も言っていなかったじゃん。それにさっきまでそんなに顔も赤くなかった。」

確かにその通りだ…堇^{すみれ}は自分が優位に立った時に変に洞察力が働く。しかし逆に追い込まれると冷静さを失う。

どうして解るのかって？それは…実は俺は堇^{すみれ}のやっているMMOのアカウントを持っている。そしてちゃんとキャラもいる。

俺は堇^{すみれ}のキャラ名を知っているから、以前に堇^{すみれ}のプレイを見た事があった。

PVPと言われる対人対戦を観戦した時、たまたま堇^{すみれ}仲間が全員死んでしまった。

しかし圧倒的な火力を誇る堇^{すみれ}のキャラであればそこからでも勝て

たはず。それにもかかわらず簡単なミスを繰り返して簡単に死んでいた。動揺していた訳だ。

まあ一言加えると、俺のキャラはそれ以来IN^{すみれ}していない。要するに、堇^{すみれ}に言い負けない為には、俺が堇^{すみれ}より優位に立たないといけないんだ。

朝の店長の様に圧倒的に優位な立場だった時は堇^{すみれ}には言い争っても勝てる。

しかし、今の状況的に優位に立つのは不可能に近い…だいたい俺はもう見下されている…

「何？みゆき？何を考え込んでるのよ」

とりあえず、ここは優位に立つのは無理だからこの場を凌ぐほうが先決か…

「別に…言っとくけどな、俺は本当に変な事なんて想像してないからな」

俺がそう言っていると堇^{すみれ}は腕組みをやめて今度は腰に手をやった。

「まあいいわよ…別にみゆきが何を考えてようが私には関係ないもの。でもね」

「でも何だよ…」

「よく考えてみてよ、今まで私がここで服を脱いだ事なんてある？着替えるって言ってもお店のエプロンを取ってロッカーに入れるだけだよ？」

俺はその一言でハっとした。

「そ、そうだ…そうだった」

自分の顔がさらに熱くなるのがわかる。頭から湯気が出るかと思う程に熱く汗が滲み出てきている。

今の俺は相当顔が真っ赤になっているのだろう…

しくじった…俺の方が冷静さを失っていた…

俺がメイド服を脱がないといけないからつい^{すみれ}堇も服を脱ぐのかと

勝手に思ってしまった…

そして^{すみれ}堇の下着姿も思いっきり妄想してしまった…

そうだな…俺だってそうじゃないか…ここのお店は私服にエプロンでOKなんだよな…

「きっと私の下着姿でも妄想してたんでしょ？」

いきなり俺の心を読まれたかのような質問をしてきやがった!?

「…………え、な、な、何で俺がお前のし、下着姿とか…」

「…すぐくわかりやすい反応…でもまあ…………男なんだから当たり前よね」

正直、男と付き合った事すらない^{すみれ}堇に言われるとかなり悔しい。
お前に男の何か解るんだと言ってやりたい…

「でもね、私、みゆきになら下着姿くらいなら見られても平気かな？
もしかして本当に見たいの？私の下着姿」

^{すみれ}堇はそう言いながらエプロンを取って机の上に置いた。

こ、こいつは何を言い出すんじゃ！そういう事を何故に平気で言える！

俺は男だぞ！？いくら女らしさが見えない^{すみれ}堇でも一応は女。

興味が無い奴は男じゃないだろ！？

……じゃない！そうじゃないだろ！？……どうしたんだ^{みゆき}行幸、しっかりしろよ…

ダメだ…今の俺は完全に翻弄されている…

「な、何を言い出すんだ！何で俺がお前の下着姿なんか！まったく興味は無い！」

と言いつつも俺の視線は無意識に^{すみれ}堇の胸に…
これじゃあ、まったく説得力がない…

「みゆき、そう言いながら私の胸見てたでしょ、いやらしい…」

「い、いやらしいとか言うな！だいたい、お前が変な事を言うからだろうが！これは男子として健全な反応だ！」

俺は開き直った言い訳を言ってみた。

「何？それって私を女として見てくれてるって事？」

「お前は元から女だろうが…」

「そう意味じゃなくってさ、ほら、一人の女性として見てくれてるの？」

「だから、前からお前は女性だろうが、それ以上でもそれ以下でもない」

俺がそう言う^{すみれ}と堇^{さげす}は蔑んだ目で俺を見た。

「な、何だよ…」

「顔も耳もすっごく真っ赤にしちゃってさ、たかが下着くらいで真っ赤になるとか、ばっかじゃないの？」

そう言う^{すみれ}堇の機嫌は先ほどとは一転してかなり悪くなっている。

「俺は馬鹿じゃない！どうするんだよ？俺がもし平然とお前の下着姿を見たいとか言い出したら」

「え？何言ってるの？私がみゆきに下着姿なんて見せるはずないじゃん。さっきの話は冗談よ、冗談だってわかんなかったの？」

「わ、わかってて言ったんだ！」

「顔がまた真っ赤！みゆきって面白い！」

^{すみれ}堇はそう言うといきなり声を出して笑いだした。

な、何だよこいつ：何でいきなり笑う！？

ああ、もう怒る気にもならない：しかし何だ？こいつは二重人格か？いや三重人格か？

それとも女という生き物はこんなもんなのか？泣いたり、怒ったり、笑ったり忙しい生き物だ：

しかし何故にこんな態度をコロコロと変化出来るんだよ：意味わかんねえ：

「あははは、ひい…お腹痛いよ…」

何がそこまで面白いのか理解出来ないが、俺の目の前では堇はお腹を抱えて大笑いをしている。

「おい…そんなに笑わなくってもいいだろ…」

「あははは…ふうふう…あー苦しい」

「何がそんなに面白いんだよ？」

「あはは、だって…あははは」

「…」

「あはは…はあはあ…ふう…」

しばらくして堇はやつと笑うのを止めた。

「あー面白かった」

「俺はまったく面白くなかった…」

「ちなみにね、コスプレで下着姿に近いものだってあるんだよ？」

「何でそんな話を今更する…」

「一応、報告」

「そんな報告なんて必要ない…」

「え？興味あるでしょ？」

「ない！」

とは言ったものの…実際はどうなんだ？俺は堇すみれの下着姿もコスプレ姿も興味は…多分ないのか？

と思いつつ俺は堇すみれの全身を上から下へと流して見ている。

見た感じ堇すみれは寸胴に見える…しかし、午前中ここで堇すみれは「貧疎だつて出るとこはそれなに出てるのよ！」とか言っていた…

もしかしてこいつ…本当はスタイルいいのだろうか？マジで出る所は出てるのだろうか？しかし確認するには…

そうか…こいつの下着姿に近いコスプレを見ればわかるって事だよな…

って何だ！？俺は何を考えてるんだ！危ない…今日の俺はおかしい…

「みゆき？」

「え？何だよ」

「みゆきも女の子になったんだしき、記念にコスプレでもする？」

こいつはまた変な事を唐突に言い出しやがった。

「え！？何で俺がコスプレ！？やらない！絶対やらない！」

「えー？勿体ないなあ…素材は抜群なのに…って！あ！ごめん！今の格好はすでにコスプレだったね！」

「待て待て、違う！これはコスプレじゃない！単なるメイド姿だ！
店長に無理矢理やらせられただけだ！」

「え？何を言ってるのよ？ハッキリ言ってその格好はコスプレでしょ？みゆきだって解ってるでしょ？」

「う…それは…えっと」

確かに…今の俺はメイドでごめんなさいだか何だか忘れたが、そのアニメのキャラに似てて、そのメイドの格好が今の俺の格好に似てるんだよな。

「うん、やっぱりどう見ても『神無月みゆき』のコスプレだね」

「やっぱりそうなのか…」

俺ががっくりと肩を落としていると、^{すみれ}堇が鞆から何かを取り出し机の上に置いた。ガチャガチャとそれを弄ると俺の横まで小走りであっていきなり肩を組んできた。

「す、^{すみれ}堇！？何するんだよ」

「え？単なる記念写真よ」

「え…記念写真？何だそれ？」

「だから記念写真。カメラはセルフタイマーでもうそこにセットしてあるから」

^{すみれ}堇はそう言うとき机の上を指差した。机の上を見るとそこにはデジ

カメラがちゃっかり設置されている。

「ちょっと待て！俺は写真を撮ってもいいなんて言った記憶はないぞ！」

「え？ダメ？別にいいでしょ？減るもんじゃあるまいし！あ！ほら、みゆき笑って！」

「え？あ！え？」

「いいから！ほら！笑ってよ！」

「あ、はい！」

堇^{すみれ}の言葉に圧倒されて俺はカメラに向かって笑顔を作ってしまった。そしてそれと同時にカシャリと音が聞こえた。

どうやら写真を撮られてしまったらしい…しかし弱いな…何で俺は笑顔を作ってしまったんだ…逃げればいいだけじゃないか…

俺のそんな残念な気持ちを知らずもなく堇^{すみれ}はデジカメの確認をしている。

「みゆきほら見て！よく撮れてるよ！」

「はいはい、そうですか…」

「結構いい感じだよ？これ今度印刷してきてあげるね！」

「いや…いらないし」

まったく…何を言ってるんだ。自分が女だった時の写真なんて欲

しくもない…

「え？ いらなの？ 記念に持っておいたほうがいいんじゃない？」

「おい…どこの世界に男だった自分が女になってしまった時の写真を記念に持っている人間がいるんだ？」

すみれ
堇は首を傾げてすこし考えた。

「そうよね…だいたい女になった事がある人間なんてみゆき以外に居ると思えないし…だから写真なんて持ってる人はいないよね…
っていう事は…やっぱり記念に持っておいたほうがいいと思うよ？
いいえ！ 持っておかないとダメだよ！」

「おい、何でそうなるんだよ」

こいつは頭がいいのやら悪いやら…考えてる事がわからない…や
っぱりこいつは苦手だな…

「大丈夫！ 光沢用紙だから綺麗よ」

「違う！ 俺はそんな答えを求めるような質問はした記憶はない！」

「でもエプソンじゃなくてキャノンなの」

「だから、そんなのどうでもいいって…」

「何ならもう1枚撮る？」

「いや、もういい……」

何だよこの会話は…すみれ 堇はマジで自己中心的すぎるだろ：

「でさ？みゆき？いつまでメイド服を着てるの？もしかして気に入ったとか？」

「お前が写真を撮ったりしてたからだろ！こんな格好を気に入ってるはずないだろ！脱ぐとこだ！」

「あっそう」

すみれ 堇はそっけないくそう言うと言とデジカメを大事そうに鞆に仕舞いこんだ。

「…で…すみれ 堇、このメイド服はここで脱いで放置してもいいのか？」

「え？別にいいんじゃない？そこに置いておけば店長がどうにかすると思うよ。それより早くいつものダボダボのダサイ服に着替えれば？」

「ダボダボのダサイ服…」

俺はメイド服を脱いですみれ 堇の言う所の「ダボダボのダサイ服」へ着替えた。

ふと横を見ると着替え終わった俺をすみれ 堇がジロジロと見ている。

「ん？どうした？」

「メイド服を着ていないと一目じゃ『神無月みゆき』に似てるなんて気づかれそうもないわね」

「そうか？俺はその方が助かる」

「うん、大丈夫そうね、そのダッサい服装が折角の可愛さを台無しにしてるから」

「それってどうなんだ…」

そりゃ俺は服装はあまり気にしないし、格好をつけようなんて思った事もない。

しかしここまでダサイと連呼されると少し傷つく…これからは少しは服装も気にしたほうがいいのか？

「おい^{すみれ}、ちょっと聞くんが、男の時の俺ももしかしてダサイって事か？」

「え？えっと…ほら！えっと…人は格好じゃないって言うじゃないのよ」

「おい…何だよそれ？それってまさか俺をフォローしたつもりなのか？」

「え？う、うん」

うんって言った時点でフォローになってないだろ…

「……そうか」

「えっと…みゆきも着替え終わったみたいだし、そろそろお店を出ようか？」

堇^{すみれ}はそう言っていると鞆を肩に掛けた。

あ、そうだ…俺は一つひかかる事があったんだ…ちよつと堇^{すみれ}に質問してみようかな…

「おい、堇^{すみれ}」

堇^{すみれ}は丁度扉の鍵を開けようとしている所だった。しかし俺の声に反応して堇^{すみれ}はこちらに振り返った。

「え？何？どうしたの？」

「あのさ、何で俺は『神無月みゆき』っていうアニメのキャラそっくりの女にされたんだと思う？」

「え？何でって…」

「俺がやっているMMOとまったく関連がないだろ？」

「うーん…関連が完全に無いかどうかはネットで調べればすぐに解ると思うけど…」

「でもな、多少は関連があったとしてもわざわざ俺をアニメキャラにする必要はないだろ？」

「そうね…もしかすると、みゆきを女にした人の趣味なのかもしれないわね」

「え？趣味！？という事は俺を女にした奴はマニア系なのか？」

「わかんない、でもそこちゃんと調べてみるから。今日はもう帰ろうよ」

「あ、ああ…そうだな…」

こいつは何でもググれば解るとでも思ってるのか？わかんねーだろ…マニアとか…

俺と堇^{すみれ}は事務所の電気を消して通路に出た。

こっそりお店の方を覗くと先ほどもまで居なかったお客だが今は店内に5、6人おり、店長ともう一人のバイトの男の子は忙しそうに動いている。

ここで声を掛けるとまた何か言われそうだし、ここは無言で帰る事に決めた。

そして俺と堇^{すみれ}は裏口から店の外に出た。

お店から出た俺は少し離れた場所に駐めてある自転車まで歩いて移動する。

俺が数十メートル歩いた所で後ろから人の気配を感じる。
振り返ると何故か堇^{すみれ}がついて来てるじゃないか!?

「おい何だよ？堇^{すみれ}は電車だろ？反対方向じゃないのか？」

「え…えっと…あれよ…あれ」

「あれ？あれって何だよ？」

「み、みゆき…明日は暇なの？」

「え？何をいきなり？」

「あ、明日は休みでしょ？」

「え？ああ、休みだけど」

「どうせあれでしょ！水曜日だからみゆきのやってるMMOも私のやってる奴も十時から十六時までメンテナンスなんだし：彼女も居ない訳で、他に趣味もないんだし：」

「それで：何が言いたいんだよ：」

「だから：一緒にみゆきの服を買いに行つてあげてもいいわよ」

「え？何だそれ？俺の服？それってもしかして女物って事なのか？」

「そうだよ？そんなガボガボのダサ服じゃ駄目だと思うし。下着だつて買わないと駄目だし」

「し、下着！？俺はそんなもんいらない！」

「いらないじゃないの！下着は必要なの！今は女なんだよ？下はどうでもいいけど、ブラはちゃんとつけなさいよ！みゆきは胸でっかいんだし、つけてないとすぐに乳が垂れるわよ？」

「お、おい！乳とか言うな！お前女だろうが！」

俺は思わず大きな声で堇すみれに向かって怒鳴った。

「ちょ、ちょっと！みゆき声が大きいよ！ほら、みんなこっち見て

るじゃん」

堇^{すみれ}の一言で俺ははっと我に返った。

そうだ、ここは店の外だった！つい大きな声で乳とか言ってしまったぞ！？

周囲を確認すると人通りが少ない裏道にも関わらず数人が立ち止まって俺達の方を見ている。

おいおい…怪しいオタク系男子ばかりじゃないか…すつごく危険な視線を感じる…それも俺の胸に集中しているじゃないか…何て奴らだ…

「み、みゆき…なんか視線が…」

「堇^{すみれ}、走るぞ！」

俺はそう言って堇^{すみれ}の手を握ると急いで自転車置き場まで走った。

第十一話【俺の目の前にいた小悪魔?】（後書き）

パソコンショップのもう一人のバイト君

本題の中にもう一人のバイト君がいると表現がある。

名前は上尾孝二と言って、某都内大学二年生。

こっそりとお店が一番まとも?な男子です。

ああ、名前はあげおではなく、かみおです。かみおこうじ君ですの
であしからず。

身長178センチで体重60キロ。中肉中背でちよつと童顔っぽい。

髪は短髪で黒。パソコンもするけどスポーツもする。

決してマニアではなく、ちゃんとした彼女がいる。

ここで働いた理由は単にバイトを探してたらここを見つけたという
つまらない理由。

あまりにも普通すぎて本来は本小説のもっと前の回に少し登場の予
定でしたが、予定がなくなりました!

そのうち登場するような機会はあるのでしょうかね…

第十二話【俺の目の前にいた小悪魔？】

俺は堇すみれの手を握って自転車置き場へ向かって走る。

人通りの激しい大通りを横切り、数十メートル離れた場所に自転車置き場がある。

俺は後ろを振り返らずとにかく全力で走った。

いつもは必ずひっかかる大通りの信号が、今回は丁度青だった事も手伝って二分程で自転車置き場へと到着。

到着してすぐにだれか付いてきていないか後ろを確認した。

誰も付いて来た気配はない。当たり前的事だが少し安心した：

しかし、もしここで俺達を追って来た奴が居たとしたら、そいつは確実にストーカーか痴漢か変質者だろう。

俺はそんな事を考えながら自転車置き場の中も確認した。

数人の人はいるがいたって普通そうな人ばかりだ。先程のようなマニアックオーラを感じる人はいない。と思う。

ふと気が付くと俺の左横では堇すみれがしゃがみ込んでいるじゃないか。そして「はあはあ…」と息を切らしながら左手で胸を押さえている。見た感じ相当辛そうだな。

しかし、俺も多少は息切れしているが、それ程きつくは感じない。この程度でそんな状態になるなんて、堇すみれはかなりの運動不足だろ…

俺がじっと堇すみれを見ていると、堇すみれは突然に俺の方を見ると睨んだ。まさか俺の心を読まれたか！？ってあるはずないよな？

「なんだよ？」

「はあはあ…なんだよ…じゃ…ないわよ！はあはあ…みゆき…手、

そろそろ…離してくれない?…痛いんだけど!」

堇すみれは息を切らしながら言った。

「あ!」

俺は左手でしっかりと堇すみれの右手を握っているじゃないか。

そして今になって手に柔らかな感触が伝わってくる…

俺は慌てて手を離した。

そうだ、あの時、俺は慌てて堇すみれの手を握って走り出したんだ…
堇すみれは数回深呼吸をした。すると呼吸が整ってきている。やっと落ち着いてきたみたいだ。

「ふう…あのさ、もうちょっと優しくしてよね…私だって一応は女なんだからね…」

堇すみれはそう言いながら先ほどまで俺が握っていた右手をじっと見ている。

俺も自分の左手を見た。手にはまだ堇すみれの手の感触が残っている。

堇すみれの手は暖かく、そしてやわらかかった…そう、まさに女の子の手だ…

女の子の手を握るなんて何年ぶりだろう…女を意思していなかった時代、そうだな小学校以来か?

っていうか…俺は何を躊躇ちゅうちゅうよもせずにこいつの手を握ってるんだよ…

「ちょっと、みゆき、聞ってるの?」

堇すみれは立ち上がりながら言った。

「聞いてるよ、あれはあれだ：あの場からお前を連れて逃げる為に無我夢中で握ったんだ。だから力加減なんて考えてる余裕はなかった」

「わかったわよその件はもういいわ：でもさ、私も一緒に逃げちゃってから言うのも何なんだけど、別にあの場から逃げなくても良かったんじゃないの？」

「え？馬鹿！お前は感じなかったのか？あの危険な視線を！お前だって「なんか視線が：」とか言ってたじゃないか」

「ああ、確かに言ったよ。そう思ったから」

「じゃあ逃げるだろ！？」

「え？逃げないよ。それと逃げるは別だから」

「え？どうしてそうなるんだ？いや、マジ危ないって、あれは危ないって、襲われたらどうするんだ？」

堇^{すみれ}は俺の顔を見ながら「ふう」と溜息をついた。

「何それ？危険な視線を感じたのは確かだけど、あの人達は襲って来ないよ。だって見た目こそマニア系のオタクかもしれないけど、別に犯罪者って訳じゃないんだよ？コスプレの時に来てくれる人も見た目はちょっと危ない人もいるけど、でもいい人だって多いんだから」

何という冷静モードだ：確かに堇^{すみれ}の言う通りかもしれない：

「みゆき、人を見かけで判断するとか一種の差別だよね！」

「う…いや…それは…」

言い返せない…

考えてみれば俺が男の時の普段の格好はどうなんだ？十分に怪しく見られそうじゃないか…

という事は…俺もあそこにいた奴らと同じ立場になる場合だってあるうる訳だ。

そう考えると…もし俺があいつらの立場だったらどうだった？

目の前でいきなり『乳』とか叫んだ女が俺を見て逃げる…

………何故逃げる…って思う…俺ってそんなに怪しいかって凹む…

うわー…やっぱり最低最悪の結果だ…

原因は俺達にあるのに…あいつらには失礼な事をしてしまった…

「そうだよな…^{すみれ}堇の言う通りかもな…」

「でもねみゆき、そうは言ったけどあれは私の意見。さっきの場面の場合、普通の女子なら危険な視線を感じて逃げると思うんだ…だからみゆきの行動的には完全に間違ってる訳じゃないと思うよ。でもね、何が言いたいかって言うと、みゆきの反応はまさに女の子の反応だったという事…本当に本物のみゆきなの？って疑いたくなっちゃうよ」

「……俺は…本物みゆきだ。^{すみれ}堇の言う事はもっともだと思う。でも俺があの場合から逃げたのは、あれだよ、俺は元々女じゃない。だから

ら女のとてあのシチュエーションの時にあいつらに何をされるかわからないっていう恐怖感が先行したからだ。店長のあの件もあったからな」

「なるほど…そうね…でも結局それってやっぱり自分を女として考えたって事でしょ？…やっぱり体が女になるとき…心も女になっていくのかな…」

^{すみれ}
堇は少し寂しそうにそう言った。

「違う！そんな事はない！確かに反応は女っぽかったかもしれないが、完全に『女』として意識した行動じゃない。男の俺が女をやらされているからこそああいう行動に出たんだ」

「…なるほどね…そういう考えもあるんだ」

そう言いながら^{すみれ}堇は小さく頷いた。

俺の言いたい事を少しは理解出来たのか？

「でも、やっぱり逃げる必要は無かったと思うけど？」

やっぱりこいつ解ってないな…

「おい^{すみれ}堇、だいたい元を正せばお前が悪いんじゃないか。いきなり『乳』とか言うから」

「え？何それ？どうしてそうなるの？私は『乳』だから『乳』って言っただけじゃないのよ！それとも何？その『豊満な乳房』が垂れるよ。とでも言ってほしかった訳？」

「ち、違う！そういう意味じゃない！そういう事を露骨^{ろこつ}に言うなんて事だ！」

俺がそう言うとき堇^{すみれ}はムツとした表情になった。
そして眼鏡の縁を右手で持ちながら俺を睨んだ。

「何だよ？そんなに睨むなよ」

俺がそう言うとき今度は両手で顔を掩^{おお}って俯^{うつむ}いた。

「みゆきの馬鹿……」

「お、おい……何だよ？ば、馬鹿！」

「私は……みゆきの事を考えて言っただけなのに……そんなに強く言わなくっても……ぐす」

堇^{すみれ}は小さく声を震わせながら言った。そして鞆からハンカチを取り出す。

何だ！？こいつ泣いてるのか！？

待てよ、待て待て！俺はそんなに酷い事を言ったか？言っていないだろ……

「おい、堇^{すみれ}？」

何も返事をしてくれない……これは謝らないといけないフラグなのか？しかし何で俺が謝るんだ？

しばらく堇^{すみれ}様子を伺ったが、ずっと俯いたまま……
場の空気がかなり悪いぞ……

……そうだよな…俺も男だ…そしてこんな奴だけど一応は女だ。
やっぱり男が女を泣かしたらダメだよな…ここは俺が折れて謝るか…納得はいかないが…

「^{すみれ}堇、わかったよ、俺が悪かった…強く言ってますまん」

「ぐす…本当にそう思ってるの？」

「ああ、本当だ。悪かったよ」

「じゃあ…下着もちゃんとつけてくれる？」

「え？下着？…えっと…つけた方がいいのなら…か、買うよ…買えばいいんだろ…」

「ぐす…うん…」

堇は相変らず俯いたたままだ。
^{すみれ}

「えっと…明日だよな…明日か…あれだ、俺は、その…下着とか服とか…そういうのを買うのにどういいうのを選べばいいかわからないし…^{すみれ}堇、買い物につきあってくれよ…」

「…買い物…私が必要？」

「あ、ああ…俺一人じゃ買えないし、女物なんて俺にはわかんねえし」

「…………仕方ないわね…付き合ってあげる…」

堇^{すみれ}はそう言いながらゆっくりと顔を上げた。

「…で…俺はどうすればいいんだ？」

「えっとね！私がスケジュールを組み立てるから…そうね！今日の夜にでも電話するから！」

堇^{すみれ}は笑顔でそう言った。

「了解…じゃあ俺は電話を待ってればいいんだな？っておい待て！何だその笑顔は！？え？…まさか…さっきのは嘘泣きか！？」

「記憶にございません」

「な、何だと！？さっき泣いてただろ？」

「記憶にございません」

しまった！やっぱり嘘泣きかよ…くそおお…堇^{すみれ}に騙された…これが女の武器っていう奴なのか…なんという卑劣な…この小悪魔め…

「おい…堇^{すみれ}…お前…そういう人を騙すような行為はダメだろ？」

「えっと…じゃあ後で電話するからね！ゲームに夢中になって気が付かないなんてないようにね！じゃあまたねー！」

堇^{すみれ}は俺の話を聞かず、言いたい事だけ言うと自転車置き場から走って出て行こうとする。

「おい！ちょっと待て！俺の話を聞け！」

俺の声が聞こえたのか、堇すみれは自転車置き場を出た所で立ち止まった。

そしてこちらを振り向く。俺はそれを見てから慌てて堇すみれに駆け寄った。

「お、おい堇すみれ、嘘泣きとか無いだろ？あれはちよつといかがな物かと思うぞ？だからな…」

堇すみれは俺が話をしている途中にも関わらず、それを無視して一方的に話出した。

「そうだ！言い忘れたけど、お買いものに付き合うお礼はランチゴチでいいからね！」

そう言い残して堇すみれは凄い勢いで駅の方角へと走り去った。

「お、おい！ちよつとまって！何だそれ！？そんな話は聞いてないぞ！あとお前！俺の話の続き…」

俺は懸命に叫んだが、時は既に遅く堇すみれの姿は既に見えない。

「な、何だよあいつ…自己中すぎだろ！くそ！」

何だかすごく悔しい。悔しいけど自分が情けない。

「ふう…結局あいつと明日買い物に行く事になってしまったのか…しかもあいつにランチを奢おごるとか…何でそうなるんだよ…しかしま

あ、確かにこんなにダブダブの服をずっと着るのもあれだし、下着だって…いるのか？な？…き、きつと必要なんだ…そうだ…って考えよう…」

俺は何か釈然としないまま自転車を漕いで自宅へと向かった。

しかし何だよな…あいつ…嘘泣きとか普通するか？

健全な男子を騙して何が面白いんだ？俺って素直でいい奴だし、このままだと女に騙されて、不幸な人生を歩んでいきそうだぞ…そんな悲惨な人生は歩みたくない！

マジでやばい…これを教訓にしてこれからは気をつけないとな…

しかし、どうしてアイツは俺にこんなにもチョッカイを出すんだ？俺が男の時はこんなにチョッカイを出してこなかったのになあ。

あいつ実は心配性なのか？おせっかいやきとか？

それとも女になった俺の事が好き？無いよなあ…わからん…

態々《わざわざ》嘘泣きまでして俺と買い物に行きたいとか普通はしないだろ？

あいつ何かを企んでいるのか？それがランチを奢ってもらう事なのか？

俺の妄想は尽きない。

色々な妄想をしているとふとメイド姿をさせられた事を思い出した。

え？まさか…あいつは俺にコスプレをさせようと思ってるんじゃない？買い物とかいいつつ、危険なコスプレショップに連れて行って俺を変な道へと…

って疑っても仕方ないか…まあ…とりあえずはなりゆきに任せよ

う…

もし俺の不利になるような状況になったら逃げればいいしな。

とか考えているうちにアパートに到着！

俺は夕暮れのアパートを見上げた。首都高のほぼ真下にある外に洗濯物すら干せないアパート。日当たり最低。騒音拔群！まじで腐ってるアパートだ…

しかし仕方ない。なんせ家賃が激安だ。

ちなみに、このアパートには独身のオタク系男子しか住んでない。全部で八部屋ある。ちなみに引越して来た時に全員も容姿は確認済だ。

住人の数人とは話をたまにしている。

全員きつと彼女もいないし、女に縁のない人ばかりだ。

人は見かけによらないと言うが…多分俺の予測は当たっているだろう。

そういえば六号室のあの人…この前の夜にアダルトゲームだと思われる音声がいっきりに俺の部屋まで聞こえてきてたよな…普通のアパートだとクレームじゃ済まなそうだよな…

って！ちょっと待てよ…今俺は何か重要な事を…

このアパートの男子に俺の事がばれたらどうなるんだ？

もしも住人が皆で俺の部屋に押しかけてきたら…

そうしたら俺は拉致監禁されて…あんな事やそんな事を！【あり

えない様な事を妄想中】

うわああああ！やめてくれー！【見た目、頭をかかえてアパートの前で叫ぶ変な女】

ちょ、ちょっと待てよ…何を変な妄想してるんだ…

さっきの件もあるだろ…あまり人を疑うなよ…

彼らもきつと俺と同じ健全な男子なはずだ：変な事なんてはしないだろ：信じるんだ！
って：俺って健全だっけ：やっぱり怖いものは怖い！とにかくばれる前に部屋に入れ！

俺は自転車に急いで鍵を掛けると慌てて自分の部屋へと入った。

☆☆☆☆☆☆

俺はアパートの部屋に入るとまず真っ先に玄関の鍵を閉める。

よし、これで安心だ：

安心した所で次の行動は：パソコンの電源を入れる！

やっぱりパソコン起動の優先順位が高い！

電源ボタンを押すと『ピッ！』という起動音と共にパソコンのファンが動き出した。

そして次に部屋の電気をつけてお湯を沸かす。これはもちろんやかんのお湯だ。フロなど後でいい。いざとなれば入らなくてもいい。

キッチンの上には大量のカップ麺が入ったビニール袋がある。俺はその中から今日の晩ご飯をチョイスする。これは何時もの作業。そう、夜はカップ麺が基本だ。

今日は何にしようかな：昼を食べてないしな：ボリウムがある方がいいよな：

俺は袋からワンタン麺、麺二倍増量！を取り出した。

お湯は一人分だから速攻で沸く！それを素早くカップ麺へ入れる！
入れたカップ麺の上に割り箸と後入れスープを載せてから、それをパソコンの机へと置く。

え？ちゃんとしたテーブルで食べないのか？

俺はいつもパソコンをしながら食べる。だからテーブルで食べる事はない！

というかダイニングテーブルの上にパソコンが乗っている。だから一応はテーブルで食べている！という事になるよな？

ウィンドウズの起動画面でパスワードを入力！パソコン起動完了！
デスクトップが表示された。

ちなみに言うておくが、背景画像はアニメとかエッチ画像とかじゃないぞ？

そういう趣味はないからな。じゃあ何だって？内緒に決まってるじゃないか。

っと：デスクトップが表示されたら真っ先にメールの確認を：
相変わらずくだらない勧誘メールがいっぱい来てるな：
あれ？何だこれ？

大量に來ているメールの中に無題のメールが一つある。

無題はよくある事なのだが、何故か迷惑メールに振り分けされて
いない：何故だ？

俺はウイルスチェックをしてからそのメールを開いてみた。

何だ？これって中国語か？

内容は色々と書いてあるが、中国語か？知らない文字で読めない…

もしかして…この前の夜、海外アダルトサイトを見た時に確か中国語のサイトに飛んだよな…

まさかあの時にスパイウェアでも仕組まれてメールを吸い出されたのか？

確かこの前チェックした時にはスパイウェアなんて感知しなかったが…

まあいいか…ウイルスも無いし。

よし、中国語なんてわんねーし、放置！どうせ請求なんて来ないだろうし。

後はっと…その他はに目立ったメールは無いな…

次はMMOの起動だ。

アイコンをダブルクリックっと…

デイストップにあるMMOのアイコンをダブルクリックすると起動メニューが開く。

そして告知事項などがあればその時に表示される。

今日は必要なお知らせが出ている。

『アップデートファイルがあります。臨時メンテナンスを行います。』
『…って？』

あれ？何だ？通常のメンテナンスは明日だろ？何で今日？

俺は告知の内容を読んでみた。

えっと…十四時から十五時迄の予定って、もう終わってるな。

アップデート内容は何だったんだ？

『昨日販売した強化アイテムがあまりの性能でクレームが多数来ております。』

そりゃそうだろ：

『弊社の対応としまして、昨日販売したアイテムは…』

え？まさか効果を無効にするつもりか！？そうだったら現金で払い戻しして貰わないと！

と言っても俺が買った訳じゃないんだけど…

『調べた所、販売数が十個未満でした。ですので効果はそのまま残す事とします。ただし、今後の販売の予定はございません。』

何だ？回収とかは無いのか？少ししか売れてないのでそのままでもいいのか？

運営が良いのならいいんだろうけど…

まあ確かに普通の奴だったらあの金額のアイテムはなかなか手が出ないよなあ…

ん？まだあるぞ…

『転売や取引などが出来ないように設定しました』だと？なるほどね…

まあ転売する予定なんてないし、使うのも勿体ない位だしな。

当分は倉庫の肥やしになるのかな…

でもフロワードの奴、「どうだった？みゆき？」とか聞いて来るんだろうな。

まだ使ってないって言えばいいか…

お：アップデート完了！
パスワードを入れてつと：起動！

起動すると二十四型ワイド液晶ディスプレイの画面いっぱいにM
MOの画面が表示された。

いわゆる所謂フルスクリーンという奴だ。

という所でカップ麺にお湯を入れて三分経過した。よし、いつものように食べながらやるか：う：ん？な？何かがいつもと違って食べづらい：

俺はいつもカップ麺を左手に持ち、そして脇を締めてから食べている。

食べづらい理由。それは胸が邪魔！

と言うか、待てよ：おい俺：

俺はカップ麺を机に置いて立ち上がった。

おい、みゆき：何で部屋に戻ってからすぐにパソコンつけて：カップ麺つくって：普段の日常と同じ行動をしているんだ？

俺は女になったんだぞ！？それを解決する方法を真っ先に探さないといけないんじゃないのか？

そうだよ！その通りだ！

じゃあその為には何をすべきかを考えろ：

まず何をする：何をするべきか：と俺の視線はカップ麺に：

カップ麺を食べるか：そうだ、食べながら考えよう：のびたらまずいいしな：

俺は椅子に座るとカップ麺を再び左手に持った。

しかし…どうするかな…女に戻る方法なんてそう簡単に見つかる筈すみれもないしな…

堇は今頃何をしてるのかな。無駄にググってるのかもしれないな。とMMOの画面を見ると同盟チャットで挨拶をされているが、画面の右端にあるメールアイコンが点滅している。

俺は同盟チャットで挨拶を返す前に、メールのアイコンをダブルクリックした。

すると二件のメールが届いている。

一つは『同盟オフ会のご案内』

もう一つは『男に戻る方法』

以上二件だ…って待て！男に戻る方法だと！？

俺は慌てて差出人を確認する。無名だと！？

このゲームのシステムだと無名でメールなんて送れないはずなのに…

ゲームのシステムを無視したメールを送れるのは運営の人間か…まさか…昨日のあいつか！？

俺はそのメールをダブルクリックした！

するとその瞬間！俺の体に電撃のようなものが走る！

「痛い！いたたたた！！」

痺れた俺の左手からカップ麺が落下！ばしゃっ！という音と共に床に散乱！

だがそれ所じゃない！やばい、昨日の電撃の比じゃない！すげー痛い！

くそ…意識飛びそうだ…ぐ…ダメだ…

俺はよろよろと椅子から立ち上がると懸命にベットの方へと歩く。

な…んだよ…くそ…

そしてベットまであと少しの所で目の前が真っ白になり、そのまま意識を失った。

第十二話【俺の目の前にいた小悪魔?】（後書き）

高坂行幸が駐輪場を借りている理由

以前はお店の横に自転車を停めていたのだが、ある日盗難にあって
しまう。

それから行幸は駐輪場を借りるようになった。
みゆき

ちなみに交通費はお店から支給で、ちゃんと両国から秋葉原までの
定期代金を貰っている。

乗っている自転車は9980円で購入したママチャリ。

第十三話？【俺とは違う時間・堇《すみれ》編？】（前書き）

行幸^{みゆき}と別れてからの堇^{すみれ}の時間での小説です。

この後、堇^{すみれ}の時間・店長の時間の小説があり、本編に戻ります。

別に堇^{すみれ}の事なんて興味ない！って方は読まない方が良いかもしれません。

第十三話？【俺とは違う時間・堇《すみれ》編？】

「まっだかなあ…おっそいなあ…」

一人の女性が携帯で時間を確認しながらソワソワとしている。

女性は黒のスーツ姿で、少し茶色がかったロングヘア。

身長は女性にしては高めで少し細身の体つき。運動をやっていたのか体格は良い。

体の出っ張りは殆ど無く（胸含む）…目つきが凛々しく多少の男っぽさを感じる。

「堇^{すみれ}、来ないなあ…約束の時間忘れちゃったのかなあ…」

女性は何度も携帯電話で時間を確認している。

「もう約束の時間を過ぎてるのに！連絡もよこさないとか…仕方ない、電話してみよっかな」

女性は独り言の様にそう言うと言と携帯を耳にあてた。

すると、それとほぼ同時に女性の前に堇^{すみれ}が小走りで現れた。

「はあああ…愛ちゃん！ごめん」

堇^{すみれ}は息を切らしながらそう言った。

女性は堇^{すみれ}の姿を確認すると携帯をバックに仕舞った。

「こら！堇^{すみれ}！遅いぞ！」

「ごめん、ごめん、色々あってね」

「え？何よ色々って？」

「え？えつと…」

「何その態度？もしかして男がらみ？」

堇^{すみれ}は一瞬びくりとしてあさって方向を向く。

「凶星？何よ？何があったのよ？遅刻したんだから話してもらうからね」

「え…えつと…それは…あ、後で話すね！」

「後で？」

「うん、後で」

「本当に？」

「話す、話す、約束するからさ」

「…わかった。後でちゃんと話して貰うからね」

「えつと…あと、今日はちょっと早く家に戻りたいの。今日の打ち合わせって一時間位で終わりでもいいかな？」

「え？何よ？用事？男？…まあいいわ…わかった、今日は早めに切り上げてあげる」

「あ、ありがとう」

「よし、それじゃ行こうか」

二人ははいつも行っているファミレスに向かった。

☆☆☆☆

「堇、一応はメンバー全員には告知したんだけど、今回の冬コミはこの前に言ってたあれでいこうかと思うんだよね。もう7日だからもう時間もないし、衣装もある程度は最初から揃ってるじゃん。でさ、まだ衣装の出来てないメンバーについてはやっぱり全員で手分けをして作製してもらった方がいいと思うんだ。去年はギリギリまで出来ないメンバーが居て…」

堇にふと視線を移すと、堇は半分口を開けて何か考え事をしてい
る。

という事は…私の話を絶対に聞いてない！

「ねえ…堇ちゃん？私の話を聞いてるかな？」

堇はハッとした表情で「あ！」と言った。
やっぱりというか聞いてなかった様子だ。

「な、何？聞してるよ！聞してる」

堇は慌ててそう言った。

「へえ…じゃあ私が何て言ってたか復唱をお願いします」

「え…つと…今回の冬コミは…えつと…」

そこで堇は言葉に詰まった。

「やっぱり聞いてなかったし！何よ？男の事でも考えてたんでしょ」

私がそう言うとき堇は、私から視線を外す。

なんて解りやすい…凶星みたいね…

そう言えば…遅刻した原因も男っぽいし…そうだ！まだその話を聞いてなかった！

「遅刻した理由の男の事でしょ！危ない、聞き忘れる所だった…」

「ど、どうしてそうなるの。私は男の事を考えていたなんて言っていないよ！？」

ちよつと慌てた口調で堇は言った。

「あのさ、その態度を見てると言わなくってもわかるから…で、何？話してよ」

「…え？」

堇は困った表情で言葉に詰まる。

「さっき後で話してくれるって言ったよね？」

私がそう言うとき堇はさらに困惑の表情を浮かべる。

「えっと…話さないとダメ？」

堇は小声でそう言った。

「あったり前でしょ！約束したじゃないの！それとも何？私には話せないって言うの？約束を破るって事？」

「いや…そういう訳じゃないけど」

「堇の男…あ！もしかして…それってあの、何だっけ…堇が惚れてるあの男の名前…あ！そうだ！高坂だ！高坂！その男と関係ある事？進展したの？ねえ！」

「え、あつと…関係は…」

「関係は！？」

「あ…る…けど…でもちよつと待って！まだ惚れてる訳じゃないよ！ちよつと気になってるだけ！」

堇は顔を赤らめながら懸命に否定している。

「何それ…あのさ、バイトまでわざわざその高坂って奴がいるパソコンショップに移っておいて、よくまあそんな言い方出来るよね。それで気になってるだけってありえないでしょ。この前だって好きなんだって私に言ってたじゃん」

「あれ？そ、そうだった…」

「おいおい：まあいいけどさ、でもさ、あの男の何処がいいの？
すっごく普通じゃん。いや待って！秋葉原のパソコンショップに働
いて普通ってないかもよ？」

「えっと：思ったよりは普通だよ？」

「でもさ、バイトまで無理に一緒にする意味がわからないんだけど
？そんなにあの男がいいの？」

「：いいでしょ。私が誰を好きになろうと、何処でバイトしようと」

「いいよ？別にいいけどさ、じゃあ何でバイトまで態々移って結構
経つのにアタックしないのよ？好きなら堇^{すみれ}から告っちゃえばいいじ
ゃん。当たって砕けろっていうことわざもあるしさ！」

「え？わ、私は告白とかした事ないし：って言うか！男から女に告
白するのが普通でしょ！っていうか、愛ちゃん！砕けちゃダメだよ」

「あーごめん、そうだね、砕けたらダメだね。でもさ、告白なん
てどっちからなんて別にどうでもいい事なんじゃないの？」

「私は嫌なの、私から告白なんて：」

「もしかして堇^{すみれ}って乙女なの！？王子様を待ってるの？そんなにロ
マンチストだったの？大笑い！あははは！」

私が笑いだすと堇^{すみれ}の表情がどんどん不満そうになる。

この子は自分の意見が通らなくなるとすぐに不満そうになるから
なあ：

でも少し言い過ぎてる気もしなくもないけど。

「笑わないでよ…私、本気なんだから」

堇^{すみれ}は今にも泣きそうな顔に変化している。
少しやり過ぎた!?

「ごめんごめん、笑っちゃった事は謝る」

「そりゃ…愛ちゃんが悪気が無いのもわかる…笑われても怒れる立場じゃないけど…」

「わかったわかった、そんなに深刻な顔にならないの!でもあれだよ?告白して貰いたいのならそんなダサい服装と伊達眼鏡をかけるのなんてやめてさ、普通に可愛い服を着て化粧をすればいいじゃん。堇^{すみれ}はマジ可愛いんだしさ、高坂っていう男だってきっと振り向くはずだよ?コスプレの時なんて大人気で今までに何人もの男に告られてるじゃん」

私がそう言っても堇^{すみれ}の不満そうな顔は戻らない。

「私は…見た目が可愛いから!とかそういうので好きになって欲しくないの!外見だけで判断して告白してきた奴なんて最低!」

「なんて贅沢な…世の中には男子に告白されない女子なんていっぱいいるのに…私なんて生まれてこの方男に告白された事なんて…正直、同姓からの告白の方が多いんだぞ!泣いちゃうからね…」

「え?あっと…それは愛ちゃんが男のコスプレするから…」

「する以前からそうなんです？あと、私に男のコスプレをさせたのって堇達じゃないのよ」

私は身長が178センチもあり、上には成長したがその他がほぼ成長しなかったという体型。

高校では髪も短くバスケットをやっていた事もあったか、よく女子に告白された。

だが！私は彼氏が欲しかったんだ！百合属性はない！

私は大学に入ってからそれはそれを打開すべく女性っぽく振る舞うようにした。

髪だってがんばって伸ばした。そして何とか彼氏も出来たのだ：本当だぞ？

まあ男から告白された記憶はほぼ無い。私は堇の様に可愛くないからね：

ちなみにコスプレは大学時代から。友人の誘いでちょっとした興味本位から始めた。

最初は女性のコスプレをしていたが、この身長のせいでどうも似合わない場合が多い：

というか：一人ならいいのだけど、多人数だともでかすぎたみたい。

だから他のメンバーの勧めもあり、男装でコスプレをしていた。

そのコスプレが自分で言うのもなんだけど、すっごく似合っていると思うの！

そうなるよ：やっぱり女性にももてる訳で：うーん：

あ、私の話はどうでもいいか。本題に戻るね。

「それじゃあ堇は中身を、性格を好きになって欲しいって事？でもさ、その高坂とかいう男だって中身はどんなんだかわからない訳じゃない？」

「いいの！いいの！もういいでしょ！私は私のやり方で恋愛するから！」

うわ：強情だなあ：今頃こういう考えの子ってきつと少ないよね。
ある意味希少価値のある子だよ：本当はもてるだろうにあの男に一途。なんて凄いいんだろう。

でも少しだけ考え方がおかしいよね。

「解ったよ：堇は堇の思うようにすればいいけど…」

まあ、堇^{すみれ}の表情を見る限り、悪い方向にはいってないようだし。
あまり言い過ぎてもダメか。私の意見を押しつけるのも良くないしね。

「で：色々とかさつき言ってたけど、結局は何があったのよ」

「えっと：まあ色々…」

「だから何よその色々って？あ！もしかして実はついにやる事やっちゃったの！？」

でもからかうのは面白いんだよね。堇^{すみれ}って独特な反応するし。

「な、何を言ってるのよ！何よ、そのやっちゃったって！何をやっちゃうのよ！」

堇^{すみれ}は顔を真っ赤にして否定してきた。

「え？何って？男と女の間でやることって一つしかないじゃないの

よ」

堇すみれの顔は更に赤くなる。

うわ！面白い！真っ赤！これだからこの子をからかうのはやめられない！

強情なのに初心うぶときたもんだ！反応が楽しい！

「そ、そんな不健全な事…や、やるはずないじゃん…」

「ぷぷぷ…何その不健全って？堇すみれって結構Hなのね…私は何もHな事をするなんて一言も言っていないよ？」

「え？」

堇すみれは目を点にして固まってしまった。

「あ、ごめん、堇すみれがあまりに初心うぶで可愛かったからつい…でもさ、Hはまだとして、キスクらいしたとか？」

「し、してない！その話題はもういいから！ふ、冬コミの話に戻そうよ」

堇すみれはそう言うのと私が机に広げたノートを見始めた。

しかし、ここまで話して今更冬コミの話に戻すなんて出来るはずないじゃん！

「で？何があったのよ？まだ話し終わっていないよ？ちゃんと話してよ」

「だから、もういいでしょ…きっと愛ちゃんが聞いてもつまらない事だし、それに…色々複雑すぎて信じてもらえるかわかんないし…」

すみれ 堇はそう言うとき小さく溜息をついた。そんな堇態度を見ると、何があったのか余計に気になる。

「私は、別につまらないなんて思わないよ。あと何？その色々複雑って？あの高坂っていう男の話じゃないの？違うの？」

「まあ…そうなんだけど…」

何、その深刻な顔…事態は簡単な事じゃないって事なのかな？でも悪い方向にも見えないし…

「何よ…その深刻な顔…困ってるのなら私に相談しなさいよ！これでも貴方よりも四歳も年上で恋愛経験だって豊富なんだから！」

しかし堇は無言で考え込んだまま動かない…
すみれ

☆★☆☆☆☆

愛ちゃんはサークルの中でも一番信用が出来る人生の先輩。

ちょっとしつこくて自己中心的な性格だけど、私と違って恋愛経験も豊かだし、コスプレ知識も豊富だし、下ネタも得意…いつも相談にのってくれるいい人…

でも、きつと今日の出来事を話しても信じてくれるはずないだろうし…

まず話しても良いのか迷う…でも、話さないとすつこくしつこく

聞いてくるだろうし、この先もネタにされるだろうし。

店長は他言無用って言ってた：

この事実が他人に漏れるとそれが話題になって、みゆきに危害が加わる可能性がある。

でも：きつと：愛ちゃんになら言っても大丈夫かな：

私にとって愛ちゃんは他人じゃない。年の差はあるけど親友だと思ってる。

私は悩んだ末に愛ちゃんに今日の出来事を話す事にした。

「愛ちゃん…」

「何？」

「私の話、例え冗談みたいな話だとしても、それでも信じてくれる？」

「え？何？それって私を信用してないって事？私は何時でも^{すみれ}董を信じてるんだよ？」

いいよね？信じても？

「それじゃあ：あのね、私が今から話す事は絶対に内緒だからね！」

「え？そ、そんな重い話なの！？でも大丈夫！内緒にするから！信用して！」

愛ちゃんはそう言うとう右手の拳で胸をドンと叩いた。

その瞬間、ゴブ！つという鈍い音が店内に響く。
右手の拳がみぞおち部分にクリーンヒットしたみたい。

「うぐ…げほげほ…ぐ…」

愛ちゃんは胸を両手で押さえて前屈みになって苦痛の表情を浮かべている。

「あ、愛ちゃん大丈夫？」

愛ちゃんは腕を振るわせながら右手を上げてグツと指を立てた
大丈夫のアピールらしいが、額に脂汗をかいているし、言葉も無い。大丈夫じゃないみたい。

そして数分後…

「…あー痛かった…というか苦しかった…」

「愛ちゃん…自分に対して手加減なしだったね…」

「あはは…いや、まあ…信用して！っていうのを態度で示そうと思つてさ」

愛ちゃんはそう言いながら苦笑した。

ちよつと馬鹿だけど、こういう所が愛ちゃんの良い所だ。

「堇^{すみれ}、それじゃあ…話してくれるかな？」

「うん、じゃあ…話すね…」

.....

私は今日の出来事を愛ちゃんに話した。

第十三話？【俺とは違う時間・堇《すみれ》編？】（後書き）

後書き人物紹介？

はなずみあい

花角愛

年齢 二十四歳

身長 178センチ

体重 内緒キロ

某大学を卒業して現在は東京田端の小さな会社で事務をしている。
すみれ

堇のコスプレ仲間で、そのサークルのリーダー的な存在だがリーダーではない。面倒見が良く、年上からも年下からも慕われる。

楽観的でポジティブなので行動先行タイプだが、実は考え方はしっかりしており場の空気を読む努力は必ずする。

しかし、状況を理解していてもはしゃいだりふざけたりする事も多い。

身長が一般女性より高く、胸が無い為に本人はすごく気にしている。彼氏はいるらしい。※誰も会った事は無い。

自称、恋愛経験は豊富だと言っているが、初の彼氏は大学に入ってから。※これも自分で話しをしていた。だから実際に恋愛経験が豊富なのかは不明。堇すみれの良き理解者で、親友である。

第十三話？【俺とは違う時間・堇《すみれ》編？】

今私はとんでも無い事を聞いたような気がする…ありえない事…

「ちょっと待って、堇…何それ？堇の彼氏がMMOをやってて天罰で女になった？ちょっと待って、流石に即信じろって言われても無理」

私は堇の顔を見ながらそう言った。

堇は無言のまま唇を噛みながら聞いている。

「空想小説じゃないんだよ？漫画でもないんだよ？男が女になる？そんな事があるはずないじゃん！夢でしょ？堇大丈夫？悩みがあるんなら聞くよ？いくら恋がなかなか実らないって言っても現実をちゃんと見なきゃダメだよ」

私は堇の話を冗談だと思ってそう言うと、突然堇が私を睨んだ。

私はサークルの中でも堇と一番仲が良い。

いつも話をしてるし、慕ってもくれていると思う。

そして…睨まれた事なんて今まで一度もない…

私はしまった！と心の中で叫んだ。

「…ほら…やっぱり信じてくれないし！やっぱり話すんじゃないかった…」

堇の声が震えている。

まさか…信じれない…でもその態度…さっきの話って冗談じゃない

くって事実？

男が女になる？まさか…でも^{すみれ}堇が嘘をついている様には見えない…

「だ…だってさ、普通に考えてよ…ありえないじゃん…」

「そうだよ…その通りだよ…普通じゃありえない事だから困ってるの…あと、まだ彼氏じゃないから」

え？そ、そこはちゃんとそこは否定するのね…

「でもまあ、彼氏とか彼氏じゃないとかそんな事はどうでもいいとしてさ…その話は…」

「本当なの！愛ちゃん信じてよ！信じがたいけど、事実なの！」

「わ、わかった、信じる！信じるよ…そこまで真剣に^{すみれ}堇が言う事だもん…信じるしか無いでしょ…」

私がそう言う^{すみれ}と堇は少しだけ安堵の表情を浮かべた。
だがすぐに表情は険しくなる。

「ありがとう愛ちゃん…でもどうすればいいんだろ…みゆきが女のままで男に戻らなかったら…」

辛そうな^{すみれ}堇…こんな^{すみれ}堇はあまり見たくない。
よし、ここは何とか空気を明るい方向へ変えなければ！

「そ、そうね…Hが出来ないわね…」

「ち、違ううううう！どうしてそうなるの！」

し、しまったああああ！つい何時もの癖で：違う方向へ空気を
変えてしまった！

「ご、ごめん、つい何時もの癖で」

「癖って何よ！愛ちゃんはすぐにそういう話題にもっていくんだか
ら…」

しかしあいかわらず反応は面白い…

「本当にごめんね」

「まったくもう…」

^{すみれ}堇が口を尖らせて私を見ている。
とりあえず空気が少し軽くなった。よかった。

しかし：男が女にか：それって真面目にすごく深刻だよね…

^{すみれ}「堇、貴方はどうしたいのよ？」

「私は：そりゃみゆきに男に戻って欲しいよ」

「まあそうだね…」

「うん…」

私と^{すみれ}堇の会話が途切れた。

うわ：折角軽くなりかけた空気が一気に重くなった…

そして無言のまま数分経過…

やばいよ…場の空気が重い…とてもじゃないけど私から何か言えそうにない。

何だ！この蛇に睨まれた蛙のような状態は！ぜえぜえ…わ、私から…話さないと…

そう思っていると堇すみれから私に話しかけてきた。

「ごめん、愛ちゃん。冬コミの話だけど今日は頭に入らないから…もう終わりでいいかな…もう家に戻りたいし」

た、助かったあ…すつごく辛い時間だった。

「ま、まあそうだよね…いいよ…だけどさ、今から家に帰って何をするのよ」

「みゆきが女から男に戻る方法をぐぐってみる…」

え…何それ…ネット検索が凄まじく発展しているこの世の中であっても、そんな非現実的な事がぐぐって出るはずないじゃん…

「待って、堇すみれ、まさか男から女に戻る方法を検索するの？そんなの検索しても出るはずないじゃん」

「え？でもやってみないと解らないでしょ」

「いや、そこはやらなくっても想像つくでしょ…」

「じゃあ何？愛ちゃんは私のやる事は無駄だって言いたいなの？」

堇^{すみれ}は再び不機嫌そうな顔になった。

え？どうしてそうなるのよ！？

何？今日の堇^{すみれ}っていつものポジティブさが無いよ！って当たり前か：

とりあえずはさっきみたいな重い空気にならないように話をしなきゃ。

「そうじゃないよ。だから、もっと無駄にならない事をやる方がいいって事」

「無駄にならない事：それって何？」

うわ：そうは言ったものの実際に無駄にならないものなんてすぐには見つかるはずも無い。

でも、堇^{すみれ}の為にも解決策を考えないと：何か無いかな：

しかし：男が女になるとかねえ：そういう事もあるんだなあ：

そうだ！よし、まずは女になった原因を考えよう。

女になった原因は何なのか？：そう：確か：天罰？だったよね？
そうだとすると：天罰って事は悪い事をしたから天から罰を受けたって事：

あれ？罰を受けたのなら、その罪を償えば？もしかすると悔い改めれば元に戻るんじゃないの？

そうよ！罰を受けているのであれば、その罰を悔い改めればいいのよ！

きつとそうだ！そうだそうだ！

「堇^{すみれ}！わかった！罰で女になったのなら、その罰を悔い改めればいいのよ！」

「え？悔い改める！？って…改心するって事？」

「そう！その罰を与えられた原因をきちんと理解して、それを反省するの！」

「愛ちゃん！それってさ、PKをしまくってカオスな属性にプレイヤーがPKを止めて、逆に良い行動をしていればだんだんとカオス属性が薄れていって普通の状態に戻るって奴と同じかな！？」

「え？何それ…その例え、理解出来ない…ごめん」

「えー！？すっごくわかりやすいと思ったのに…」

「PKって何？サ、サッカー関係かな？カオスって悪よね？悪いサッカー関係者？あれ？」

「何その解釈…全然違うし…」

堇すみれはかなりガツカリしている。

と言っても本気で理解出来ないのだから仕方ないじゃん！

「まあいいや…要するに愛ちゃん、みゆきが罪を償えば戻るんだよね！」

「え？いや…言い切らないでよ、そこまで自信ないんだけど…」

☆☆☆☆☆☆

午後九時

私は早く帰ると言いつつもずっと愛ちゃんと話をしている。
そしてふと店内の時計を見ると九時になっていた。

あれ？何か重要な事を忘れているような気がする…
何だろう…今日すべき事…その瞬間、私は思い出した！

「あ！そうだ！」

思わず大きな声が出る。

私が突然大声を出して愛ちゃんがびっくりしている。
そして店内で注目の的になっている…

「な！？何よ急に大声出して！は、恥かしいじゃん」

愛ちゃんは周囲を気にしながらそう言った。

「ご、ごめん…」

私はみゆきに夜に明日のスケジュールとか集合時間とか電話する
って約束していたんだ。

愛ちゃんにその趣旨を説明した。

「なるほど…へえ…デートの約束をたんだ？相手が女になってもキ
ツチリやる事はやるのね」

「やるって何、いやらしい言い方…」

「あははは、いいじゃんいいじゃん。気にしないの！そっか…明日のおでかけルートね…そうね…まあ相手は今は女の子になってるんでしょ？それならやっぱりデートコースは女の子とおでかけするコースになるんじゃないの？」

「そうかな…それでいいのかな？あと、まだこれはデートじゃないからね」

「あらら、相変らずそこはキッチリ否定するのね…でも元とはいえ男でしょ？デートでもいいじゃん。いやなの？デート」

「別に嫌じゃないけど…実感ないし…それにみゆきが男に戻ってから一緒にお出かけした時にデートって言いたいし…」

「^{すみれ}菫は細かいなあ…だいたいさ、『デート』の方が『お買い物』よりも発言しやすいじゃん。だからデートの方向でOKでしょ！」

「待って！そういう問題ですか？」

「ええ、かなり重要な事ね…」

「…う」

「まあ結論は『デート』だろうが『お買い物』だろうがどっちでもいいんだけど」

「えー！？どうでもいいのかよ！」

「ふふふ…でさ、デートコースは^{すみれ}菫が当日に決めれば？集合場所だけ決め手おいてさ」

「集場所だけ？」

「そうそう！食べるお店くらい決めてもいいけど、あとはその場凌ぎでいいんじゃない？」

「え？デートてそんなもの？」

「私は最初からコースが決められてるのってやだし、そう！私は自由人だから！なんちゃって！」

そう言って愛ちゃんは声を出して笑った。

なるほど…自由人か…確かにそうかも…愛ちゃんって普通の人とは考えが一致しない事も多いんだよね…

だから言った事を信用すると痛い目を見る事もよくあるし。意見は半分聞いておいたとして、せめて買い物をするお店くらいは目星をつけておいたほうがいいかも…

「あはは…参考にするね」

「よし！じゃあ、早速電話しなさい！」

愛ちゃんはそう言って私を指差した。

「え？」

「ほら、今すぐに電話しなよ」

今度はバックを指差して携帯を出せと仕草で表現している。

「い、ここで？」

「そうだよ？もう九時でしょ？そろそろMMO趣味の男はMMO廃人モードに突入するんじゃない？推測だけどさ！」

愛ちゃんは満面の笑みでそう言った。

確かに：MMOでは今が一番コアな時間帯かもしれない。

うちのクランメンバーも九時位が一番集合するし。私もMMOに一旦集中すると電話になんて出れない状態になる。

まあみゆきには電話をしようってあるのだから、大丈夫だとは思うのだけど…

………やっぱり何か心配だ…

やはり一回はかけておくべきかもしれない。

「わ、わかった…でもここじゃあれだから…外で電話してくる」

「OK！いつてらっしゃい」

愛ちゃんは笑顔で手を振った。

私は携帯を片手にファミレスの外に出た。

左手に携帯を持って、みゆきの携帯へ：電話…を…

実は今日初めてみゆきの携帯に電話かけるのだ…

アドレス帳を検索する指が少し震える。

見つけた…高坂行幸と…

ポチ…

ついに押した！押してしまった！このままだと！！

トルルルル：

鳴った！鳴ったあよお！

ドキドキドキドキドキ

ダメだ、緊張する！待て！負けるな！ここで下手にしたてでるとみゆきが図に乗る！

冷静にならなきゃ：

トルルルル：

トルルルル：トルルルル：

私の緊張をよそに電話は鳴り続ける。

あれ？みゆきが電話に出ない：

まさかゲームに夢中なの！？信じられない！あれだけゲームに夢中になるなんて言ったのに！

でも何？留守電にもならないよ：

私は一回電話を切った。

そしてもう一度電話をかける：

トルルルル：トルルルル：トルルルル：

呼び出し音だけがずっと鳴り続ける：

でもみゆきはでない：

何よ…電話は私からだって解ってるはずなのに…わざと出ないの？
それとも…お風呂？トイレ？そ、そうだよねきつと…

よし、後でもう一度電話しようつと…

携帯を折りたたむと私はテーブルに戻った。

「お！おかえり！どう？彼氏は電話に出た？ちゃんと約束の確認した？」

愛ちゃんがすつごく楽しそうに聞ってくる。

「いや…電話に出てくれなかった…」

「えー？何それ…」

「きつとあれだよ。お風呂とかトイレだよ」

私がそう言うのと愛ちゃんは腕を組みながら険しい顔になった。

「^{すみれ}堇…もしかしてさ、女でも連れ込んでるんじゃない…」

「えー！？ちょっと待って！今のみゆきは女だよ？女を連れ込むとか…」

「あ…そうだったね！」

ドルンピープルル！

その時！突然私の携帯が鳴り響いた！

第十三話？【俺とは違う時間・董《すみれ》編？】（後書き）

後書き情報

行幸^{みゆき}のアパート住人について。

行幸^{みゆき}の今借りているアパートは六部屋あり全てが埋まっている。

住人は全員が男子で大学生。そして全員が何かしら特殊な趣味を持っている。※噂です。

首都高速の直下にあり日射をまったく望めないので普通の人間は住みたいとは思わないようなアパートだが家賃が安い！

行幸^{みゆき}は引越して来た時にだけしか住人には会っておらず、ほぼ接点が無い。小説には直接接点のある人物としては登場の予定はない。はず？

第十三話？【俺とは違う時間・恋次郎《れんじろう》編】（前書き）

店長編です。これも興味無い場合はパスしてOKです。

しかしながら^{すみれ}堇編とは接点があるので^{すみれ}堇編を呼んだ方は読まない
と多少違和感出るかも？

第十三話？【俺とは違う時間・恋次郎《れんじろう》編】

「店長お疲れ様でしたー」

「ああ、お疲れ様」

夜の七時。パソコンショップが終了。俺以外のバイトは全員があがった。

俺はレジの金の精算と売上金げを銀行の夜間金庫へ入れる業務、そして在庫の確認と発注をこなしてから帰宅する。

事務所の机に向かって在庫を整理していると、机の横に紙袋か置いてあるのに気がついた。

中身を確認すると、それは今日、行幸みゆきが着ていたメイド服だ：行幸みゆきがここに置いて帰ったのだろう。

そのメイド服を見ていると今日の出来事を思いだす。

そして後悔する：

俺は何故あんな狂ったようなひどい事をしたのだろうかと：

今日の俺はおかしかった。行幸みゆきが女になった時はすごく驚いたが、あの時はまだ精神状態は普通だった：

少しは素性がばれそうになったシーンもあったが、それでもまだどうにでもなるレベルだった。

そう：このメイド服を借りてくるまではある程度は自分を抑える事が出来ていた：

俺はこのメイド服を借りてきて：行幸みゆきがメイドの姿になって突如としてリミッターが外れてしまった。

このパソコンショップへ勤め始めて早5年：

俺の趣味はこの店に勤め始める前から今と変わっていない。

そして今まで俺の秘密はずっと隠し通せていたし、すぐくスポーツマンで健全な店長を演じてこれていた。

それが：それがたった数時間で秘密暴露、健全なイメージが崩壊した：

まだ行幸と堇みゆき すみれしか俺の隠してきた真実を知らない。そこだけが多少の救いだ。

俺が二人にちゃんと口止めすればこの先もなんとかなるだろう。ああ見えても二人はキツチリした奴らだ。俺はそう思っている。

俺は紙袋を開けて再びメイド服を見た。綺麗にたたまれたメイド服。

このメイド服は呪われているんじゃないのか？そう思った。

しかし誰に呪われるんだ？まさかこのメイド服を貸してくれた女か？

そう言えば：このメイド服を貸してくれたあの女：この近辺じゃ見かけた事のない女だった：

秋葉原にあるメイド喫茶の位置はほぼ把握している俺が、あの店の存在を知らなかった。

それに見ず知らずの俺にこうも簡単にメイド服を貸してくれるなんておかしすぎる。

あの時もっと怪しむべきだったのか？

俺はふと時計を見る。

するともう八時を回っているじゃないか！

確か：メイド服を貸してくれたあの女：八時半までならお店にいるとかいっていたな。

別にすぐに返さなくてもいいとか言っていたが…これは早く返そう！

絶対にここに置いておかenいほうがいい！
それにあの女に逢えば俺がおかしくなつた原因が何か解るかもしれない。

俺は慌ててその紙袋を持って店の外へ出た。

「確かこつちだよな…」

俺は小走りでそのお店へと急ぐ。
そしてメイド服を貸してくれた女の居るはずのお店の前までやってきた。

すると信じられない事が…

「あれ？店が無いぞ…」

俺は昼間ここであの女にメイド服を借りた…
その時にはお店が存在していたはず…何故無いんだ！？

場所を間違つたかと思eい周囲を見渡してた。間違い無い。ここだ…
俺はメイド服を借りた時の事を思eい出す。

俺は行幸^{みゆき}に合eう服を行きつけのメイド喫茶の子に借りようと思つてこの道を歩いていた。

その時に借りてこようとしたのは別にメイド服という訳ではない。
女性物の服ならば何でも良いと思eっていた。

すると丁度この場所で見eた事の無いメイド服を着た女にいきなり
声をかけられた…

女は銀髪のロングヘアで瞳は透き通るような青色。

身長は170センチくらいだろうか？スタイルも良く、正直客引きをするレベルの子じゃなかった。俺は見た瞬間外人かと思ったが、話しかけてきた言葉は日本語だった。

しかし日本人にはとうてい見えなかった。

「お兄さん！」

女に突然声をかけられたが、俺は仕事だったし知らないメイド喫茶なんて寄る時間はないと思って即断ろうとした。

「あ、今は仕事だから」

俺がそう言うとその女は笑顔で言った。

「何か急いでる様子ですけど？何かお困りごとでも？」

「いや別に？」

俺はそう言ってその場から立ち去ろうとした。

しかし女は俺の手をいきなり掴んだ。

「え！？な、何だ？俺はちょっと急いでるんだけど」

女性は俺の目を見ながら言った。

「困っているって顔に書いてある人をほっておけないだけです」

何を根拠にそう言ったのかはわからない。だけど俺はそうまで言

われて無視が出来なくなった。

そして何故か女物の服を借りに行く途中だと言ってしまったんだ……するとその女は言った。

「そうなんですか？それじゃあうちのお店のメイド服をお貸ししましょうか？」

「え？いや、見ず知らずの方に借りるなんて出来ないのでから」

「大丈夫ですよ？ほら、たった今知り合いになったじゃないですか」

女性は笑顔でそう言った。

「しかし……」

俺が困っているのをよそに、女性はさっさと店へ入るり紙袋を手にして出て来た。

「後でお店に戻してくればいいですから、ほら遠慮しないで」

そう言ってその紙袋を俺に差し出した。

「……いいんですか？」

「もちろん！」

俺は疑う事も無く、その女からメイド服を借りたんだ……

確かに存在した。記憶も鮮明に残っている。あの特徴的な女を忘れる訳は無い。

でも店が無い！

俺は紙袋に入ったメイド服を見た。

真新しいメイド服…

待てよ…考えてみれば、行幸みゆきの事は何も教えてないのにサイズがぴったりだった…

まるで行幸みゆきの為に作ったかのように…不思議だ…

俺は一応もう一度周囲を走り回りお店を探した。しかしいくら探してもメイド喫茶は存在しない。

仕方無く俺は服を持って知り合いのいるメイド喫茶へと急いだ。

その店が消えた場所から小走りで数分いった所の雑居ビルの4階に俺の行きつけのお店がある。

俺はメチャクチャに遅い油の匂いが漂うエレベーターは使わずに階段を駆け上がってそのお店に飛び込んだ。

ちなみに、このお店は営業時間が二十時半迄でお店は閉店の準備を始めていた。

お店に入ると目の前に女が一人。

「あ！恋ちゃん！いらっしやい！」

俺は常連なせいか「いらっしやいませ、ご主人様」的な掛け声はない。

「おう！優理ゆり」

「今日はどうしたの？もう閉店だよ？」

俺に馴れ馴れしく声を掛けてきたこの女の名前は小鳥遊優理^{たかなし ゆり}。

『ことりあそぶゆうり』と最初に言っすっごく怒られた記憶がある。

この子は確か：何処かの大学に行ってるはずなんだが：毎日ここでバイトをしてる気がする。

ちゃんと学業^{みゆき}しないと行幸^{みゆき}みたいになるぞ：

「今日は別にお店に来た訳じゃない」

「え？じゃあ何？もしかして私に逢いに来たとか？」

この子はこの手の冗談をすぐに言う。

俺は何度も言われて免疫が出来てしまったので何とも思わないが。

「あ、それは無いから」

そして何時もの様に断る。

「えー残念！」

そう言う優理^{ゆり}の顔はとても残念そうには見えない：逆に楽しそうだ。

「じゃあ何なの？」

「これなんだけど…」

俺はそう言って紙袋の中身のメイド服を優理^{ゆり}に見せた。

「え？何？これってメイド服？うわ！シンプル！これって実用的ね
：いわゆる本物？でもこれどうしたの？もしかして恋ちゃん：こっ
ちの方向について？」

「ないない！そうじゃない！そうじゃなくって、聞きたいのはこの
辺でこのメイド服を着たメイド喫茶とか知らないかって事だ」

「え？このメイド服を着たお店？」

優理は腕組みをして考えている。

しかしその表情を見るからに、思い当たる節はなさそうだ。

「ごめん：私の知る限りだと無いと思う：」

やはりというかそうだな：

「恋ちゃん、それ、ちょっと貸してくれるかな？」

「あ、ああ：」

「お店の子に聞いてくるから！」

「ああ、すまん」

優理は紙袋を持ってお店の奥へと入って行った。

「おお！恋次郎さん！」

「うわあ！」

俺の左横から声がしたと思うとそこにはこのお店の店長が：

店長はビシツとスーツ姿で中肉中背、身長は180センチはある
だろか。

髪型もぼっちり決めているが：正直俺にとっては危険人物だ：

「おやおや入口で何をしてるのですか？もしかして：今日はこの前
話をしたラガーマン喫茶の件、承諾しに来てくれたのですか？」

「待て、あれは断つただろ、俺はそういうのに興味はない」

「あらら：残念」

「だいたい何だ？そのラガーマン喫茶っていうのは？秋葉原でそんな
お店を開いても流行るはずないだろ」

「え？恋次郎さんは知らないのですか？今、動画サイトでは筋肉男
子系の動画がは流行っているのですよ？筋肉ムキムキ！っていうの
が！女性だけでは無く、男性にも人気があるのです！」

「おい！筋肉男子系って何だ？ちなみに俺は男に趣味はない！あと
俺を名前で呼ぶな！」

店長はクスクスと小声で笑った。

「残念ですね：時給一万円は出そうかと思っていたのですが」

え？な、何だと！一万円：時給！？一日で八時間働いたら八万円
！？

一ヶ月だと：うおおおおおとおお！

そんなにお金があったら：『メイド地獄放浪物語』十八禁とか『麗しきわが嫁達』十八禁とか『メイドでごめんSPデラックスボックス限定フィギュア付き』全年齢とか、何でも買えるじゃないか！

「おや？恋次郎さん？その表情は本気になって頂いたのでしょうか？」

その時、お店の奥から声が聞こえた。

「恋ちゃん！おまたせー」

優理ゆりが戻って来た。

「あら、小鳥遊たかなしさん」

「あ、店長？何してんの？あ、とりあえずこのメイド服は返すね！」

優理ゆりは店長を見ながら俺に紙袋を手渡した。

「ちょっと恋次郎さんを勧誘してまして」

「勧誘ねえ：恋ちゃん、どうせ時給一万円とか言われたんでしょ？絶対嘘だから信じない方がいいわよ？」

優理ゆりがそう言うとき店長の顔色が変わる。

「何を言ってるのですか？私は嘘をついた事はありませんよ？」

「えー！嘘つきじゃん！私がここに入る時だって、時給三千円とか言ってたのに、初日だけ時給三千円とか！後はずっと時給八百五十

円じゃん！嘘つき！これって詐欺以外の何ものでもないじゃん！」

「時給三千円は実行したのですから嘘では無いでしょ？」

「何よその言い方！このお店やめちゃうよ？いいんだよ？私はこう見えても他のお店からいっぱいスカウトされてるんだから！」

「ちょ、ちょっと待って下さい。貴方は店長である私を脅すのですか？」

「脅しじゃないよ。意見だよ、意見！でも時給アップしてくれれば考え直すわよ」

何だこのやり取りは…

「よ、よし…じゃあ八百六十円にしましょう…」

え？おいおい、そんなに簡単に時給がアップするのかよ！？

「わい！やった！時給アップ！」

「仕方ないですね…他のメンバーには内緒ですよ？」

「わかってるわよ！えへへ」

何だこのいい加減さは…しかしそんな事はどうでもいい。

「おい…優理^{ゆり}、このメイド服の事は？」

優理^{ゆり}ははっとした表情で俺を見た。

「そうだ！そうよね！ごめーん！」

優理^{ゆり}は舌をぺろりと出して可愛げに謝る。

しかし何だろうな…俺はこういう仕草を見ても優理^{ゆり}にはあまり萌えない…

今の女になった行幸^{みゆき}の方が何倍も萌えるな。

…え？

な、何だ！俺は何を考えているんだ！やばい…まだ俺はおかしいままなのか！？

も、もしや…このメイド服のせいなのか！？早く手放さないと！

「で？どうだった？知っている子はいたのか？」

「ごめんね、誰も知らないって…」

やはり予想してた通りか…

しかしこのままこの服を持って帰るのは危険だ…こうなったら…

「おい店長！」

「え？は、はい！？」

「お前がこのメイド服を預かれ！」

「え！？な、何故私が！？」

「理由は無い！俺が返せと言うまで預かれ！」

「そんな理不尽な…」

俺は強引に紙袋を店長に押しつけた。

「よし、俺は戻る！優理^{ゆり}、またな」

「え？あ、うんまたね！オープンしてる時にまた来てね！」

「おう！」

俺はそう言って急いで階段を駆け下りた。

ふう…ヤバイな…あの時俺は一瞬だが行幸^{みゆき}のメイド姿を思い出して萌えてた…

危険だ、やっぱりあのメイド服は呪われている…

俺は急いで店に戻った。

第十三話？【俺とは違う時間・恋次郎《れんじろう》編】（後書き）

後書き人物紹介？

小鳥遊優理^{たかなし ゆり}

年齢 不明。多分大学二年か三年だと思う。

身長 163センチ位

体重 内緒キロ

恋次郎の通うメイド喫茶のバイトの女の子。

髪の色は黒で普段はポニーテールにしている。

痩せてはいなく体は少しふっくら系。

特徴は胸が大きくFカップ。おかげでメイド服は特注品。

胸について本人は大きい事が嬉しくもあるが悩みでもある。

普段からとても明るい女の子で基本的には誰にでも友好的。

大学生のはずだが昼間からメイド喫茶でバイトをしており、学業は

どうなったんだと恋次郎は心配しているようでしてない。

メイド喫茶に働いているが、理由はバイトの時給に惹かれて始めた

だけで、メイドになりたかった訳でも、メイド喫茶の意味をわかっ

ていた訳でもない。

行幸や堇^{みゆき すみれ}とは今の所接点はない。

第十三話？【俺とは違う時間・堇&恋次郎そして愛編】（前書き）

もうすこしで本編？へ戻ります。

第十三話？【俺とは違う時間・董&恋次郎そして愛編】

パソコンショップの事務室

俺はメイド服を手放す事に成功し、安心して店へ戻り売上金を集計中。

「なんだと！三百二十円足りない…いつ間違っただんだ！」

レジのお金が合わずについ声が出た。

くそ…仕方ないな…今回も俺が出しておくか…

レジの精算金が合わない場合、小額だと俺がいつも自分の財布から帳尻を合わせる。

多すぎた場合は店内の金庫に保管する。しかし何故か少ない場合の方が多いんだよな…

自分のお金から清算ってやつちゃダメだとは思っているが、正直言っただけ追求するのが面倒だ。

それに追求なんてしていると日が暮れてしまう。まあ…既に暮れてるのだが…

とにかくこれで清算も終わり！在庫の発注もした。

もう九時になるし、そろそろ家に帰ろう。

俺は店の戸締りをチェックして事務室の鍵を閉めようとした。

その時、ふと行幸と董の事が頭に思い浮かぶ。

そうだな…今日はあの二人には俺の暴走で悪い事をしたかもしれ

ないな。

きちんと謝っておくのが大人としての筋だろうな…電話するか…

俺は事務室内に戻り椅子に座ると携帯をポケットから取り出した。

まずは行幸みゆきだな…

俺はアドレスから高坂行幸を探し、そして電話をする。

トウルルルル…

呼び出し音が携帯の中で鳴り響く…

トウルルルル…トウルルルル…トウルルルル…トウルルルル…トウルルルル…

ん？出ないな…ゲーム中か？仕方ない、先に堇すみれにかけるか…
俺がそう思って電話を切ろうとした瞬間！携帯から女性の声が聞こえる。

「あ、はい、もしもし？」

やっと行幸みゆきが電話に出たか。

「もしもし？俺だ、今日の件だけど」

「え？えっと…あの？どちら様でしょうか？」

あれ？どちら様？何だ？行幸みゆきじゃないのか？
よく聞けば声が違うかもしれないぞ！？

俺は慌てて携帯画面を見て発信名を確認した。
高坂行幸と画面にちゃんと出ている。俺がかけたのは絶対に行幸みゆきの携帯だ。

何で他人が、それも女が行幸の携帯に出てるんだ!?

「え、えっと、また電話します…」

俺はそう言って思わず電話を切った。

☆☆☆☆☆☆

店内に鳴り響く携帯の音。

私は慌てて携帯を取り出して着信名を見た。

もしかしてみゆき!?

しかし、携帯に表示されていた名前は店長。

何だ店長か…みゆきかと思ってドキドキしたじゃなかったじゃん…

「すみれ堇、彼氏じゃないの?出ていいよ?」

愛ちゃんはニヤつきながらそう言った。
思いつきり勘違いされてる…

「違う、バイト先の店長…」

「え?あ、そ、そうなんだ?で、でも出た方がいいんじゃない?」

愛ちゃんは電話の相手を勘違いしていたのを理解したらしく、苦笑を浮かべながらそう言った。

しかしいつたい何の用事よ！店長が私に電話とか。今日の事で怒ってるのかな？

仕方ないな…出るか…

「あ、うん…えっと、じゃあちよつと待ってて」

「うん、いつてらっしゃい」

私は慌てて外へ出て電話に出た。

「はい、永井です」

「あ！^{すみれ}堇か？」

「はい、何ですか？私、今日の事は謝りませんよ？」

「いや、その事じゃない。その事はもういい。^{すみれ}堇の主張は正しい。それに今日の事は俺も悪かったからな。逆に謝るよ。すまん」

あれ？店長が謝ってきた…普通の店長に戻ってる？あれれ？今日の昼間はあんなにおかしかったのに…

「え、あ、えっと…私もすみません、少し我がままでした」

「いいよ。今日は色々あったからな…仕方ないだろ」

やっぱり普通だ…まあ…いっか。

「で？どうしたんですか？」

「行幸みゆきの事なんだが…」

「え？みゆき？どうしたんですか？」

「今…俺が行幸みゆきの携帯に電話したら、知らない女が出たんだ」

「え！？女！？それって女になったみゆきじゃなくって？」

「じゃない…違った」

「ええええええええええ！」

プチ！

私は電話を切った。そして慌ててもう一度みゆきの携帯に電話する。

ドキドキドキドキドキ
お、女って…どういう事よ…

トルルルル…トルルルル…トルルルル…

出ない！出ない！出ない！

カチャ！と音が聞こえる。

あ！出たかな！？

『おかけになった…』

今度は留守電に切り替わった。

私は留守電だと確認した瞬間に電話を切った。そしてすぐに店長に電話する！

トウ：ガチャ！

「茨木だ」

まだコールしてないのに店長が電話に出た！

「店長！出るの早すぎ！」

「な、何だ！お前がいきなり電話を切ったから、切れたのかと思って待ってただけだろうが！」

「え？あ！ごめんなさい」

そうだ：私がブチキリしたんだっただ：

「出ないんだけど！」

「誰が！行幸みゆきの携帯か？」

「そう！私が電話しても出ない！」

「そうか？じゃあ俺がもう一回電話して確認してみる」

「あ、はい」

「また電話するから待ってろよ」

「はい…」

私は電話を切った。

そして三分後…

ドルルンピープルル！携帯が鳴る！店長だ！

「はい！永井です！」

「おう！俺だ」

「店長、どうでした？」

「出た…」

「みゆきが？」

「いや…さっきの女が…」

「え？…何それ…」

「でもな、今度は高坂ですって出たから…行幸みゆきさんの携帯ですか？
て聞いたんだ。そうしたら『はい』って」

「な、何よそれ！」

「で、どちら様でしょう？って聞いたら、『妹です』だと言ってた

ぞ」

「妹！？存在は私も知ってるけど、でも妹だったとして何で私の電話に出ないの？理由がわからない…」

「しかし、こんな平日のこんな時間になんで妹がアイツの部屋に来てるんだ？俺が知る限りでは確か行幸みゆきの妹は高校生だったはず…それに行幸みゆきは今女になってるんだろ？妹を部屋に呼ぶとかありえないだろ？」

「そうよね…店長の言う通りかも…妹とかは口実で、実はみゆきには彼女が居たの？」

「私の電話に出ないのはその女が他の女からの電話だって思ったから？」

「そうかも…私なら彼氏の携帯に他の女から電話がかかってきたら絶対出ないもん！」

「店長！私にみゆきの家の住所を教えて！」

「え？教えてって？まさか行くのか！？」

「もちろん！確認しに行く！」

「俺も行くかと思ったんだが？あれだぞ？俺が報告してやるから無理に来なくていいぞ？」

「え？店長がみゆきの家に行く！？」

「どうしよう…みゆきのアパートに女がいるのも腹立たしいし、この目でちゃんと確認したいんだけど…」

「もし本当に店長の電話に出た女性がみゆきの妹で、みゆきには何

もなくって、店長がみゆきの部屋に行って、みゆきから店長に明日の買い物がばれるのも何だか嫌だし：
やっぱり一緒に行かなきゃダメね：

「えっと、あれよ、あれ、私もこの件に関わってるし、確認に行く義務があると思うの」

「義務？そんなのはお前には無い。俺一人で十分だ」

「ダメ！店長は今日の一件があるから信用出来ない！行く！私も行くから！」

「何だと！？俺が信用出来ないのか？ってまあ今日の俺じゃあ信用しろって言えないな。仕方ない、じゃあちよっと待てよ：」

今の会話を聞く限り店長は普通に帰っているから信用出来るかもしれないんだけど：

と：保留になっている間に住所をメモ出来る場所まで戻らなきゃ！私は急いでファミレスの中に戻る！

「あ、おかえり？用事済んだ？」

愛ちゃんが笑顔で私に言った。

それと同時に保留が解除される。

「愛ちゃんごめん、ちよっと待ってて」

「え？何？」

愛ちゃんはキョトンとした表情で私を見ていた。

携帯からは店長の声が響く。

「堇^{すみれ}、いいか？言うぞ？」

「はい」

「東京都墨田区…」

私は机に出ている冬コミの打ち合わせノートに住所を書き写した。

「OK！書き写した！ありがとう店長」

「おう！何かあったら電話くれよ！俺は今から店を出て向かうから」

「わかったわ」

私はそう言って電話を切った。

目の前では相変わらずキョトンとした表情の愛ちゃんが：

「な、何？何があったの？」

「ごめんね愛ちゃん。私、行くね！」

「ちょっ！ちょっと待ってよ！」

「また私から電話するから！」

そう言って私は慌ててファミレスを飛び出した。

☆☆☆☆

な…何よ…何がどうなったの？

^{すみれ}堇、何であんなに慌てて出て行っちゃった訳！？

もしかして彼氏の家に向かった？

わーお…そっか！そうかあ…^{すみれ}堇も行動に出たか。

今度結果を聞いてyarotto！

っていうか…待ってよ？食事代もらってないし！

私は伝票を確認してから自分の所持金を確認する。

あの子…バンバークセット頼んだの！？高いなあ…

でもどうやら大丈夫ね…二千円くらいしか残らないけど。

今月はコスプレ衣装にお金がかかりすぎて大変なのよね。

……

あーあ…コーヒー二百円で我慢した意味が無いじゃん…

……

ダ、ダメよ愛！年下のかわいい後輩じゃないのよ！

急いで彼氏の家に行ったんだよ？いいじゃん！そうよ愛！これが

愛なの！って私の名前じゃないよ？

ふう…仕方ないわね…今回は私が喜んで出しておきますか！

よーし！お店からでようかな…

私はテーブルの上の冬コミのノートを鞆に仕舞いこんだ。
するとテーブルの横にファミレスの店員が…

「おまたせしました！季節限定の冬のびっくりパフェです」

「え？私はそんなの…あれ？頼んでましたっけ？」

「はい、お連れの方がご注文されました」

「え!？」

堇^{すみれ}、何時の間にこんなものを：

「こちらに置いてても宜しいですか？」

「あ、はい：」

私の目の前に「ゴトリ」と重そうな音を立てて超ビックなパフェが置かれた：

「うーん：これはどうしたものか：」

「お客様、請求書をここに入れておきます」

店員が請求書をくるりとまるめるとプラスチックのケースへと入れた。

私はそーと請求書を取って金額を確認してみた。
えっと：パフェの金額は：

冬のビックパフェ九百円

「高あ！」

私は思わず店内すべてに聞こえるような大声を上げてしまった。
知らない間に店内にはお客はまったく居なくなっているが、しかし逆に店員の視線を集めてしまった。

これはどうかしないと…

「あはは…お、大きさですよ…ほら！す、すごい！大きいパフエ
だなあ…えへへ」

今度はキッチンスペースからも店員が出て来て私を見ているじゃん…

しまったあ！更に注目を集めてしまったあああ！

目の前に置いてある超特大パフエ…

店員の注目の私…

私は甘い物があまり得意じゃないし…でももったいないし…注目
集めてるし…

仕方ない…食べますよ、これも運命だと思って…

「パク…う…甘あ！うえええん…甘いよお…」

私は作り笑顔で、しかし心の中で泣きながらパフエを食べた…
堇^{すみれ}の馬鹿…

第十三話？【俺とは違う時間・董&恋次郎そして愛編】（後書き）

後書き人物紹介？

店長

小鳥遊優理^{たかなし ゆり}の働いているメイド喫茶の店長。

年齢は恋次郎と同じくらいで、若くして事業？に成功した。

いつも黒髪をポマードで固め、黒いスーツ姿で、身長は175センチ。体重は77キロ。

筋肉質の体で体格が良い。

秋葉原に自分のお店を十店出す野望に燃えている

現在のはうがーマン喫茶という怪しいお店を企画。恋次郎を勧誘中。

店長は本気で誘っているが恋次郎はその気はない。

たまにオネエ言葉になるが決してオカマ等ではない。

第十四話【俺の妹のターン!？って何で妹が登場するんだ】

「いつ見ても汚いアパートね…」

高速道路の脇にある日も当たらないボロアパート。

何でこんなアパートに行幸^{みゆき}住んでるんだろ？金銭的に厳しい筈だし、自宅からでもアルバイトにも行けるし家賃だってかからないのに。

あれか…家にいるとパソコンが自由に出来ないし、両親にも煩^{うるさ}く就職しろって言われるからか。

いつからだろ？行幸^{みゆき}がパソコンに熱中しだしたのって…

何だか知らないけどパソコンゲームを始めてから、行幸^{みゆき}はパソコンの画面を眺めてニヤニヤしたり笑ったりするようになったんだ。

私もそういう行幸^{みゆき}を見てると何だか腹が立ってイライラしてつい文句を言ってしまう。

両親にも私にもそういうゲームを止めろとか色々と言われて行幸^{みゆき}も家を出て行っちゃったんだ…

居なくて清々したと思ったけど、でもやっぱり家に居なければ居ないでなんか寂しい気もする…あーあ…馬鹿兄貴め…

私の名前は高坂幸桜^{こうさかこうはる}。高校三年生。

名前を見て解るかと思うけど、私は高坂行幸^{こうさかみゆき}の妹。

ぶっちゃけ言うとな私の名前は古風すぎるし、行幸^{みゆき}もそうだけど、当て字すぎて名前を一発で読み当てられた事が無い。

いくら幸せになって欲しいからって名前に幸を入れたって言われても、私にすれば読みやすい名前にしてくれた方がよほど幸せになれた気がする。

おまけによく二人の読みだけを見た時は姉妹と勘違いされる…

漢字だけを見たら兄弟だと思われる。つと…そんなの関係ないか、本題に戻らないとね。

私は兄の住んでいるアパートの目の前まで来ている。

どうして平日の夜に行幸^{みゆき}のアパートに来てるのか？

まあ確かにそういう疑問は起こるわよね。

今日はたまたま錦糸町に寄る用事があったのと、明日が学校の創立記念日で休みだったのでたまには様子を見に立ち寄ろうと思っただけです。

両親にも様子を見て来いと言われたんだけどね。

えっと、確か二階だよね…

私はアパートの金属製の階段を一段一段上がってゆく。

カツンカツン…

金属製の階段が軽い金属音を響かせる。

ええと…確か…ここかな？私は行幸^{みゆき}の部屋の前に立った。

私の目の前には茶色く汚れた木調のドア。このドアには呼鈴、よくするにピンポンチャイムが付いていない。だからいつもノックするか携帯をかけるかし行幸^{みゆき}に來たという事を伝える方法が無いんだけど…

しかし、何このドアの汚れ…触ると何かの細菌が手に移りそうで怖い…

あとは、ここのアパートの住人って全員怪しい男だって情報を聞いているから、こんな若い女子高生が訪ねて来てるってばれたら…まあ何もないかな？

さっき携帯に電話したけど出なかったし…仕方ない…ノックするしかないか。

私は恐る恐るドアをコンコンコンと三度ノックをした。しかし中からの反応が全く無い。

ドアの横にあるキッチンの窓からは明かりが漏れている。だから中にはきつというはずなのに…

もう夜八時を過ぎてるし、きつとあのくだらないパソコンゲームにまた夢中になっているんだ。私はそう決め付けてバックの中から合鍵を取り出した。

そして私は何の躊躇ちゅうちよも無くドアを合鍵で開ける。

ドアは『ギィィ』と怪しい音を立てて、ゆっくりと開いた。アパートの中は電気が付いており明るい。

「行幸みゆきい？ いるの？」

私は中に入るとドアを閉めた。そして靴を脱いで部屋の中へと入る。すると部屋の中からすさまじいカッププラーメン匂がした。

「行幸みゆき、またカッププラーメンとか食べてるの？」

私はそう言いながら玄関を入りダイニングへと進む。するとダイニングの向こうの部屋に人が横たわっているのが見えた。

しかしダイニングテーブルや間仕切りの建具で足しか見えない。

行幸寝てるの？ 私はそつと横になっている人に近寄ってゆく。

すると『トゥルルル！』といきなりダイニングテーブルの上に置いてある携帯が鳴った。

携帯電話はどう見ても行幸みゆきの物だ。見覚えがある。

私はそつと着信名を確認した。するとそこには『すみれ』と表示されている。

すみれ？ すみれって女性なのかな？ もしかして行幸みゆきに彼女！？

いや…それは無いよね…でもどうしよう…

私がそんな事を考えていると電話は切れてしまった。

あら、切れちゃった…まあ女性からの電話に私が出るのもね…うん…

私は何気なくダイニングの横のベットとパソコンの置いてある部屋の方を向く。

良く見ればパソコンの横のカーペットのカップラーメンが散乱している。

そしてその横には人が横になっている。

全身を見て気が付いた。先ほどまで行幸だと思っていたけどよく見れば行幸じゃない！

え？な、何！？

そつと体を屈めてその横になっている人の顔を確認すると女性だという事が解った。

お、女！？って！何で女が行幸の部屋にいるのよ！？

私は大パニックに陥った。

落ち着いて…幸桜…落ち着くのよ…一応あれだよ、行幸だって男だし…恋人の一人や二人くらい…

………

無い…考えられない…あんなパソコンオタクの行幸を彼氏にしたい！とか思う女なんて余程の物好き以外にいるはずない！

待ってよ…じゃあこの女…もしかして物好き女なのかな…

ちよつと待ってよ…もしかして拉致したとか！？パソコンゲームの影響を受けてついに犯罪者に！？行幸が女の子を拉致して監禁！？

そしてこの子に言うの『おまえは今日から俺の奴隷だ、食事はカップラーメンだ』

なんていやらしい！やっぱ一人暮らしなんてするにはこういう

理由があつたのね！

…っていくら何でもそんな事はしないよね…

だいたい行幸^{みゆき}が部屋に居ない今の状況ならこんなボロアパートから何時でも逃げ出せるし、今も何か特別な事をされている様子も無いし。

きっとパソコンの電源はついているから、この女性が遊んでいる間に寝ちゃったのかな…

っていう事はこの女もゲームオタクなの！？それはありえるかも。類は友を呼ぶって言うしね…まあ起きたら解るか…

それにしても行幸^{みゆき}は何処にいったのかな…

『トウルルル！』

「うわぁ！」

びっくりした…また電話だ…

私が考え込んでいるとまた行幸^{みゆき}の携帯電話が鳴った。

今度は誰！？さっきの女？私は再び携帯電話の着信名を覗き込む。するとそこには『店長^{みゆき}』と書いてあった。

店長！？…行幸^{みゆき}のアルバイト先の店長？これってもしかして重要な電話なのかな！？

で、出るべきかな…私は妹だし…出ても別におかしくないよね…

よし…行幸^{みゆき}が留守だし…出てみよう…

「あ、はい、もしもし？」

「もしもし？俺だ、今日の件だけど」

電話の相手は男性だ。声は低く大人っぽい。やっぱりアルバイト先の店長かな？

でも今日の件って何だろう？待って…もしかすると店長というのは偽名か何かで、実は普通のお友達とか？うーん…わかんないから聞いてみようかな。

「え？えっと…あの？どちら様でしょうか？」

私がそう質問をすると電話の向こうでガサガサと音が聞こえる。この音は携帯電話を弄ってるのかな？ってもしかして私が出たから誰だろう！？とかそういう事になっちゃってるのか！？おかしいな？妹だってわかんないのかな？

……

あ！しまった！妹だって言っていない！言わなきゃ！

「え、えっと、また電話します…」

ガチャ！ツーツー

「え？あ！もしもし！もしもしー」

私が妹だと言う前に電話は切れてしまった…

うーん…切れちゃったどうしよう…またかかって来るかな…それとも行幸みゆきが戻ってくるのが先かな…

そして私はこの状態でどうすればいいの？

うーん…

私は部屋の横になっみゆきている女性を見ながらしばし考えた。

この女性を起こして行幸みゆきの行き先を聞くのはどうかな？

そうね考えてみよう…例えばここで女性を起こす…すると女性は私を見てびっくりする。

私は妹なの！って言う…女性は信じてくれない！

行幸みゆきは戻って来ない。そして修羅場と化す！

あう…ダメな方向の想像をしてしまった…

そ、そうよね…例えば私が彼氏のアパートで寝てたとして、いきなり私が女に起こされたらその女が私は貴方の彼の妹なのよって言った。

すぐには信じないよね。そうだね……って私には彼氏なんていないじゃん！

………

自分に突っ込んでどうするのよ…なんか虚しいよ…

ちよ…ちよつと落ち着こうね私…ほら、深呼吸して…

『トウルルル！』

「うわぁ！」

またびっくりした…電話だ…店長かな…

私は着信名を確認する。するとそこには『すみれ』と表示されている。

さつき電話を掛けてきた女！また掛けてきたのね…でもここは私が出るとダメだよ。

きつとすつごく勘違いされる…そうよ！出たらダメ！うん！

『トウルルル！プチ…』

電話が切れた。私は携帯を覗き込むとどうやら留守電話になったようだ。

これでいいんだ…あーもう！早く行幸^{みゆき}戻ってきてよ！

はあ…溜息が出る…

行幸^{みゆき}の様子を伺いに来ただけなのに、何でこんな変な事に巻き込まれないといけないのよ…後でとっちめてやるから！ふう…

それにしても…よく寝てるわね…こんな汚い部屋でよく眠れるわ…
…関心する…

『トウルルルル!』

「うわぁ!」

またまたびっくりした私って何…

よし…今度こそ店長さんかな…

着信名を確認する。すると『店長』と出ている。店長だ!
よし!ちゃんと妹です!って言わないと!

「もしもし!高坂です!」

私は電話に出ると真っ先に名前を名乗った。

「え?高坂?それって行幸みゆきさんの携帯ですか?」

先ほどと同じ声だ。行幸みゆきの携帯電話なのか確認してきてる。

「はい、そうです」

私は即答でそう答えた。だってこれは行幸みゆきの携帯だし。

「あの…どちら様でしょう?」

今度は誰かを聞かれた。そっか!高坂とは出たけど姉とも妹ともまだ言っていないや。

「私、高坂行幸こうさかみゆきの妹です」

「え？妹さんですか？あ、あの…行幸は？」
みゆき

「えっと…今は外出中です。何か用事でも？」

「あ、大丈夫です。また電話しますので…それではまた」

あれ？用事は何？何だったの？

「あ、えっと…」

店長からの電話は切れた。うーん…ちゃんと妹だとは伝えたい…
これでよかったのかな…

携帯電話をダイニングテーブルに置くと私はパソコンのある部屋
へ顔を向けた。

私の視界の中には部屋で寝ている女性…そうだ…まだこっちがあ
ったんだよね…

どうしようかな…私はこれからどうしようかを考えた。

そうだ！ここで私がこのまま帰るっていうのはどうかな？

形跡を残さないようにすればいいじゃないのよ！

………

って！さっき思いっきり行幸みゆきの携帯に出ちゃったじゃん！

あーもう…私がここに来たのってバレバレ…

もうこうなったらやっぱり行幸みゆきが戻って来るのを待つしかないか
な…

私はふうと小さく溜息をつくときダイニングチェアに腰掛けた。
そして部屋で横になっている女性をよく観察してみる。

この女…よく見ればスタイルいいじゃないの？胸も大きいし…なんかわいいし…

女の私が『ムラッ』ときちゃいそうなオーラが出てるし…

…え？いや！私はGL系の趣味はございませんよ！って誰に弁解してるのよ私…

でも何でこんなかわいい子が^{みゆき}行幸の部屋に？まさか本当に彼女なのかな…

この子もやっぱりパソコンゲームオタクなのかな？それで^{みゆき}行幸と知り合って同性する仲にまでなって…

世の中には私が理解出来ないような出来事って結構あるかもしれないし…ありえる？

って事は！？この子と^{みゆき}行幸は毎夜のようにあんな事やそんな事や…まさか、あんなすつごい事までしてるの！？

イヤラシイ！もう…なによ…私の知らない所で^{みゆき}行幸は大人になったって事？

か、帰ろう！もう帰ろう！ここにいちや駄目だ！

その瞬間！リビングに横になっていた女性がいきなり痙攣を起したかのように振るえだした。

「え！？えええ！？」

そして仰向けになり目をカッと開いたかと思うと、今度は死んだかのように目から生気が無くなってゆく。

私は慌てて椅子から立ち上がった。

何よ！？もしかして心臓発作とか？この子って死んじゃうの？やだよ！目の前で人が死ぬ所を見るなんてやだ！

私の心臓は動揺してドキドキと鼓動している。そして手が震えだ

した。

やだ：どうしよう：

そうだ、きゅ、救急車？呼ばなきゃ！

私は慌てて行幸みゆきの携帯を手にとった。

その時、女性が一瞬だがぴくりと動いた。そして『うう：』と声を出す。

え？動いた！？声を出した！？まだ生きてる！？

私は携帯を一度ダイニングテーブルの上に戻すと急いで女性の状態を確認する為に女性の側まで寄った。そして私はしゃがみ込み女性に出を延ばす。

「心臓は動いてるのかな：」

そして私が女性に触れたその瞬間だった！私の体に電撃のようなものが走った！

ビリビリと凄まじい痛みが私を襲う！

「な、何よこれ！痛いよ！痛い痛い！」

動けなくなる程に強いその痛みと衝撃は私から意識を奪い取ってゆく。

やだ！？こんな所で感電とか？私、まだ死にたくないよ：

助けて：お母さん：お父さん：お兄ちゃん：

私の視界はぼやけてゆき、そして頭の中も真っ白になった：

☆☆☆☆☆☆

行幸^{みゆき}のターン！

「うーん…」

俺は意識を取り戻した。少し硬い床に横になっているのが背中から伝わる感触でわかった。

部屋の中なのかな？

俺はゆっくりと目を開いた。そして倒れたまま周囲を見渡す。すると俺の視界には天井まで二十メートルはあろうか大きな空間が広がっている…

え？何だここは？俺は確か部屋の中で倒れたはずだぞ？

俺は慌てて起き上がり周囲を確認する。

大きな石造りの建物：赤い絨毯^{じゅうたん}の敷き詰められている床。ここは奥行きのある大きな建造物の中ようだな…

「何だここは？」

俺は数歩前へと前進する。すると着ている服に違和感を感じた。俺は慌てて自分の格好を確認してみる。すると自分の格好が部屋の居た時とは違う事に気が付いた。

これって…俺が昼間に着ていたメイド服じゃないのか？

見覚えのある色彩、そしてデザイン…そしてひらひら…これは昼間に俺が着せられていたメイド服に間違いない。

待て…おい…なんで俺の格好がメイド服なんだよ！

何だ？俺はどうなったんだ？ここは何処なんだ？おいおい…

俺は気を失って気が付くと俺は石造りの巨大な建物の中にメイド服姿で放置されていた。

一瞬夢かと思ったが、凄まじく鮮明な周囲の景色や服のリアルな感覚からすると夢とも思えない。

俺が気を失った後に誰かがここに運んできたというのか？

そんな馬鹿な：どうやってこんな場所に？俺の知る限りでは俺の住んでるアパートの近くにはこんな建物は無い。もしかしてこれは映画のセットか何かなのか？

まさかな：頭の中を疑問符が埋め尽くす。

とりあえず探索してみるか。

俺はゆっくりと赤い絨毯じゅうたんの上を歩き出す。

ふわりふわりと俺の足型で凹む赤い絨毯じゅうたんはいかにも高級だぞとアピールしているようにも感じる。

「誰か居ないのかよ！」

俺は大声で叫んでみた。しかし返事などあるはずも無い。
と思っっていたら！

「はい！居ます！ちょっと待ってて下さい！」

何処からともなく大人びた女性の声が聞こえた。

え？誰かいるのか？

俺は取り合えずその場でしばらく待ってみる事にした。
そしてゆっくりと周囲を見渡す。

すると何処からともなく「きゃああ！」という悲鳴が聞こえた。
先ほどとは違う子供っぽい女性の声だ。

俺は周囲を確認した。前も後ろも右も左も人の気配などまったく
ない。

すると…ヒューン！という空気を切る音が真上から聞こえる！

俺は慌てて上を向くと…上から凄い勢いで何かが落ちてきている！

「うわあああああ！」

俺は慌ててその場からダッシュで離れた！

それとほぼ同時に『ズドン！』という激しい音がしたかと思う
と、先程俺が居た場所に女性が落ちてきて床に叩きつけられた。

落ちてきた女性はまったく動かない。

「おーい…生きてますか？」

俺はゆっくりと女性に近寄る。

女性はうつ伏せで倒れており顔は確認出来ないが、銀色の長い髪
で魔法使いの様な青ローブを身に纏っているのだけは解った。

よく見れば体が小さい？体つきから見るとどうやら子供のような
感じもする。

「ちょっと？死んじゃった？」

とは言っても、傍から見たただけでは外傷は見えないし、出血して
いるとか腕が曲がっているとかそういうった外形変化もみられない。

しかし動かないのだけは確かだ。俺は女性の背中を恐る恐る触っ
てみた。

『ぷにゅ』つとした柔らかい感触…そして横によるととても甘い香
りがした。

女性という事は間違いない様子だ。しかし動かないな：

もう一度そっと触ってみる。やはり動かない：

よし、今度はすこし強めに。しかし動かない。まるで屍の様だ：やっぱ死んだのか？

いきなり目の前に女が落ちてきて動かないとか：俺はどうすればいいんだよ：

俺は女性が落下してきた天井を見上げて見た。

何度見てもすごく高い天井だ。その一番高い天井部分に小さな窓らしきものが見えた。

さっきはあんな窓なかったような：まさかあそこから落ちたのか？もしそうだとすると助かるはずねーよな：

その時、俺の両胸が勢いよく掴まれた！

俺が慌てて正面を見ると目の前には先ほど倒れていたはずの女性というか子供が！？

「うわああああ！」

俺は思わず驚いてその場にへたりと座り込んだ。

その女の子はニヤリと不気味な笑みを浮かべると俺の左頬に右手を伸ばす。

俺の左頬に一瞬ひやりとした感触が伝わる。

な、何なんだこつは！？

そしてその女の子はゆっくりと口を開いた。

第十四話【俺の妹のターン!?!って何で妹が登場するんだ】（後書き）

後書き人物紹介!?

高坂幸桜【こうさかこはる】

年齢十八歳

髪の色 黒（肩にかからない程度・ストレート）

身長161センチ 体重52キロ B79 W62 H???

スリーサイズまではほぼ公開出来るこの小説では珍しいキャラ

某県立高校の三年生で受験を控えており現在目下勉強中。

小説にも書いてあるが、名前にコンプレックスを抱いている。

兄である行幸みゆきの事は行幸みゆきと呼び捨て。行幸みゆきも幸桜こはると呼び捨てにしている。

兄弟の関係は決して仲が悪いという事で無いが、行幸みゆきがパソコンに没頭し始めてから幸桜こはるの態度が変化した。

行幸みゆきは妹に嫌われたと思っていた様子だが、幸桜こはるにしてみれば行幸みゆきは憧れの兄であった（勉学も結構昔は出来た）。しかしパソコンという機械に兄を取られてしまいかかなり怒っている。結局は兄である行幸みゆきの予想を反して、兄が大好きな妹である。

何をするにも考えて行動をするが、その考えた結果が必ずしも正しいという事は無い。間違ってしまうとか考えすぎとか日常茶飯事である。

現在の目標は行幸みゆきを自宅に連れ戻す事とパソコンを辞めさせる事。

第十五話【俺の知らない非現実的な世界】

「そんなに驚くな。僕は化け物じゃないから」

女の子はそう言って冷たい笑みを浮かべ俺を見た。

女の子の身長は145センチくらいで、胸はぺたんこ。顔の幼さからして十二歳か十三歳くらいに見える。声はアニメいうロリ系の高く可愛い声で『僕』という一人称がとても似合っていない。

見た目はとても日本人では無いが日本語を普通に話している：

それにしても、先ほどの悲鳴の声と似ている。やっぱりさっきの悲鳴はこの子のものだったのだろうか？

というか！何であそこから落ちてきたのに生きてるんだ！？普通は死ぬだろ：

俺は再び天井を見上げた。

「あれ？何を上なんて見てるんだ？あ、そっか、何で僕が生きてるのかって思ってるのか？」

女の子はそう言う俺の頬から添えていた手を離れた。そして腕を組んだ。

「あのさ、正直に言うとなんて痛かったんだよね。僕の意識が飛ぶくらいに。でもまあこの世界では死ぬという設定が無いから死ななかったんだけどね。でも痛かったんだぞ？」

女の子は腕を組んだまま無い胸を張ってそう言った。

それも訳の解らない事を：この世界とか、設定とか、死なないとか？何なんだ？

そういえば今こいつは『僕』とか言ってるよな：もしかしてこい

つは男なのか？

俺はそんな疑問を抱いてジロジロと女の子の全身を見る。しかしどう見ても女にしか見えない…

もしかして、こいつも体だけ女とか？俺もこんな格好で中身は男だしな。

俺がそんな事を考えていると女の子が俺の名前を呼んだ。

「高坂行幸」
こうさかみゆき

突然名前を呼ばれて俺は焦った。

こいつ俺の名前を知ってる！？何でだ？教えてもないの！？

「そんなに驚くなよ」

女の子は俺の周囲をくると一廻りすると俺の方を横目で見た。

「ふーん…元は男の癖にかわいいじゃないかよ…それにムカつくほど大きい胸だし…お姉えもこんなかわいい女にしなきゃいいのに。ブスでいいんだよブスで」

女の子はすぐ不満そうな顔だ。

今この女の子が言った言葉は俺の頭に引っかかる。

『お姉えもこんなかわいい女にしなきゃいいのに』？って…

この女の子は俺を女にした奴と関係あるのか？そうなのか？

「お、おい…お前、もしかして俺を女にした奴を知ってるのか？」

俺は座り込んだまま女の子にそう聞いた。

「え？何の事かな？僕は何も言ってないよ？」

女の子は明後日の方向を見てそう言った。

「誤魔化すなよ。言っただろ？俺の質問にちゃんと答えろよ」

俺が問い詰めると女の子の顔はかなり不機嫌な表情になる。

「何？何で僕がお前にそんな事を教えないといけない訳？」

「俺も好きでこんな姿をしてる訳じゃないんだ！お前は俺が元は男だったって知ってるんだろ？という事は他にも何か知ってるんだろ？教えてくれよ。ここは何処なんだよ？お前は誰なんだよ？俺はどうやったら男に戻れるんだよ」

目の前で女の子の頬がひくひくと痙攣しだした。そして顔がだんだんと真っ赤になってゆく。

「煩いな！答えてやるよ！まず、ここは魔法で作られた世界！そしてこう見えても僕は女！男に戻る方法は別に人に聞け！」

何だこいつ…何でキレてるんだ？最悪な性格だな…

しかし、良く見ればこいつ怒った顔が妙に可愛い。結構アニメ顔だし、銀色の髪だし、目もパッチリと大きいし、見た目は本当にアニメキャラだ。これで胸があって大人しかったら完璧なのにな。

そう思いながら俺は無意識にじっと女の子の胸を見た。

「おい！お前！何で僕の胸を見てるんだよ…無いからだろ…どうせお前と違って僕の胸はぺたんこだよ！でもお前みたいに饅頭を入れたような無駄にデカイ胸はきつとすぐに垂れるんだからな！」

何でまた逆切れするんだよ…こいつマジで性格悪いな。

「待て！何でお前が切れてるんだよ。俺はお前の胸がどうこうって言っていないだろ？」

「煩い！もう僕は怒ったぞ」

いや待て…だから何で怒るんだ…

「まあ待て、冷静になれ。可愛いのに女の子は怒っちゃだめなんだぞ」

俺がそう言うとき女の子の顔は更に真っ赤になる。

「か、可愛い女の子とか馬鹿にしゃがって！」

女の子はそう言うといきなり右手を高々と上げた。

「風の精霊よ！僕に力を貸して！」

「おい、馬鹿にしてないだろ？っていうか精霊って何だよ？」

気が付くと俺の周りの空気が序所に俺に向かって動き始めているじゃないか。

押し返せない程に重いその空気は俺の自由を奪った。

そしてその空気に持ち上げられる様に、俺の体はゆっくりと空中へ浮かんでいく。

「ちょ、ちょっと待った！何だこれは！？待て待て！俺は何も悪い事はしてないだろ！」

大声でそう言うとなりの子は俺に向かって怒鳴った。

「煩い！黙れ！」

「え…いや…マジで何で？」

「よし！僕を馬鹿にしたお仕置きだ！」

「ま、待った！だからお仕置きして何だよ！まったく馬鹿にしてないだろ！」

女の子は右手を自分の頭の上でぐるりと時計回りに回しだす。

「いけえええ！すくりゅううううどらばああああ！」

女の子は先ほどとは打って変わり楽しそうに、まるで格闘ゲームの技を出すかのように言葉を発した。

するとその瞬間に俺の体はまるでドリルの如く勢いよく横回転しながら一気に上昇してゆく！

「ひゃあああ！」

キュウウウウン！ピタ！

天井ぎりぎりの所で俺の体はぴたりと止まった。

自分の額を冷や汗が流れるのがわかる。危なかった…こんなの直撃したら死ぬ…

っていうか、何だ？何なんだよ！これって普通じゃないだろ！あいつオカシイだろ！？

って言ってる場合じゃないな…とりあえずここから降りなければ…

「お、おーい…あの…降ろしてもらえませんか？」

俺は大きな声でそう言った。

すると下から先程の女の子とは違う女性の声が聞こえる。

しかし俺は体が完全に硬直していて様子を伺う事が出来ない。

「こら！シャルテ！何をやってるのよ！」

この声は…最初に返事をしてくれたあの女性の声？

「うわ！リリア姉え！」

あの女の子はシャルテっていう名前なのか。さっきの大人びた声の女性がリリアか…しかし、どっかで聞いたような名前だな…っていうか俺の声は届いてないのかよ…

「ちょっとシャルテ！何でみゆき君があんな所に居るの？」

どうやら俺の話題のようだ！という事は床に降りれるのか？

「だって！あいつ僕がペチャパイとかチビとかブスとか言ったんだよ？」

な、何を言ってるんだあいつは！可愛いって言ったんだぞ？チビもブスも言ってるねー！

「こら！おいシャルテっていうの！俺はまったくもって一言もそんな事は言っていないだろ！」

俺は硬直したまま大声で怒鳴った。

「お前、さっき僕に可愛いつて言っただろ！」

「それは褒め言葉だろ！」

「嘘つけ！可愛いとか思ってもないのに可愛いとか言うな！」

すっげー素直じゃないっていうか…もう何って言えばいいのか、言葉にならない…

「シャルテ、とにかく降ろしてあげなさい！」

リリアという女性が慌てた調子でそう言う。

「はいはい、解ったよ…降ろせばいいんだろ…せいの！ほい！」

その瞬間！俺の呪縛が解けた！

やった！硬直が解けたぞ！ってえ？何だ？体が…

その後…

俺の体でニュートンの法則が忠実に実行された。

万有引力というのはこういう事なんだ…勉強になるね！

ってそうじゃないだろ！

空中で制御も効かず勢い良く落ちてゆく俺！そして見る見ると
近寄る真っ赤な絨毯！

このままじゃ俺の血で真っ赤な絨毯を更に真っ赤に染める事になる
んじゃないかああ！

「うわああ！助けてええ！」

俺はじたばたと体を動かしながら叫んだ！

お、落ち着け…

考えてみる、どんなゲームでもそうじゃないか、主人公がピンチに陥った時はギリギリで誰かが助けてくれるんだ。

そして主人公は最終的には助かる！だから誰かがきつと助けてくれ…

その瞬間！俺は凄まじい衝撃に襲われて気を失った。

☆☆☆☆☆☆

「うーん…」

俺は意識を取り戻した。少し硬い床に横になっているのが背中から伝わる感触でわかった。

俺はゆっくりと目を開いた。そして倒れたまま周囲を見渡す。すると俺の視界には天井まで二十メートルはあろうか大きな空間が広がっている…

石造りの建物…赤い絨毯じゅうたんの敷き詰められた床。

ここは何処だ？俺は確か空中から落下して床に叩きつけられたよ
うな気が…

どう見ても見覚えのある空間だし…
さつきと同じ場所じゃないかよ！？俺は慌てて立ち上がった。

「おい！誰か居ないのかよ！」

俺は大声で叫んだ。

「はい！居ます！ちょっと待ってて！」

何処からともなく女性の声が聞こえる。

っていうかさ…これってさっきと同じパターンじゃないのか…あれ？さっき俺は確か空中から落下して床に叩きつけられて…さっきのは夢か何かだったのか？それともデジャブ！？

そういえば服装は？やっぱりさっきの夢と同じメイド服のままなのか？

俺は慌てて自分の格好を確認した。

確認すると…メイド服のままだった…しかし！何故かメイド服に真っ赤な血が大量についている！

「な、何じゃこりゃあああ！」

俺は思わず叫んでしまった。

これって血だよな？、何で俺が血まみれのメイド服を着てるんだ！？

よく見れば足元の真っ赤な絨毯が更に血で真っ赤になっているじゃないかよ。

という事はさっきのは夢じゃなかったのか！？

その時、俺の目の前にはさっきの女の子とは違う女性が…

女性は銀髪の腰まであるロングヘアで瞳は透き通るような青色。

身長は170センチくらいだろうか？スタイルも抜群でまるでゲームのヒロインか女神かと思う程に綺麗な女性だ。

誰だろう？もしかして…この女性がさっきの声の主なのか？

「あ、あの…貴方は何方でしょう？」

俺がそう聞くと女性はすぐに返事をしてくれた。

「私の名前はリリアです」

聞き覚えのある名前…確かさっき空中にいた時に…

「リリアさん、俺はどうしてここに居るんですか？そして何で血まみれなんですか！？」

リリアは困惑の表情を浮かべた。

「すみません…ちょっとした手違いでみゆきさんは先ほど普通だと死ぬ程のダメージを体に受けてしまいました…」

「え？普通だと死ぬ程のダメージって何だよ」

「はい…たぶん記憶にあるかと思うのですが、先ほどみゆきさんは空中から落下して床に激突してしまって…それでみゆきさんは見るもグロテスクにグチャグチャになってしまい…思念まで消えてしまいいそうに…」

女性はそう言うと言と苦笑を浮かべている。

「え！？ちょっと待て！グチャグチャって何だよ！？思念まで消えてしまいそうって何だよ？」

俺がそう質問すると女性は申し訳無さそうな表情で俺から視線を外した。

「お、おい！何だその態度は！？何があるんだよ？俺はもしかして死んだのか？今の俺はゾンビなのか？それとも幽霊なのか！？」

俺は女性に向かって叫んだ。
すると女性は視線をはずしたまま俺に向かって話す。

「い、いえ…大丈夫ですよ。私の魔法で思念の再構成をして無事に元の思念の状態には戻りました。ですが…」

「思念とか再構築とか元の状態とか訳わかんねーけどまだ何かあるのかよ」

「ええと…バストサイズを間違って三センチ小さく構築しちゃって…」

「へ?」

俺は自分の胸をメイド服の上からじっと見た。
正直どこが変化しているのかまったく解らない。

「ごめんなさいね…」

「え…いや…胸とかそんなのどうでもいいんだけど…」

「大丈夫です！現実世界の貴方の体のバストサイズは変わってません！」

現実の世界？何だそれ…ここは現実世界じゃない？っていう事は何なんだ？

これは説明をちゃんとして貰わないとな…

「あの…リリアさん。まずここは何処なのか。貴方は何者なのか。」

さっきの俺を酷い目に遭わせた女の子は誰なのか。俺が男に戻るにはどうすればいいのか。そこらを教えて貰えませんか？」

女性は俺の質問を受けるとキョロキョロと周囲を確認する。そして話を始めた。

「えっと…質問に答えますね…まずここは…私の作った魔法世界です。今の貴方は思念体で、本当の肉体は現実世界に、貴方の部屋にいます」

「何だそれ？魔法世界？思念体？」

「うーん…どう言ったらいいのかな…私が作り上げた現実には存在していない夢の世界？のようなものです。思念を具体化する事によって現実世界と同じような感覚で存在、行動が出来る世界です」

「ようするにこれは夢なのか？」

「近いですが、夢では無いです。この世界から出たとしても私も貴方も同じ記憶が残ります」

「じゃあここはリアさんの作った世界って事なのか？仮想の世界？ゲームの世界みたいなもんか？」

「そうですね、ネットゲームは仮想空間で皆と遊び、その空間での出来事を他のプレイヤーと共有しますよね。ここはそれがもつとりアルになったという感じですね。肉体は貴方の部屋にあります、思念はこちらへ完全に移っていますので」

「なるほどな…って言われても信じがたいけどな」

「そうですね、なかなか通常では経験出来ないですね」

リリアという女性は少し落ち着いたのか、緊張した感じがいつの間になくなっていく。

「で？リリアさんは何者なんだ？正直さっきの話もまだ信じれないが、俺は自分の体が女になったという有り得ない事が現実になっている。だから何を言っても驚かない」

リリアはおどおどとして少し考えると、突然真面目な表情で俺の目を見て話を始めた。

「ご迷惑をかけたのでお話します…私は…」

「お姉え！ちょっと待った！」

いきなり甲高い声が建物内に響く。

気が付くとリリアの目の前に先程の女の子が立っている！？

「シャ、シャルテ！？」

リリアは驚いた表情でシャルテを見ている。

そしてシャルテはむっとした表情でリリアを睨んだ。

並んでみればシャルテとか言う女の子はリリアにすごく似ている。二人が姉妹というのは本当みたいだな。

「お姉え！何で正直に話そうとする訳？今回の目的はそんな事じゃ無いだろ？」

「え？ですが…もうあまり隠すのも悪いかと…」

「何を言ってるんだ？今話たら折角の作戦が台無しだろ！」

二人が言い合いになっている…それも妹の方が強い…

って何の会話をしているんだこの二人は？作戦とか台無しとか。俺に関わる事には違いないだろうが。

「おい！みゆき！」

シャルテは突然俺の方を向くといきなり俺を呼び捨てにした。

「な？何だよ」

「僕の名前はシャルテだ！こっちは僕の姉でリリア！ここはリリアお姉えの作った世界。あんたはさっきグチャグチャになった！以上！」

女の子はそう言う『ふん！』と鼻息を噴出し腕を組んだ。

本当に可愛い容姿なのにこの最悪な行動態度と話方は一体何なんだ…

お姉ちゃんに似て無さ過ぎるだろ！見た目以外のすべてが！

補足！年齢差を考えてもバストサイズはまったく似てない！リリアは結構ありそうだがシャルテは成長しそうに見えない。

って何を馬鹿っぽい事を考えてるんだ…そうだよ！

「おい！男に戻る方法を言っていないぞ！」

「煩い！今から説明するんだよ！ちゃんと聞け！」

な、何だこのガキは！さっき以上！って言っただろうが！
あームカツク！こういう奴はいくら可愛くても大嫌いだ！

「は、早く話せよ！」

「ふん！じゃあ話てやる！リリアがな！」

「ふ」

お前が話すんじゃないのかよ！

「お姉え、解ってる？余計な事を言っちゃだめだからな」

シャルテはリリアにそう言うのと、リリアの後ろへと下がった。

「えっと…それでは私から…みゆきさんが男に戻る為にやらなければいけない事をご説明致し…」

ジジジジジ！

リリアが話しをしている途中でいきなり空中から何か電気の感電するような音が聞こえた。

その瞬間！ドガン！ガラガラ！

激しい爆発音が聞こえたかと思うと辺りは霧か煙か解らないが、突然真っ白になった。

「え！？な、何だ！？」

「ちょ、ちょっと！リリア姉え！誰か魔力転送してきたぞ！もしかしてみゆきの体に掛かっている転送魔法ってそのまんまなのか！？」

「あ！忘れてました！」

「ば、馬鹿！それじゃダメじゃん！」

真っ白な霧の中で二人の言い合いが聞こえる。

しかし・・・何が起こったんだ？転送魔法？

俺はゆっくりと霧の中を歩いてみる。

すると真っ赤な絨毯じゅうたんの上に誰かが倒れていた。

薄っすらと見えるメイド服：女の子か？誰だろう：

さっきの二人の話からすると俺の部屋から来た人間って事になるのか？

それにしても何故メイド服なんだよ：あの二人の趣味か？

俺はその誰かを確認しようとゆっくり屈み始めた。

すると！その瞬間！周囲の白い霧のようなものが一気に晴れる！

そして：俺の目の前の絨毯の上にはメイド服姿の良く知っている人物が気を失っていた：

「こ、幸桜こはる！？」

第十五話【俺の知らない非現実的な世界】（後書き）

後書き人物紹介！？

シャルテ 女の子 一人称は『僕』で口調も男っぽい

年齢不詳 見た目は十二か十三歳

髪の色 銀色で腰まであるストレートヘア（現実世界ではツインテール）

身長 145センチ 体重 35キロ 胸なし？

見た目はおもいつきり異国人っぽい、行幸みゆきに対して日本語を普通に話してきた。

二十メートルの高さから落下しても大丈夫な程に頑丈な思念体を構成出来る能力者。（行幸みゆきはぐちゃぐちゃになった…）

魔法も使えるので人間じゃないと確定。

見た目の可愛さとは裏腹に男っぽさ全開で生意気な小娘。

男に褒められる免疫が無い為にちよとした行幸言動みゆきに顔が真っ赤。（女の格好でも行幸みゆきは男で認識している）

リリアとシャルテは姉妹で今後？行幸みゆきと重要な部分で関わりあうと思います。この子を見た目や年齢以上に考えはしっかりしており、リリアが素直な分シャルテが助言をしてリリアを制御？しています。やはり欠点は我侭。

第十六話【俺の妹の困惑】

今、俺の目の前にはメイド服姿の幸桜こはるが気を失って倒れている。

「何でここに幸桜こはるが居るんだよ！」

俺は両手をぎゅっと握り締め、怒鳴りながらリリアとシャルテのいる方へ振り返った。

無意識に両手はプルプルと震えている。

リリアを見ると幸桜こはるが現れて驚いたのか意気消沈した表情になっている。

シャルテは動揺する事なくリリアを心配そうに見ている。

こいつらにとって幸桜こはるがこの世界に現れた事は想定外だったのだろう。

しかし、今俺の目の前に現れたのは現実だ。

「おい、答えろよ：どうしてここに幸桜こはるが居るんだ！」

再び怒鳴ったがリリアはとてもじゃないが答えられそうな状態ではない。

それを察してか、シャルテがムツした表情で話を始めた。

「リリアお姉えは別にお前の妹を呼びたくって呼んだんじゃないんだよ！これは一種の事故なんだ。そんなに責めるような口調でお姉えを怒鳴るな！」

強い口調にもかかわらずシャルテの言葉に刺々しさは感じられない。

どうやらコイツもトンでもない事になったと思ってるのだろうか。

「事故？事故で済む問題なのか？いいのかよ？この世界に俺以外の人間を連れ込んでも。そしてお前らの存在がばれても」

シャルテは言葉に詰まる。

「こ……この世界を消失させます……」

リリアの力の無い震えるような声が聞こえた。

その言葉を聞いたシャルテは慌てた表情でリリアの方を振り返る。

「な、何を言ってるんだよ！この世界を消失させるって！？じゃあ、今までの苦労はどうなるんだよ？これでこいつに用件を伝えれば全て終わるんだぞ？」

「シャルテ……それは私が人間界に行って改めてみゆきさんにお話をすればいいだけだから……」

「お姉え！何を言ってるんだよ！約束したじゃないか、人間界に降りるのはあの一度きりだって！あの時だって僕は反対したんだぞ！僕たちが人間に姿を見せちゃ駄目なんだぞ！今回のこれだってそうだよ！解ってるの？ねえ！お姉え！僕たちは……」

シャルテはそこで急に言葉を止め、俺の方をチラリと見た。

「……もういいよ、この話はここでは止めとく」

シャルテはそう言うと言の途中で会話を完全に止めた。

人間界に降りる？何だそれは？こいつらの正体って何なんだ？

「おい！お前らは何者なんだよ？人間界に降りる？姿を見せる事が駄目？どういう事なんだよ！どうして俺が女にされたのか含めてちゃんと説明しろよ！」

「すみませんみゆきさん……その問いには今はお答え出来ません……この続きはまた後日」

リリアはそう言う俺には理解出来ない呪文のような言葉を唱え始める。

すると急に石造りの建物も赤い絨毯が見えなくなり、目の前は真っ暗になった。

いや、リリアやシャルテ、そして幸桜こはるの姿が見えているという事は暗くなったのでは無く、全ての物が消えたという事なのか？

「おい！待てよ！これはどういう事なんだよ？結局この場所に俺を呼んだのどういう意味があったんだよ！俺や幸桜こはるはどうなるんだよ！」

しかしリリアとシャルテは無言のまま俺の目の前から姿を消した。その瞬間、周囲が明るくなり俺の意識は飛んだ。

☆☆☆☆

「ここか……行幸みゆきのアパートは……」

店長はそう言う腕組みをして目の前に聳え立つアパートを見上げる。

という程立派なアパートじゃないか。

というか……本気でボロアパートだった……

「よし、店長、行幸みゆきの部屋に突入するよ」

「おう……」

私と店長は行幸みゆきの部屋へ向かう為にアパートの金属製の階段を上る。

緊張する……初めての行幸みゆきの部屋……どんな部屋なんだろう……あれ？そう言えば……私はふとある事を思いついた。

「ねえ、店長」

「何だ？」

「行幸みゆきの部屋なんだけど……」

「ん？部屋がどうした？部屋番号ならばっちりだぞ？」

「もしも鍵がかかってたらどうするの？」

「え？か、鍵？」

「そう、鍵」

店長は顔を引きつらせて無言になった。

どうやら鍵がかかっていたらという事はまったく考えていなかった様子ね。

私も慌てて来たからそこはまったく考えてなかった……

ここはどうみても管理人も居ないような小さいアパートだし、鍵

をぶち破って入るのってきつとここの住人に通報されるレベルだし、
どうしよう……

「だ、大丈夫だ！多分かかってない！」

店長は何を根拠にしてか、いきなりそう言った。

「何でそう思うの？」

店長はニヤリと笑みを浮かべると自信ありげに言う。

「それは……男の感だ！」

私は思わず頭を抱える。

駄目だ……店長の感とか、かなり信用出来ない……

「店長の感なんてあてになるはずないでしょ……普通だったら鍵を
閉めるよ……あーあ……どうしようかな……ここまで来たのに鍵が閉ま
ってたら」

「^{すみれ}堇、そう深く考えるな！なせば成る！」

「いや、考えるべきでしょ……」

と、無駄な話をしている間に部屋の目の前に到着。
横の小窓からは光が漏れている。どうやら中に行幸か^{みゆき}は解らない
けど、誰かは居る様子ね……

「一応……廻してみるね」

私はゆっくりとドアノブに手を伸ばした。そしてゆっくりと廻してみる……

すると……行幸みゆきの部屋の鍵は私達の予想を良い意味で裏切ってくれた。

『カチャリ』と音をたててドアノブは廻ったのだ。

私はドアノブをゆっくりと元に戻すと一度手を離れた。

「店長、空いてた……」

「お、そうか！それじゃあ突入だ」

店長は嬉しそうな顔をして躊躇も無くドアノブに手を伸ばす。

「ま、待ってよ！いきなり入る気！？せめてノックくらいした方がよくない？」

「ノック？わざわざ？行幸みゆきの部屋なんだぞ？それにこれは緊急事態だろ？もしかすると中に行幸みゆき以外に女が、それも行幸みゆきに携帯に勝手に出るような女がいるかもしれないんだぞ？ノックしてたら逃げられるかもしれないじゃないか」

そうだった……この部屋は行幸みゆき以外の女がいるかもしれない……
……って行幸みゆきって男じゃないのよ！女じゃないよ！

「まってよ店長、行幸みゆきは男だから……」

「あ、ああそっか……でもほら、今は女だし……いいだろ？早く入るぞ」

店長はそう言うのとドアノブを廻し、そしてドアを開けた。

その瞬間、いきなり漂うカップ麺の匂い……

「な、何だ？このカップ麺の匂いは！凄まじいぞ…」

そう言うとき店長は左手で鼻をつまんだ。

私はとりあえずは行幸みゆきを呼んでみる。

「行幸みゆき？いるの？行幸みゆき？」

しかしまったく返事は返って来ない。

「おい堇すみれ、奥の部屋からゲームの音が聞こえるぞ……きっと奥にいるんじゃないか？」

店長はそう言うとき靴を脱いでダイニングキッチンを奥へと進んで行った。

耳を澄ませば確かに行幸みゆきのやり込んでいるMMOの街の音楽が聞こえている。

という事は行幸みゆきは中に居るって事なの？

私も靴を脱いでダイニングに上がる。するとそれと同時に奥から店長の声が聞こえた。

「堇すみれ！はやく来い！」

私は慌てて奥の部屋へと入って行った。

そこには……カップラーメンが散乱していた。

じゃなくって……行幸みゆきが横たわり、そしてその上には被さるように私の知らない女性が倒れている。

二人とも息はしている様だから死んではなさそうだけど……でもこの女性为一体？

「堇^{すみれ}、行幸^{みゆき}の上で倒れているこの女って何だと思う？」

「そんな事、私に聞いても知ってるはずないでしょ！」

本当にこの女性は誰なんだろう……

行幸^{みゆき}の部屋に入っているという事は、どう考えても行幸^{みゆき}の知り合
い？

やっぱり彼女！？そんな話は一度も行幸^{みゆき}から聞いてないし……
じゃあ何？この女性がもしも彼女だとしたら？この女性が私の恋
のライバルになる訳！？

よく見ればまだこの子は高校生位じゃん！何なのよ？行幸^{みゆき}って女
子高生に手を出したの！？好みは年下？

しかも何？行幸^{みゆき}は女になったのにこの子は平気って事？
そんなに信用信頼出来る関係なの！？

「堇^{すみれ}？どうしたんだ？さっきから俺の話を聞いてるか？」

「え？あ……な、何よ？」

「何よって……だからとりあえず行幸^{みゆき}を起そうって言ってるんだよ」

「あ、ああ！そうね、起そうか」

店長と私は被さっている女性をゆっくりと行幸^{みゆき}の上から移動させ、
行幸^{みゆき}を揺さぶり起しにかかった。

「おい、行幸^{みゆき}、おい！起きろ！行幸^{みゆき}」

店長が軽く揺すっていると「うーん」と言う声を出して行幸^{みゆき}が目

を開く。

「おお、みゆき行幸！起きたか！」

私達を見てびっくりしたのか、みゆき行幸はきよとした表情で、何があっただ？と言わんがばかりの表情で私達二人を見ている。

☆☆☆☆

ここは何処だろう……

何も見えない……

俺はどうしたんだろう？

あれ？何だろう……誰かが俺を呼んでる？

「おい、みゆき行幸……」

待ってくれよ、俺はここに居るから……

俺はゆっくりと目を開いた。

「おお、みゆき行幸！起きたか！」

目を開くと視界には店長とすみれ堇の顔が飛び込んできた。

っていうか……何でこの二人がここに！？

あれ？確か……俺はこの部屋で気を失って……それでどうしたんだっけ？

「みゆき行幸？大丈夫なの？ねえ？わかる？私、すみれ堇だよ」

堇^{すみれ}は心配そうに俺を見ている。

思い出せない……俺は何で寝てたんだっけ……

「おい、行幸^{みゆき}、どうなってるんだよ？俺が携帯に電話したらお前じやなくって女が出るし……多分その女の子だと思うが……あとあれだ！堇^{すみれ}が電話すると今度は誰も電話に出ないんだ。だから俺と堇^{すみれ}はお前が心配で様子を見に来た。そうしたら何だ？その女の子と行幸^{みゆき}は一緒になって寝てるし」

え？何？電話した？そうか、俺が気を失っている間に店長と堇^{すみれ}は俺に電話をしてきてたのか？

でもって何だ？その女の子って？

俺はふと横の見た。するとそこには妹の幸桜^{こはる}が横になっているじゃないか！

その瞬間、俺は先ほどこまで起こっていた出来事を一気に思い出した。

「そうだ！リリアは！？シャルテは！？」

「え？な、何？どうしたのよ行幸^{みゆき}？リリアとシャルテって誰？何なの？」

堇は驚いた表情で俺を見ている。

その時、俺の横で気を失っていた幸桜^{こはる}が目を覚ました。

「うーん……」

「こ、幸桜^{こはる}？」

俺は咄嗟に幸桜^{こはる}の名前を口にした。

幸桜は名前を呼ばれたからか俺の方を見る。

「え？な、何！？何があったの？っていう何で人が増えてるの？え？どうなってるの？確か私は体がしびれて……あれ？あれれ？」

幸桜は混乱状態に陥っている。

「おい行幸？この子は何だ？お前の何なんだ？」

店長が幸桜を見ながら聞いてきている。

そうか、店長も堇も幸桜を知らないんだ。
そして幸桜は店長と堇と面識が無いんだ。

「え、あつと……こいつは俺の妹で幸桜って言うんだ」

「え？い、妹！？え？この子は本当に本物の行幸の妹なのか？」

店長と堇は信じられないという表情で幸桜を見ている。
と言うか本物ってどういう事だ？よく意味がわかんねーし。
その幸桜本人は目を点にしてじっと俺を見ている。

「何なの？何を言ってるの！？私は貴方の妹なんかじゃなし！」

そうだ、幸桜は混乱真っ最中というか女になった俺を兄貴だとまだ理解出来てないんだ。

そりゃそうだよな、説明もしてないし、理解出来ないのは当たり前だ……ちゃんと説明しないと。

俺がそう思い説明しようとした時、幸桜がいきなり顔を真っ赤にして話を始めた。

「も、もしかして…貴方…行幸みゆきと既に籍を入れているとか…実は…け、結婚していて…それで私を妹とか言ってるのか…!」

おい待て! どうしてそういう解釈になる!

「馬鹿か! 何で俺がお前に報告も無しで結婚するんだよ! いうか待て! 俺に先に説明させてくれ!」

「え? 説明って何!? 何の説明なの! もしかして行幸みゆきとの関係の話! ? 結婚相手じゃないとすると…友達? 彼女? それとも…もしかして…か、体だけの関係とか…俗に言うセ…セフレなの! ?」

幸桜こはるは茹で上がった蛸のように顔を真っ赤しながらとんでも無い事を言っている!

よく見れば店長や堇すみれまで顔が真っ赤になっている。

っていうか俺もすっげー顔が熱い!

やばい! やばいぞ! ここは俺が行幸みゆきだと早く説明しないと!

「聞け! 幸桜こはる! 俺だ! 今は女の姿だけどお前の兄貴みゆきの行幸なんだよ! 正真正銘のお前の兄貴なんだよ!」

「へ? 嘘…貴方みゆきが行幸?」

「そうだ! 俺みゆきは行幸だ!」

「あの…」

「何だよ…」

「大変申し訳ないのですが、そのようなリァリテイの無い嘘はやめて頂けますでしょうか？私なら大丈夫です！例え貴方がセフレであっても……私は……私は受け入れます……ぐす」

幸桜は目に涙を浮かべた。

「こら待て！俺はマジで行幸なんだって！セフレなんかじゃない！だいたい俺にこんなに可愛いセフレがいるはずないだろ！いたら本気で俺は喜んでる！幸桜ならわかるだろうが！俺はゲームオタクなんだよ！モテナイ男なんだよ！彼女なんて出来ないような男なんだよ！」

モテナイとか彼女なんて出来ないとか自分で言うとなんかすっげー悲しくなるな……

というか何だ、この痛い視線は……

ふと見上げるとそこには蔑んだ目で俺を見る堇が……

「行幸の馬鹿……」

何だ！？なんで堇に俺が馬鹿って言われなきゃいけないんだ！？

「馬鹿って何だよ？何で堇に馬鹿って言われなさいいけないんだ！？」

「鈍感馬鹿だからに決まってるじゃん！」

鈍感馬鹿！？え？よく意味がわかんねえ……

「うぐ……ま……まあいい……良くないけど、いい………というか、堇と店

長も幸桜こはるに俺が行幸みゆきだって言ってくれ」

俺がそう言うのと店長は俺の顔をじっと見た。

「な、何だよ店長？」

「もう一度確認しておきたい事がある」

「確認？って何だ？」

「本当にこの子はお前の妹なのか？」

「何だ？疑ってるのか？こいつは真正正銘の俺の妹の幸桜こはるだ！」

「よし、わかった：」

店長はゆっくりと幸桜こはるの前にしゃがみ込むと、少し店長に怯えている幸桜こはるに向かって笑顔で話しを始めた。

「幸桜こはるちゃんだっけ？大丈夫だ、俺は行幸みゆきの働いているバイト先に店長だ。ほら、この声を覚えてないか？さっき俺と携帯で話をしたじゃないか」

店長の話聞いた幸桜こはるはハッとした表情になった。

「あ！そういえば……この声！あの電話の人！？」

「ははは。覚えててくれてありがとう。でね、行幸みゆきの事なんだけどさ、ここに居る女性……本当に行幸みゆきなんだよ。嘘じゃない、本当に……」

「え？嘘？冗談ですよ？店長さんも行幸と一緒に私をからかってるんでしょ？あれ？本当の行幸は何処なんですか？」

幸桜は辺りをキョロキョロと見渡し始めた。

「幸桜ちゃん……冗談ならいいんだけど……これって冗談じゃないんだよ……行幸は訳あって女の子になっちゃったんだよ……現実なんだ」

幸桜はゆっくりと俺の方を見る。そして二人の視線が合った。
俺は幸桜の目を見ながら小さく頷いた。

「え……嘘……じゃあこの女性が本当に行幸なの？」

真剣に話す店長の言葉と俺の真剣な顔もあって流石の幸桜も少しは理解をした様子だ。しかしその表情はまだ完全には信じきれていないという感じもする。

いや、信じたく無いのかもしれない。

「幸桜ちゃん……私だって信じたくなかったんだよ……行幸がこんな姿になっちゃうなんて……」

堇が震えるような声で言った。

すると幸桜が俺に向かって話しかけて来た。

「本当に行幸お兄ちゃんなの？」

「ああ……」

「やだ！信じたくない！」

「でもこれは現実なんだ」

「何で？何で行幸みゆきがそんな姿になったの？もしかしてやっぱり嘘とか？そうよね！ありえないもん！皆で私をからかってるんでしょ！本当の行幸みゆきなら私の誕生日とか家の住所とかあれとかこれとか全部言えるはずだよ？言えないでしょ！」

「全部……言える……」

俺はムキになって質問してくる幸桜こはるの問いに全て完璧に答えた。

「じゃ……じゃあこれは解る？私が小学校の時に好きだったぬいぐるみの名前！」

「俺がUFOキャッチャーで取ってきた茶色い熊のぬいぐるみだな。確かおばあちゃんの家に行く途中で電車の中に忘れて、お前、ずっと泣いてたよな……名前は無かったと思うけど？」

幸桜こはるはガクリと頭を垂れた。

「信じれない……何で……何で女の子になっちゃったのよ……」

「何でって…俺にもよく解らないんだ……だけど……」

俺は幸桜こはるに昨日の夜に起こった出来事をすべて話した。

第十六話【俺の妹の困惑】（後書き）

後書き人物紹介！？

リリア 年齢不詳 見た目は二十代前半

髪の色 銀色で腰まであるストレートヘア（現実世界でも同じ）瞳は透き通るような青色

身長 165センチ 行幸^{みゆき}の予想では170センチの身長だが、実はヒールで高く見えただけである。

体重 ?? キロ 容姿端麗でまるで女神？

シャルテの姉で清楚なイメージの女性で行幸^{みゆき}を自分の作った世界^{いせかい}に誘う。

魔法で仮想世界を構築できる程の魔力の持ち主。行幸^{みゆき}の妹である幸^{はる}桜が自分の世界へ転送されてしまい、責任感ですぐに世界を消してしまう。おかげで行幸^{みゆき}は男に戻る方法を聞けないで終わる。

この先の物語における重要な人物である。

第十六話番外編 【俺の妹の困惑 幸桜《こはる》編】（前書き）

幸桜視点でのおまけ小説です。

困惑する幸桜がどういうふうに行幸が女になったという事実を受け取るのかを書いていきます。

ちなみに読まなくてもこの先の展開にはまったく支障はありません。あくまでもおまけです。

第十六話番外編 【俺の妹の困惑 幸桜《こはる》編】

「うーん……」

私はゆっくりと目を開いた。

ここは何処だっけ……

あ、そうか……行幸みゆきの部屋か……

確か私は倒れていた女の人を触って感電して気を失っちゃったのかな……

「こ、幸桜？」

私を呼ぶ女の人の声が聞こえる。

誰？私は声のする方をゆっくりと見た。

そこにはさっきまで気絶していた女性ひとが起きて私を見ている。

そして何時の間にか周囲には見ず知らずの人が二人も増えている。

おかしい、この部屋は行幸みゆきの部屋なのに何でこんなに知らない人がいっぱいいるの！？

「え？な、何！？何があったの？っていう何で人が増えてるの？え？どうなってるの？確か私は体がしびれて……あれ？あれれ？」

無言だと何をされるか不安もあり、思った事を口に出してみた。

というか……本当にこの人たちは何！？

「おいみゆき？この子は何だ？お前の何なんだ？」

体格の良い男性が私を見ながら言った。それも私の横の女性に向かってみゆきとか言っている。

みゆきって何？この女性ひとは行幸みゆきと同じ名前って事なの！？

「え、あつと……こいつは俺の妹で幸桜こはるって言うんだ」

「え？い、妹！？え？この子は本当に本物の行幸みゆきの妹なのか？」

何？何を話してるの？私わたしがこの女性ひとの妹？何それ！？

理解出来ない会話が飛び交う。

そして体格の良い男の人とその横よこいる女の人ひとが私の方を見た。

って何？このみゆきとかいう女性ひとの言う事を信じて私をこの女性ひとの妹だと思ってるの！？

違う！違うし！否定しなきゃ！

「何なの？何を言ってるの！？私は貴方の妹なんかじゃなし！」

私は懸命に否定した！

というか……この人……ここまでではっきりと私を妹だと言い切ってた……

ここは行幸みゆきの部屋……

行幸みゆきの部屋でこんなラフな格好で平気でいられる……

そして私を妹だと言う……もしかして……この女性ひとは行幸みゆきの彼女

！？いいえ、婚約者かも！待って！もしかしてもう既に籍まで入れてるとか！？

だから私を妹とか言ってるの！？か、確認しなきゃ！

「も、もしかして……貴方……行幸みゆきと既に籍を入れているとか……実は……け、結婚して……それで私を妹とか言ってるとか……！」

みゆきという女性ひとは驚いた表情で私を見た。

そして上ずった声で話しを始めた。

「馬鹿か！何で俺がお前に報告も無しで結婚するんだよ！というか待て！俺に先に説明させてくれ！」

何か言ってる！俺とか言ってる！何これ？何？おまけに馬鹿とか言われた！

え？私って馬鹿？それに何？説明させてくれとか言ってるけど何の説明？わかんないよ！

もしかして……行幸みゆきとの関係の話？結婚相手は間違ってたって事？じゃあ何？何なの？も……もしかして……か、確認しよう！

「え？説明って何！？何の説明なの！もしかして行幸みゆきとの関係の話！？結婚相手じゃないとすると……友達？彼女？それとも……もしかして……か、体だけの関係とか……俗に言うセ・・セフレなの！？」

恥ずかしい！聞いちゃったよ！あーもう！顔が熱いよー！きつと顔が真っ赤なんだ！

でもこれは必要な質問なんだ！恥ずかしがっちゃ駄目だよ幸桜こはる！
って……あれ？私だけ顔が真っ赤になったのかと思ったらみんな顔が真っ赤だ……

「聞け！幸桜こはる！俺だ！今は女の姿だけとお前の兄貴みゆきの行幸みゆきなんだよ！正真正銘のお前の兄貴なんだよ！」

へ？この人……自分を行幸みゆきだって言ってる！？冗談？

「へ？嘘……貴方みゆきが行幸？」

「そうだ！俺みゆきは行幸だ！」

何これ？ドッキリカメラか何か？ありえないよ。だって行幸みゆきは女の子じゃないし、女が男になるとかありえないし。

そ、そうか……セ……セフレだって事実を突きつけられたから誤魔化そうしてるの？

だからこんなリアリティの無い嘘をついてるんだ！

「あの……」

「何だよ……」

「大変申し訳ないのですが、そのようなリアリティの無い嘘はやめて頂けますでしょうか？私なら大丈夫です！例え貴方がセフレであっても……私は……私は受け入れます……ぐす」

何か悲しくなってきたよ……行幸みゆきが私の知らない間に大人になってたなんて……

色々な事を考えているうちに段々と目頭が熱くなってきた。

やだ……涙が出ちゃってるよ……もう……

駄目じゃん、これも現実なんだからちゃんと受け取らなきゃ……

今の時代はセフレなんて当たり前にいるのよ！きつと……

「こら待て！俺はマジで行幸みゆきなんだって！セフレなんかじゃない！だいたい俺にこんなに可愛いセフレがいるはずないだろ！いたら本気で俺は喜こはるんでる！幸桜こはるならわかるだろうが！俺はゲームオタクなんだよ！モテナイ男なんだよ！彼女なんて出来ないような男なんだよ！」

な、何？まだ自分の事を行幸みゆきだって言ってるし！？ま、まさか本当に行幸みゆきとか！？

「行幸みゆきの馬鹿……」

え？立っている女の人までこの女性ひとを行幸みゆきだって言ってる……

「馬鹿って何だよ？何で堇すみれに馬鹿って言われないといけないんだ！？」

「鈍感馬鹿だからに決まってるじゃん！」

おまけに言い合いしてるし。

「うぐ…ま…まあいい…良くないけど、いい……というか、堇すみれと店長こはるも幸桜みゆきに俺こはるが行幸みゆきだって言ってくれ」

何でそこまでムキになって私を納得させようとするの？行幸みゆきが女の子になるなんてありえない話なのに……

早く戻ってきてよ行幸みゆき……幸桜こはるはもう混乱してよくわからなくなっちゃってるよ！

気がつくとも目の前には体格の良い男の人がしゃがんでいた。

な、何？私に何をする気？こ、怖いよ、体が震えるよ……

私が怯えていると、その男性ひとは笑顔で私に話しかけてきた。

「幸桜こはるちゃんだっけ？大丈夫だ、俺は行幸みゆきの働いているバイト先の店長だ。ほら、この声を覚えてないか？さっき俺と携帯で話をしたじゃないか」

え？ええええ？私と携帯で話た？あれ？あれ？

待って………そういえばこの声………聞き覚えがあるかも！

「あ！そういえば……この声！あの電話の人！？」

「ははは。覚えててくれてありがとう。でね、行幸みゆきの事なんだけどさ、ここにみゆきいる女性……本当に行幸みゆきなんだよ。嘘じゃない、本当に……」

何？嘘だよ？冗談だよ？やだ！もうこれ以上からかわないで欲しい。

「え？嘘？冗談ですよ？店長さんも行幸みゆきと一緒にみゆきなって私をからかってるんでしょ？あれ？本当の行幸みゆきは何処みゆきなんですか？」

そうよ！行幸みゆきが戻ってくればいいのよ！何処！？

もしかしてこの部屋に隠れて聞いているとか？

私は辺りをキョロキョロと見渡して行幸みゆきを探し出した。

「幸桜ちゃん……冗談ならいいんだけど……これって冗談じゃないんだよ……行幸みゆきは訳あって女の子になっちゃったんだよ……現実なんだ」

嘘……

私はゆっくりと行幸みゆきだと言われている女性ひとを見る。

すると視線が合った……そしてその女性ひとは「そうなんだよ」という意味なのか小さく頷いた。

本当なの？まさか……でも……

「え……嘘……じゃあこの女性が本当に行幸みゆきなの？」

信じたくない。本心でそう思ってる……

でもここにいる人達は嘘を言っているようには聞こえない。

ここまでして私を騙す意味も無いと思うし、騙す為に狙っていた訳でも無いと思う。

だって私がここに居るのは行幸みゆきにすら教えていない……偶然なのだから……

「幸桜ちゃん……私だって信じたくなかったんだよ……行幸みゆきがこんな姿になっちゃうなんて……」

震える声が聞こえた……

見上げると体格の良い男性の横に立っている女の人がすごく悲しそうに表情でみゆきという女性を見ている。

この女性……嘘はついてないみたい……だって本当に悲しそうだもん……

やっぱりそうなのかな……このみゆきって呼ばれているこの女性ひとは私のお兄ちゃんなのかな……

「本当に行幸お兄ちゃんなの？」

「ああ……」

この言い返し……行幸みゆきと同じじゃん……でも！

「やだ！信じたくない！」

「でもこれは現実なんだ」

「何で？何で行幸みゆきがそんな姿になったの？もしかしてやっぱり嘘とか？そうよね！ありえないもん！皆で私をからかってるんでしょ！本当の行幸みゆきなら私の誕生日とか家の住所とかあれとかこれとか全部

言えるはずだよ？言えないでしょ！」

「全部……言える……」

答えないで！否定したい！嘘だと言って欲しい！だから私は……

子供っぽいかもしれない……でも私は事実を事実だと受け取りたくなかった。

だから私はムキになって質問をした。しかし行幸みゆきは私の全ての問いに完璧に答えた。

本当に行幸みゆきなの？やだよ……まだ信じたく無い。そ、そうだ！最後にこの質問を！

「じゃ……じゃあこれは解る？私が小学校の時に好きだったぬいぐるみの名前！」

これは行幸みゆきじゃないと絶対に解らないはず！

今までの質問は事前に調べる事だって不可能じゃないもん！

「俺がUFOキャッチャーで取ってきた茶色い熊のぬいぐるみだよな。確かお婆あちゃんの家に行く途中で電車の中に忘れて、お前、ずっと泣いてたよな……名前は無かったと思うけど？」

やだ……正解だよ……駄目だ、やっぱりこの女性ひとは行幸みゆきなんだ……ここで夢だったって落ちて欲しいけど……私も馬鹿じゃないもん……これが現実だって理解はしてる……でも何でよ……

「信じれない……何で……何で女の子になっちゃったのよ……」

「何でって……俺にもよく解らないんだ……だけど……」

この後で行幸^{みゆき}は私に昨日あった出来事を話してくれた。

幸桜^{こはる}の困惑 終わり

第十六話番外編 【俺の妹の困惑 幸桜《こはる》編】（後書き）

たまにこういう別視点のオマケを書くかもしれませんが。気分次第なので期待はしないでください。
しかし幸桜は良いキャラです。（私の中で）

第十七話【俺が見た夢・男に戻るには?】（前書き）

十七話予告!?

突然の幸桜こはるの暴走!?! 幸桜こはるが起こす予想も出来ない展開に行幸みゆきは! ? 次話【俺が見た夢・男に戻るには?】をどうぞお楽しみに! っ
てこの回の予告を書いてどうするのだ:

第十七話【俺が見た夢・男に戻るには？】

幸桜^{こはる}に全ての説明は終わった。

しかし、俺の説明を聞いて幸桜^{こはる}は納得できたのだろうか？

その表情からはとてもじゃないが納得できて無いように見える。

だが事実は事実なんだ。いくら幸桜^{こはる}が信じなくても俺が今こうして女になっているのは事実。

「幸桜^{こはる}？ 納得出来たのか？」

「え…えっと……」

やはりイマイチ納得出来ていない様子だな…

「おい、幸桜^{こはる}…さっきは俺が行幸^{みゆき}だって納得したじゃないか」

「うん…でも…やっぱり…」

幸桜^{こはる}はそう言う唇をぐっと噛んだ。

そんな幸桜^{こはる}を見て俺は考えた。

もしも俺の目の前に男の子が現れて、その子が幸桜^{こはる}なんだと言った時、俺はそれを事実だと受け止められるのか？

そう俄^{にわか}に信じられるものじゃないよな…

店長や董^{すみれ}がやけに物わかりが良かっただけで、と言っても時間はかかったが…しかし幸桜^{こはる}よりは物わかりはよかった。

いや、物わかりがいいんじゃない…こいつらはアニメとかゲームとかそういった非現実世界を知ってるから、その中で起きる出来事、性転換・変身等を今の俺に起こっている事に被せて考えてるんだ。だから俺が女になった事を受け入れやすかっただけなんだろう。

「という事は……普通の人間ほど信じないって事か。と言う事は幸桜は普通の女の子なのか？」

「私……ゲームの罰とかそんな事で女の子にされるなんて……やっぱあり得ないと思う……やっぱ信じられない」

幸桜は困惑した表情で頭を抱えた。

「ねえ、本当の本当に行幸なの？」

幸桜は少し潤んだ目で俺を見ながらそう言った。

そんな幸桜を店長と堇が優しく説得する。

経緯の説明の事例がちよつとマニアックだが、その説明をずっと聞いていた幸桜も流石に納得せざるえない状況になったみたいだ。

幸桜は俺を再び見ると言った。

「信じないけど信じるよ……」

幸桜によって今日ここに意味不明な日本語が完成した……
っていかどういいう意味だよ……

「貴方はたぶん行幸！」

たぶんって何だよ……

「たぶんじゃなくって俺は行幸なんだよ」

「え……あ……じゃあ……み、行幸……」

「何だ」

「もしも今までの言っていた事が事実だとして、行幸^{みゆき}は男には戻れないの？」

男に戻る方法？それが解るならば俺も知りたい。

だいたい俺は何で女にされたのか？本当に天罰だったのか？その理由も知りたい。

誰か教えろ！俺はどうしてこうなったんだ！その時、俺の脳裏に一人の女性が思いだされた。

その女性は銀色の長い髪で、まるで天使のような女性だった。そしてもう一人：男の子みたいな女の子も思い出した。

「あれ？そういえば俺ってさっき何処か違う場所に居たような……」

俺がそう言うのと三人は『え？』という表情で俺を見る。

「何を言ってるんだ？お前は気を失ってそこにずっと横になってたぞ？」

店長が言った。

「あ…えっと…私がここに来た時にはもうリビングで横になって…で…それから色々あって…で…あ！私がその人を触ったら感電したの！」

「感電？感電……っていうかその人って言うな！お前の実の兄だ！行幸^{みゆき}だ！」

「え…だって…」

まあそんなのはいい。しかし何だ？感電？そういえば俺はアパートに戻ってからパソコンをやりつつカップラーメンを食べようとしたら…

『ゾクゾク！』と俺の体が震え上がった。

思い出した！俺も感電して気を失ったんだ！そして…そうだ！そして石造りの建物で目を覚ました！紅い絨毯が広がってた…

鮮明に蘇る記憶！

いや待てよ…あれは夢だったのか？いや違う！すぐリアルにはつきりと記憶がある。

そうだよ、夢にしてはリアルすぎる……だいたいここまで夢をはつきりと覚えているとかありえない。

そう、色や声色まではつきりと覚えている！

やっぱりさっきの出来事は夢じゃない！もしかしてさっき思い出したあの二人の女は実在するんじゃない？

「行幸^{みゆき}？どうしたの？」

堇^{すみれ}が心配そうに言った。

「俺…男に戻れるかも…」

俺がそう言うのと店長達が再び『え？』という表情で俺を一斉に見た。

「何かの条件さえクリアすれば俺は男に戻れるのかもしれない」

「条件！？何それ？何なの？お兄ちゃんが元に戻る条件って何なの？何かしないといけないの？何処か行かないとダメなの？どういう方法なの！？」

幸桜こはるが形相を変えて俺に質問を浴びせる。

「行幸みゆき、ホント！？戻れるの？ねえ！」

堇すみれは両手で俺の両肩を持つと激しく前後に揺する！

「す、堇すみれ！吐く吐く！やめてくれ！もう今日は散々揺らされたんだ！」

俺がそう言うとき堇すみれは顔を赤くして俺の両肩を離した。

でもそのお陰でまた思い出した。

銀色の長い髪の女性の名前はリリア、そしてもう一人の女の子がシャルテ！二人は姉妹だ。

そしてリリアは言っていた、『ここは：私の作った魔法世界です。今の貴方は思念体で、本当の肉体は現実世界に、貴方の部屋にいます』って。

確信した！さっきのは夢じゃない！魔法で作られた仮想世界だったんだ。

そして俺はその仮想世界でシャルテに殺されたんだ：くそ：あいっ…

じゃない！今はそんな事を思い出してる場合じゃない！

そう、あの時に俺は男に戻る方法を教えろって言ったんだ。

するとシャルテが言った。リリアが説明すると：

しかし幸桜こはるがその仮想世界に現れたからリリアは世界を消失させたんだ！

最後に言ってたな、男に戻る為にどうすればいいかを話しをしてくれるって！

「おい、みゆき？どうした？そんな真剣な顔をして考え込んで？何

が思い出したのか？」

「あ、ああ、少しね」

しかし…この事を話すべきか？

実は俺は魔法で造られた仮想世界に行ってて、そこで男に戻る方法が聞けるはずだったんだ！って…

いや…こんな事はいくら話しても信じてくれねえよな……
っていうか、余計に話がややこしくなりそうだし…ここは…

「俺が男に戻る方法…あるかもしれない…だけどまだ店長達には話せない」

「え？何でだ！？俺には話せないのか？」

店長は俺が教えない事が不満そうに俺を見る。

「まだ確信もないし方法も正確に聞いてないから」

「聞いてない？って誰にだよ？」

「まあ、そこはちゃんと解ったら話すよ」

「でも、男に戻る可能性はあるって事よね？」

すみれ
堇が真剣な顔で言った。

「可能性はあるかもしれない…」

「おい、教えてくれよ。俺達はみゆきに男に戻って貰いたいんだ！」

店長は真剣にそう言ってくれた。

しかし、やはり今は話すべきじゃない。俺はそう思った。
いや違う、心の奥にある何かが他人には教えるなと訴えかけてき
てる気がするんだ。

「店長ごめん、確信が持てないのもあるけど、きっとこれは俺以外
の人には教えるべきじゃないのかもしれない。何かが俺の中で教え
たら駄目だって言ってる」

「何だそれ!？」

「わからない」

「店長、それ以上突っ込んじゃダメだよ。行幸みゆきだって考えがあって
言ってるんだし、ここは行幸みゆきの言う事を聞こう」

堇すみれがそう言うのと店長は理解をしてくれたのか、それ以降は質問を
してこなかった。

幸桜こはるは一人無言で俺達の会話を聞いている。
そしてしばらくして店長と堇すみれはアパートを出て行った。

あれ？店長と堇すみれがアパートを出てからふと思った事が：
そう言えば……店長がすっぱー普通だったぞ？堇すみれも普通だったよ
な？

どうしてだ？今日お店で店長はかなり崩れて怪しかったのに？普
段の店長に戻ってたな……
堇すみれも普通に帰ってたというか……まあ今日は少し感情的になってた
だけだな。

俺がそんな事を考えていると部屋に残っている幸桜こはるが声をかけて

来た。

「ねえ、たぶん行幸^{みゆき}」

「……まだタブンとか言うか？」

「……じゃあ……行幸^{みゆき}かもしれない人」

「かもって何だ！まだ信じないのか！」

「ううん……信じたけど信じてないだけ」

だからそれって意味不明だって……

「で……何だよ」

「さっきの事……男に戻れるかもっていう事さ……私にも教えられない事なのかな？」

俺は幸桜^{こはる}には教えるべきかを考えた。

だが考えてみればリアは幸桜^{こはる}が仮想世界に現れたが為にあの世界を消したんだ。そう考えると例えば妹であっても教えるべきじゃないんだろうな。

「ああ、教えられない」

「そっか……」

幸桜^{こはる}はとても寂しそうにそう答えると膝を抱えてまろくなった。

「幸桜？」

幸桜は返事も無く、ただただ背中を震わせていた。

☆☆☆☆

幸桜はあれから一時間も動かなかった。しかしさっきまでの姿が嘘のように元の元気な妹に戻った。

少し話しをした所で幸桜は俺に終電が終わったから泊めて欲しいと言ってきた。

流石に俺も幸桜を一人でタクシーで帰す訳にもいかないので仕方なくOKをした。

しかし……ここで気がつくべきだった……まだ終電なんて終わってなかったんだ！

え？何があったのか？それは……

数時間前

「ごめんね、泊まる事になっちゃって……」

「いや…別にいいけど……」

「初めてだね、行幸の部屋に泊まるのって」

「そうだなっていうかさ……妹を俺の部屋に泊めるとか考えられないだろ……俺は男だしお前は女なんだぞ」

俺はそう言うと幸桜は目を細めて俺を睨む。

「何それ？それって何か変な事を考えてるの？ねえ…ねえ…」

うわ…しまった！余計な事を言ってしまったかもしれない！

俺は思わす後すだりをした。するとその拍子に俺のパソコンの横のラックへぶつかり、中に入っていた俺の秘蔵十八禁エロゲコレクションがボタボタと床に落ちた。妹の視線はそれに釘付けになる。

「え…えっと！これは違う！」

俺は慌ててラックへと秘蔵コレクションを戻す。

「ねえ、その『妹と僕の秘密の関係』って奴…何それ？」

うわあ！タイトルすっげー見られてた！それも一番見せたらダメっばいやっ！

「いや、こ、これは店長に借りてさ、まだやってないんだ」

待て！これって言い訳になってねーし！

「ふーん…じゃあ一緒にやる？」

「え？」

「冗談だよ……」

幸桜は俺の秘蔵コレクションが隠してあるラックを漁り始めた。

「待て！幸桜やめろ！そこはお前が見ちゃダメなものがいっぱいあ

るんだ！」

しかし幸桜^{こはる}は漁る事をやめない。

そして何本かの秘蔵コレクションを手にとってソフトの裏に書いてある説明を凝視している。

「ある日貴方の部屋に突然訪ねて来た女性…その女性は貴方と…」

「読むな！声を出して読むな！」

やばい…ただでさえ無かった兄としての威厳が完全に無くなった…俺はヘタリとその場に座り込んだ…

第十七話【俺が見た夢・男に戻るには?】（後書き）

作者と対談?

作者「はい、作者です。今日は主人公の行幸みゆきさんに来て頂いております」

行幸「おい作者、何だこれは？」

作者「対談です」

行幸「何の意味があるんだよ」

作者「ええと…ちよつと行幸みゆきさんの妹について質問が来てまして」

行幸「幸桜こはるに対する質問なら俺にするな! 本人を呼べ!」

作者「まあまあ…ちよつと本人には聞けないから」

行幸「むう……で? 何だよ」

作者「質問です。幸桜こはるさんは処女ですか」

行幸「ゲホ! ゴホゴホゴホ」↑お茶を吹き出す

作者「あれ? どうしたんですか?」

行幸「な、何て質問だ! っていうか俺が知るか! 何で俺がそんな事を知ってるんだよ! だいたい何の意味があるんだよ!」

作者「気になっただけです。では次の質問」

行幸「もういい! 俺は帰る! あ! 作者!」

作者「呼び捨てにしないで貰えます? これでも作者なんですから」

行幸「知るか! この台詞だってお前が書いてるんだろ!」

作者「あ、触れちゃダメな部分に…」

行幸「とりあえず俺は絶対に男に戻るよ! わかったな!」

行幸退出みゆき

作者「はい…全然対談になってなかったけど…読者の皆様、これからも宜しく願います。あと、質問とか感想とか受付てます。キヤラ個人に対しても可能ですので宜しく願います」

第十八話【俺の妹は知らないうちに成長してました】（前書き）

久々の連続投稿！一気に進む展開！果たして幸桜^{こはる}はどうなるのか？
行幸^{みゆき}の運命は！って何さこれ…

第十八話【俺の妹は知らないうちに成長しました】

「ふーん……こういうのをやってるんだ…」

幸桜^{こはる}は特に怒る事も無く平然とした表情でそう言った。

「え…つと…」

まさかここでやってないなんて言えないですよね……

「はい…一応男ですので、そういう事には興味がありまして……」

「へえ……」

「あ、でも基本はネットゲーだからさ、あんまりそういうのはプレイしないんだぞ」

これって言い訳になるのか？

「ふーん……でもさ、別にいいんじゃないの？」

「え？いい？って何が？」

「見た所はボーイズラブやガールズラブ、女装ものの要素ものは無いし、ロリコン系のゲームもないからね。でもまあ妹系があるのがちょっとあれだけど」

何だこいつ？何でそんな台詞が？っていうか良く知ってるな！？
こいつもしかして腐女子なのか？って事は無いよなあ……幸桜^{こはる}がそ

んな趣味を持つてゐるはずないし。

しかし一体どこでそんな卑猥ひわいな言葉を覚えてきたんだろうか？

※高校時代には既に全ての用語を知っていた自分の事は棚にあげております。

「妹系があるって事はさ、私の事も…」

え？事も…事も？続きを話してくれないと返事できねー！

「えっと…幸桜こはるは何を言いたいのかなあ？」

「私をあのゲームみたいな、そういう目で見てるの？って事」

うわああ！ストレートにきたああ！直球だ！しかし！これは打ち返しやすい！

「無い！無い！無い！無い！無い！まったく無い！」

「……全く？ふーん……どうせ私は行幸みゆきには女だって思われてないしね」

うお！変化球きた！うう……これってどう答えるべきだ？

俺が頭を抱えていると幸桜こはるが急に立ち上がった。

「まあいいや。じゃあ先にお風呂入ってくるね」

「え？あ、ああ……」

幸桜こはるは部屋の隅に置いてあった俺のトランクスとシャツ、バスタオルを持つとお風呂場へと向かった。って何だ？俺の下着！？何故

に！

「おい！」

「何？」

「何で俺の下着を…」

「だって着替えないし」

「いや、俺のとか使わないでくれよ…」

「私は別に気にしないから」

「いや、俺が気にする」

「ふーん…まあ気にしないでいいよ」

幸桜こはるはそのままキッチンへと消えた。

ちなみに俺のアパートはキッチンのある場所から直接お風呂に入るからそこで着替える事になる。

よってリビングとキッチンとの仕切りを閉めないとおもいきり見える。

「おい、その戸はちゃんと閉めろよ！」

「わかってるよ」

「おい、本当に俺の下着とかでいいのか？」

「いいのいいの！兄弟なんだしさ！」

イマイチ納得できないが拒みすぎてもダメだろうし…

「ねえ！^{みゆき}行幸！」

「え？あ、な、何だよ！」

「覗かないでよ？」

「馬鹿か！何で俺が覗くんだよ！お前の裸なんて見たくもねーよ！」

「え…ひどい！私だって出る所は少しは出てるんだよ？」

え？っていか何でそういう反応なんだよ！くそーこういう場合は何て返せばいいんだ？

さっきからどう返せばいいかわかんねー事ばっか言いやがって……
『そうなんだ？じゃあ見せてみろよ』……ダメだろ！見ちゃダメだろ！

じゃあえっと…

『証拠を見せろ！』……余計にダメだろ！言い方が違うだけで内容がさっきと同じじゃねーか！うわ…困った…

「^{みゆき}行幸？」

「え？」

俺が顔を上げるとそこにはバスタオルを巻いた裸の幸桜が！？^{こはる}

「ちょ！ま！おま！え？まだ俺は何も言ってないぞ！？」

幸桜は俺の慌てる姿を見てケラケラと笑いだした。

「な、何だよ！そんな格好でいるな！早く風呂に行けよ！」

「別にいいじゃん。中学校三年まで私と一緒に風呂入ってでしょ？一人暮らしを初めてから急に私に対して冷たくなったんじゃない？」

「待て！何年前の話だ！今は俺は社会人でお前は高校生なんだぞ！それに冷たくないだろ？俺はいつだってお前の事を…心配してるんだぞ…」

あー顔が熱い！はずかしい台詞を言ってしまった…

幸桜はそんな俺の赤いであろう顔を見ると再びケタケタと笑う。そして急にその笑いは止まった。

『ふう…』

妹の大きな溜息が聞こえた。

「どうした？」

「やっぱり行幸お兄ちゃんなんだね……確信したよ」

寂しそうな笑顔で幸桜はそう言った。

そうか、幸桜は俺の事を試していたのか。

まだ何処かで俺が行幸だと信じれなくて……それでわざと……

「こんな自然な会話が出来るってさ、行幸とじゃないと無理だもんね……」

今にも泣きそうな幸桜こはるの顔を見ると俺は妙に悪い事をしているという気分になった。

「ごめんな幸桜こはる、こんな事になって…」

俺は俯きながら幸桜こはるに謝った。

「ううん…別にいいよ、仕方ない事もんね…それにさ、男に戻れるかもしれないでしょ？ だったらいいよ。でも…早く男に戻ってね…」

「ああ、絶対に男に戻るよ」

俺はそう言いながら顔を再び上げる。その時！

幸桜こはるのバスタオルがバサリと床に落ちた！

「へけ!？」

俺は思わず変な声をあげて目を閉じた！がしかし…

「あーびっくりしたー！でも下着をまだ脱いでないから大丈夫だよ？」

ゆっくりと目を開くと幸桜こはるはしっかりと下着を着ていた。

それを見て俺はとて残念な気分…じゃない！よかったと思っただろ！

しかし…なんというか…下着とはいえ…

俺は思わず幸桜こはるの全身を上から下へとじっと見てしまった。

まだ大人の体になったとは言えないかもしれない…

だけど幸桜こはるは俺の知らない間に確実に子供から女になっていた。

俺はこれから幸桜こはるの成長を見届けてゆきたいと思う。

『幸桜成長記』

【完】

って終わらない！何で終わる！何で終わるのさ？俺は女のままだし！それにそんなタイトルにいつなったんだよ！

「あ、あんまり見ないでよ！恥ずかしいじゃん！」

幸桜こはるは顔を真っ赤にしてキッチンへと消えて行った。

やばい…幸桜こはるの下着姿が脳裏に焼きついてしまった。

妹とはいえ女の下着姿を生で見ってしまうとは……

あれ？冷静に考えると俺も今は女なんだよな。

という事は……ブラとかパンティーとかつけると幸桜こはるみたいな感じになるのか？

っていうか、俺って幸桜こはるより胸があるし……胸……おっぱい！？

俺は自分の胸を凝視した。

うおお！リアルおっぱいここにあるし！そうか…そうだったのか…俺はゆっくりと自分の胸を触ってみる。

うわ、やわらかい…っていうか変な感じがする…

あ…う…こ、ここを弄るとどうなるんだろ……

「あっ！」

や、やばい…思わず声が出てしまった…

幸桜こはるはまだお風呂に入ってるから大丈夫か：

となると気になるのは……

俺は自分のトランクスをじっと見る。下ってどうなってるんだろ？
実は俺はこの歳になってもまだ経験も無い。だからエロゲームや
エロサイトやエロ漫画以外であそこは見た事が無いんだよな。

俺はゆっくりと体の下腹部へと手を伸ばしてみた。そこには男と
はまったく違う何かがあった。

な、何だろう……よくわかんないけどずっとごく興奮してしま
ったぞ？

待てよ……上からじゃ良くみえねーな……鏡でもあれば見えるかな？
俺は小さな鏡を床に置くとゆっくりとトランクスを脱いだ。そし
てゆっくりと鏡の前へ……

その瞬間『ガタン』とキッチンの方から物音が聞こえた。

え？ガタン？俺はゆっくりと音のした方向を見るとそこには……

「行幸みゆき……何やってんのよ……」

幸桜こはるがいるじゃん！

「へ！？こ、幸桜こはる？な、な？え？あ……これは」

「何やってんのよ！変人！変態！」

「ま、待って！これには訳が！」

「言い訳しないでよ！さっきから見てたんだからね！やだ！お兄ち
ゃんもうやだ！」

俺の横には再びバスタオルを巻いた幸桜こはるが顔を真っ赤にして怒っ
ている。

「ま、待て！俺も男なんだ！女体の神秘が気になるというのは自然な事なんだ！」

「何が神秘よ！行幸みゆきはさっきのエロゲとかエロ本とかエロビデオとかでいっぱい見てるでしょ！」

うわ…幸桜こはるがすごい事を言ってる！？

「待った！ごめん！俺が悪かった！すまん！」

っていうか、何でこんなに怒られてるんだろ…

「駄目！許さない！行幸みゆきの馬鹿！」

幸桜こはるは右手を大きく振り上げた。

その瞬間！幸桜こはるのバスタオルがバサリと床に落ちた！
ってさっきもあつたようなシチュエーションだな…

って…え！？えええええ！？

「キャアアアアアア」

幸桜こはるは両手で胸を押さえてその場へしやがみ込んだ。

ミテシマツタ…コハルノ…ハダカヲ…

「み、み、み、行幸みゆき！あっち向いてよおお！」

俺は慌てて幸桜こはるとは反対の方向を向いた。

「ねえ……見たでしょ……」

「い、いや……見てないよ……」

「絶対に見た……」

「いや……」

「正直に言ってよ……見たでしょ……」

「えっと……いや……」

やばい………確実に見てた所を見られてた！

「言いなさいよ！見たでしょ！」

幸桜こはるは背中越しに俺に向かって怒鳴った。

「え！？あ、見た」

し、しまったあ！

『ドガ！』

部屋の中に響く重低音。そして俺の背中に衝撃が走った。
その瞬間に俺は前のめりに倒れ込む。

『ドサ！』

俯せになった俺の後ろから幸桜こはるの震えた声が聞こえた。

「さ…最低…」

幸桜^{こはる}の立ち上がる音が聞こえたと思うと、すぐに『ドン!』とキツチンとリビングとの間にある扉をおもいつきり閉める音が聞こえた。

やばい所を見られてしまった…それも幸桜^{こはる}に…

おまけに幸桜^{こはる}の裸まで見てしまった…それもありハッキリ…

っていうかさ、何で裸にバスタオルで来るんだよ？

さっきみたいに下着くらいつけてくれよ…そうすれば問題なかったじゃないか…

……そっか…俺が変な事をしてたから!?

風呂に入る寸前に気がついて物音が気になって覗いてたのか？

っていう事は全部見られたって事ですよね…

俺は少し反省した。少しであって大いに反省しないのが俺の良い所だ。

そして思った。妹の居ない日に続きはしようと…

じゃない!そうじゃないだろ!さてどうする?

幸桜^{こはる}が戻って来たら何を話せばいいんだよ…

第十八話【俺の妹は知らないうちに成長してました】（後書き）

作者と対談？

作者「はい！今日は幸桜こはるさんに来て貰いました」

幸桜「こんにちは」

作者「はい、こんにちは」

幸桜「では、そろそろ…」

作者「いや、ちょっと待って！まだ何も聞いてないよ」

幸桜「じゃあ早く聞いて下さい。私も暇みゆきじゃないんです」

作者「行幸みゆきじゃない人には冷たいんですね」

幸桜「ば、馬鹿みゆきじゃないの？私は別に行幸に優しくないし！」

作者「はいはい…そうですねっ」と

幸桜「な、何よ！質問あるんじゃないの？もう帰るよ！」

作者「あ、ごめんなさい。じゃあ質問です。幸桜こはるさんのバストは79という事はBカップですよ？女性になった行幸みゆきよりも小さいと思いますが不満はありませんか？」

作者「え？な、何ですか？その振り上げた右手は！？あ！やめ……」

作者代理です。

申し訳ありませんがこの対談はここで急遽終了とさせて頂きます。
それでは次話をお楽しみに！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2502p/>

どうしてこうなるんだ！

2011年9月30日03時16分発行